

---

# テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー3 ―そして、僕の伝説―

夕影

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー3 ―そして、僕の伝説―

### 【Nコード】

N3162S

### 【作者名】

夕影

### 【あらすじ】

とある少年《乾 衛司》は、ゲーム『レディアントマイソロジー3』を買った後、事故にあいかけた子供の代わりに事故にあってしまう。

そして次に目が覚めるとそこは――『レディアントマイソロジー3』の世界であった……。

## プロローグ（前書き）

こっちに投稿するのはこれが初となります＋  
駄文&駄作になってしまいそうですが、宜しく願います＋

## プロローグ

「「「——ありがとうございましたーっ!!」」」

——木製の道場に、多くのそんな声が響き渡る。

此処は至って普通な高校の普通の剣道部の普通な道場であり、ちょうど今練習が終わった所であった。

「おう、乾！お前、中々今日は練習にせいが出てたじゃねえか!!」

「そ、そうですか！？ありがとうございます！」

剣道部の部長の急な言葉に思わず礼をする。

僕の名前は乾 衛司>イヌイ エイジ<。高校二年で剣道部に所属しているんだけど：実力はそんなに高くはない。

言うなれば一般二年剣道生が剣道二段で僕が剣道一級。言ってる切なくなるレベルだ。

「んで、どうしたんだ？何か良いことあったのか？」

「いえ：あったというか今日はその：『発売』ですし」

「…ああ、成る程」

僕の一言に、部長が納得したように頷く。そう、今日は僕が待ちに待ち望んだ『テイルズシリーズ』の最新作、『レディアントマイソロジー3』の発売日なのだ。『レディアントマイソロジー』はシリーズでは1、2の両方をしたので、今日を待ち遠しく待っていた。

「相変わらずお前のその…『目標があれば一直線』な性格を剣道に向けられんのか？」

「はは……すいません…」

「まったく……お前今日はもう道場の掃除いいから帰っていいぞ」

衛司「……え？」

部長の不意のその一言に思わず留まる。それって…

「さっさと買いに行ってこい。部員想いな俺を有り難く思え」

「あ、ありがとうございますっ…！」

部長のその一言に礼をすると、更衣室に入り直ぐ様着替え、道場を出てゲーム屋へと向かった。

――お買い上げありがとうございましたー

店員さんの毎度よく聞く言葉をバックに店から出る。僕の手には勿論袋に入ったゲーム『レディアントマイソロジー3』

「あはは、楽しみだなー」

財布は不満足だが心は大満足な気持ちで早く家に帰って楽しもうと思ひ、自転車に乗ろうとする。

――そして気付いた。

「…ん？…あれは………」

視線の先に、横断歩道に落ちたボールと、それを拾いに行こうとする小さな子の姿が見えた。  
信号の色は…ちょうど赤に点滅しかけた。

「おーい、危ないぞー！」

流石にほおっても置けないので、とりあえず自転車を下りて子供の方に駆け寄る。大丈夫だ、このぐらいなら間に合うか。

——そんな時だ。

やけにスピードを跳ばした車が向こうに見えた。

「ーッ…もしかしてスピード違反っ!?! くっ…、早く走って!」

走りながら子供に声を上げる。子供は今気付いたのか迫ってくる車に目を合わせ、停止する。

「くそッ……間に合えええっ!!」

足に力を込めて、全力で走る。  
間に合わないか…ならッ!!

「——ッ……ごめんっ!!」

車が子供にぶつかるギリギリ手前で、子供を突き飛ばし道路から押し出す。

力加減出来なくて謝りたいけど…なんとか間に合ったか…。

——ドゴンッ!!

そう思ったのも束の間、体に強い衝撃と、視点がグルグルと代わるのを感じた後、地面に叩き落とされた。

痛いとか、そんなじゃない。

もっと鋭い痛覚が体を襲っていた。

周りから悲鳴や助けを呼ぶ声が聞こえる。

子供は……無事みたいだ。泣いてるけど…。

体を動かそうとするけど、言うことを聞かず動かない。  
そして徐々に視界が暗くなってきた。



——あ、僕死ぬんだー。なんか……意外に馬鹿みたいに冷静だなー、僕。

死ぬんならせめて……『マイソロ』したかったなー……。

——そんな考えの後、僕は……意識を落とした。

—————

「——あれ……？」

とある世界の、とある船の甲板にて、一人の少女が何かに気付いた。

「……変にカモメが多いけど……ねえー、そこに何か居るのー？」

そう遠くない海の上の一点にカモメが集まっているのを見ると、少女はそこが見える所まで歩み寄り、そこを確認する。

「……あれは……人……？」

少女が確認したのは…海面を浮かぶ、人の姿。思考が少し停止してしまうが、再起してからの少女の行動は早かった。

「…っ！？み、みんなーっ！だ、誰か人がーっ！？」

少女はそう叫びながら甲板から船内へと走っていった。

——巡り会う事のない筈の、出逢い。

——物語の幕は、開く——

## 第一話（前書き）

プロローグ投稿してみれば早くもお気に入り登録してくれた方が…嬉しい半面、『ヤベエ、俺期待にそえれんのかな…』という恐怖に追われています↑↑

## 第一話

——ああ…何だっけ？

——確か僕……車に引かれて……あれ？

——目が……開けられる……？

「——…え……？」

ゆっくりと目を開くと、見知らない天井だった。  
何んだろう、何故かこの台詞が頭によぎった。  
それにしても……此処は…？

「……何か……未来的…？」

「——あ、目が覚めましたか？」

ボーっとした意識の中、不意にそんな声が聞こえ、見てみると……

タオルを手に浮遊する青い謎の生命体がいた。

「……ゴフッ」

「え？ えっ！？ ちょ、大丈夫なんですか！？ 何か口から魂的な何かが出てますよ！？」

あ、危ない危ない。不測の事態に思わず魂的な何かが抜けてまた死にかけるとこだった。

少し落ち着いて、もう一度謎の生命体に目を向ける。小さな羽根に特徴的な体。よくよく見るとこの人(?) って……。

「あの……大丈夫ですか？」

そうだ。『レディアントマイソロジー3』の新しいマスコットの存在の……確か、『ロックス』だ。

……軽く自分の頬を引っ張ってみる。  
痛い。

「……………マジで？」

「え、あの……どうしたんですか？」

暫くボーっとし過ぎたせいか、ロックスさん（多分？）が此方を心配そうに見ていた。

い、いけないいけない。

「あ、えっと……多分もう大丈夫です。……ありがとうございます」

「いえいえ。大丈夫そうなら良かったです。大変でしたよ、いきなりお嬢様が『海に人が落ちてるーっ！』なんて言っていたら、本当だったんですから」

「そ、そうだったんですか……」

そうかー。僕、海に落ちてたんだー。……ん……『海』？

「……あのー、すいません……今、なんて……？」

「え……いや、だから……あなた、海に落ちてたんですよ」

……はい？

……海に落ちてたって……どういう事……？

確か僕……車に引かれて……なんで海に……？

って…待って…それじゃ此処って!?

「あのっ、すいません! その…此処はっ!？」

「あ、此処はギルド『アドリビトム』が拠点を置いている船、『バ  
ンエルティア号』と言います」

……マジですか。

嘘、だとも思いたいけど…目の前にロックスさんが存在している以  
上、多分本当なのだろう。

少し周りを見回して居ると、不意にロックスさんは何か思い出した  
ように口を開いた。

「あ、申し遅れました。私はロックスプリングス、ロックスとお呼  
び下さい」

「ああ…僕は乾<sup>イスイ</sup> 衛司<sup>エイジ</sup>。乾が姓で、衛司が名前です」

ロックスさんの言葉に合わせて自己紹介する。そう言えばまだだっ  
たな、うん。

「では衛司様、ですね。私は今から、あなたの目が覚めた事をこのギルドを管理している方を呼びに行って参りますね。あ、後…衛司様が着ていた服ですが…流石に濡れていたので勝手ながら私が用意した服を着させていただいてます」

「あ、いやそんな…すみません。ありがとうございます、ロックスさん」

「いえいえ。では、行って参りますね」

そう言ってロックスさんは部屋を出ていった。  
ギルドを管理している人、か。今までのからチャットとかきち…  
じゃなくてジェイドさんかな。

とりあえずベッドから起き上がり、先程ロックスさんが言っていた今自分が着させてもらっている服を確認してみる。

「……何という服のチョイス…」



自分の着ている服を見ての第一声。まあ、当たり前だよな。

気を失う前は学ランだったのに、今じゃこれは確か……『兵士のコート』装備だよ？

ロックスさん、何故予備服に『兵士のコート』？

まあ、露出が多くある服よりは大分いいですけども……。

そんな事を考えながら自分の服を暫く見ていると、扉が開く音と共にロックスさんと二人、女の子が入ってきた。初対面であるが、今まで伊達に『テイルズシリーズ』のゲームは手をつけているのでパツと見ただけで分かった。

「目が覚めたようね。体調は大丈夫かしら？」

「…あ、はい。なんとか大丈夫みたいです」

片方の水色の髪をした女の子が問い掛けてきたのでそう答える。

確か彼女は……………

「私はアンジュ。アンジュ・セレーナよ。一応、このギルドを管理者でもあるわ。よろしく」

そうだ。確か『イノセンス』のアンジュだ。

あれ、でもアンジュが管理者って……あれなのかな。チャットは空気なのかな。いや、まあいるんだろうけど。

「?どうかしたかしら」

「あ、いえ。何でもありません。僕は乾 衛司。姓が乾で名前が衛司です」

考えこんでたらアンジュに少し不思議そうに聞かれたので慌てて自己紹介をする。

「そう。じゃあ衛司ね。…驚いたわよ。いきなり海に人が浮いていたんだから……。お礼ならたまたま見つけてくれた彼女にも言うておくことね」

アンジュはそう言うのとアンジュの後ろに居るもう一人の桃色の髪の子を指差した。

…と、言うところ…もしかして彼女が……。

「あ、はじめまして。私はカノンノ。カノンノ・グラスバレーだよ。よろしく」

そう、確か『今作』のカノンノだ。

「あ、うん。僕は乾　衛司。えっと…拾ってくれてありがとう」

「あはは、別にいいよ。でも、いきなり海に人が浮いてたんだからびっくりしたよ」

僕の言葉にカノンノは少し苦笑して答えた。

まあ、当たり前だね。いきなり海に人が浮いてるんだし。

「とりあえず、落ち着いたようだし…此処は船でもあるから、行きたい街があれば良かったらそこまで送るのだけど…」

「え……」

アンジュの唐突な言葉に少し戸惑ってしまう。

確かに船だから当たり前なお言葉ですけど……正直全然街について分からないし、それにいざ街に行っても元の世界に帰れる訳でもないし……でも、今それを言っても信じてもらえる事は……無いよね。

「……? どうかしたかしら…?」

「あ、いえ…その……気持ちは嬉しいんですけど……僕、自分の名前以外の事は上手く分からなくて…」

不思議そうに此方を見るアンジュにとりあえずそう答える。  
一応、間違っではない。

「……それってもしかして」

「……そうかもしれませぬ、お嬢様」

すると、三人が何か深刻そうな表情をし、アンジュの後ろからカノンとロックスさんの声が聞こえた。

「……? どういう事だろ…。」

そのままアンジュは此方を見ると、口を開いた。

「――あなた、もしかして記憶喪失なのかしら…?」

「……あるえー…?」

アンジュの言葉と同時に後ろのカノンとロックスさんが深刻そうな表情のまま此方を見ている。

記憶喪失、か…何か歴代ディセクターと同じ扱い受けてるような…

…。

……でも、今はそう言うしかないのかな。

「…はい、多分……そうみたいです」

「そう。なら仕方ないわね。記憶の無い状態でどこかの街に出したら、それこそ危険ですもの」

僕が頷いて答えると、アンジュは溜め息を一つ漏らしてそう言う。そして、少し考える仕草を見せると何か思い付いたように、アンジュは僕を見た。

「……そうね。なら、記憶が戻るまでこのギルドで働かない？働いてさえくれば、ちゃんと衣食住ついた待遇をするわよ」

「…え……」

アンジュのその言葉に僕は当然だが、彼女の後ろのカノンノとロックスさんも驚いた表情をする。

「そ、そんな……でも…」

「そ、そうだよ！アンジュの言うとおり、一緒に働いてみない！？ギルドは基本、何でも屋だから、もしかしたら依頼場所で何か思い出すかもしれないし！」

「そうですね。お嬢様の言うとおりです。それに、その方が何も知らず街に出るよりは安全だと思いますよ」

畳み掛けるようにカノンノとロックスさんがそう言葉を出してくる。

ここまで言われると逆に断れないよな……。

「……もしかしたら僕、スツゴく弱くて使えないかもしれないよ……？」

「あら、それを決めるのはアナタじゃなくて、私達よ。ここは実力とかじゃなくて、結果で物を言うんですもの」

再確認のような僕の言葉にクスクスと笑って答えるアンジュ。

適わないなあ……わかってたけど。

「……お言葉にあまえて記憶が戻るまでの間、よろしく願いします」

「ええ、此方こそ、ね」

深々と礼する僕にクスクスと笑って答えるアンジュ。その後ろでどこか嬉しそうに笑うカノンとロックスさん。

こうして、訳も分からずこの世界にきた僕の……『レディアントマイソロジー』が始まった。

## 第一話（後書き）

グツダグダですよね、分かります↑↑

多分次話では既に船にいるメンバーとの自己紹介云々は無いと思います。

だってあの人数書くのめんど（ry↑



## 第二話（前書き）

※戦闘がちょこつと、本当にちょこつとありますが、文が荒いです↑

※後半、文が適當になっているかもです。

嗚呼、文才が欲しいorz

## 第二話

——ルバーブ連山

『クキヤアアアアッ!!』

「くうっ…! せいっ!!」

衛司は斧のような嘴を振り落としてきた鳥型の魔物『アックスビーク』の攻撃を何とか手にした木刀で受け払い、隙ができたアックスビークの腹へと突きを放つ。

『クゲッ!? クキヤキヤアアアッ!!』

衛司の攻撃は見事にアックスビークの腹に入り、アックスビークは一旦怯み、奇声を上げると攻撃体制に入ろうと上空に飛び上がる。

そして攻撃に移ろうとした瞬間——

「そこだ、ライトニング!!」

声と共に上空に上がったままのアックスビークに雷が落ち、アック

スビークは高い奇声の後、消えていった。

「――…ふうー…ナイスアシスト、カノンノ」

「ん、ナイスサポートだよ、衛司」

カノンノに振り返ってそう言い合うと二人でハイタッチした。

――

「――…よし、これで終わりかな。…それにしても」

山道を歩いていると隣を歩くカノンノから不意に声が掛かり、「ん？」と声を出しカノンノを見る。

「衛司も大分仕事に馴染んできたね」

「んー…まあ、ね。当初が当初で酷かったから」

微笑んでそう言ってきたカノンノに小さく苦笑で答える。

そう、今でこそアックスビークに勝てたが、本当に当初は僕はダメであった。

「あはは……あれは……仕方ないよ。うん、記憶が無い状態だから、闘うのが初めてだったんでしょ？」

「うん。でも……だからと言って……オタオタに惨敗なんて……」

僕のその一言でカノンノも思わず苦笑いしてしまう。

そう、先程言ったように……僕は初めての依頼である『オタオタ十匹討伐』の際、オタオタ約四体に俗に言う『フルボッコ』され、痛い目にあった事がある。

流石にオタオタにフルボッコされた時は本当に死にたくなった。

幾ら現実で剣道を習っていたとは言え僕の実力は言うなれば『下の下』。それに幾ら抗おうと剣道はあくまで剣『道』であり、剣『術』とは違い、不殺の……此方で言うなれば所詮『叩き合い』。いつもはゲームで簡単だと思っていた戦闘も、リアルでやれば恐ろしいくらい、オタオタの強さが分かった。

オタオタ苛め、ダメ、ゼツタイ。

そして、今僕が心から泣きたい理由は『コレ』だ。

「し、仕方ないよ！それに武器が……ほら……」

「……木刀だからね」

そう、『木刀』。『木刀』と書いて『ウッドブレード』とも呼べる代物。別に仕込み刀な訳でも、特殊な能力が着いている訳でもない、敢えて言うなら強度高めの木刀である。

ロックスさん曰わく、僕が海に浮かんでいる時、大事そうに握っていたそうだが、初めてみる木刀だし。どんな理由だろうと魔物相手に木刀は無いと思う。

「――：それでも、今戦えるのってやっぱり：」

「うん……。師匠達のおかげ、かな」

小さく首を傾げて言い掛けたカノンノに苦笑してそう答える。

師匠、とは：僕がアドリビトムに來た時点でギルドにいた、『ファントジア』のクレス・アルベイン、『ディステイニー』のスタン・エルロン、『レジェンディア』のセネル・クーリッジ、『シンフォニア』のクラトス・アウリオンの事だ。

何故師匠か、というと：無論、オタオタにフルボッコされた僕を見るに耐えかねた結果である。おかげ様で、自分で言うのは何だけど：まだまだ実力は浅いがギルドで上手くやっていけるようにはなってきた。

セネルには驚いたな――。『お前の攻撃は型になりすぎて、俺の知り合いより分かりやすい』って、避けられてフルボッコされたもん。

「……衛司、なんかかなり遠い目してるけど…大丈夫？」

「ゴメン、なんか色々思い出して泣きたくなってきた。…とにかくこの話は切り上げよう。お願いします」

「…なんかゴメン。それじゃ、早く船に戻ろっか」

二人で苦笑しいい、カノンがそう言って再び歩き出そうとした所であった。

——…突如、僕達の上空を大きな光が飛んでいった。

「…!?!? 今の…何だろ…?」

「まさか…とにかく行ってみよう!!」

不思議そうに光が飛んでいった方向を見ていたカノンノの手を取り、その方向へと走り出す。

何かカノンノが驚いてるみたいだけど、気にしない。

もしかしたら…あれが『今作』の…??

——ルバーブ連山『ルバーブ峠』

光が飛んで行った場所に着くと、まるで僕達を待っていたかのように、光はその場所で止まり輝き続けていた。

「何だろう……あれ……？」

「とりあえず、近付いてみよう」

僕の言葉にカノンノは頷くと光が輝き続けている元へと歩みよる。

「……あれは……」

「人……だ！？空から人が降りて……」

そう、『やはり』光の正体は人であった。つまりあれが……『今作のディセンダー』。

ゆっくりと降りてくる者を僕が抱き抱えるように受け止め支える。

流れるような長い金の髪、小さく整った顔立ち。服装はどこか和風な……ぶっちゃけると『朱雀の衣』装備。よくよく見れば……降り

てきた『ディセンダー』はどうやら『少女』らしい。

「衛司……その子…」

「……大丈夫。ちょっと眠ってるみたい。とりあえず、目が覚めるまで待ってみよう」

心配そうに眠る少女を見るカノンノにそう言うのと近くの平らな場所にゆっくりと少女を寝かせる。

……とりあえず…遂に原作スタートって訳か。

――

「―あ……衛司！目が覚めたみたいだよーっ！」

暫くして、カノンノのそんな声が聞こえ近付くと、先程の少女が目を覚まし不思議そうに此方を見ていた。

「もう大丈夫？驚いたよ、だって空から降りて来たんだもん。あれは、何かの魔術なの？」



「……魔、術……？」

「違うの？私、スゴイ魔術で空を飛んだのかなあって思ったんだけど」

「はいはい、カノンノ。目が覚めたばかりなんだし……あんまり質問攻めしないでおう」

「あ、そうだね。…そうだ。私はカノンノ。カノンノ・グラスバレーだよ。それで、コッチは衛司、乾 衛司。あなたは？」

「…カノンノ……衛司……私……メリア」

少女、メリアはカノンノと僕を交互に見て僕達の名前を復唱した後、自分の名前を言った。

「メリア…か。中々良い名前じゃないか。…とりあえず、目が覚めたようなら早く山を降りよう。魔物出るからね」

「ん、そうだね」

「……………」

僕の言葉にカノンノは小さく頷き、メリアは小さく首を傾げていた。

――

山を降りていると案の定、橋の前を魔物『オタオタ』が一匹塞いでいた。うん…………トラウマだ。

「あっちゃあ…、魔物だ」

「あの様子は…………通してくれそうに無さそうだね」

その場から動かずに此方を見ているオタオタに僕とカノンノが苦笑いしながらその言葉を出す。

そう言っていると、不意に服の袖を引っ張られる感覚に振り返ると、メリアが此方を見て、短剣のようなものを出した。

「…………私…武器、持ってる」

「メリア…闘う、って言うの…?」

「……………（コクリ）」

メリアのその一言に僕が言うと、メリアは小さく頷く。短剣って言う…職業は盗賊、かな?

「ホント!?じゃあ、私と衛司もサポートするから、ここは頑張ろう!」

「カノンノ…君って密かに戦闘狂だったりする?」

「え?…何で…?」

「いや、いいや。じゃ、メリア。僕とカノンノも最低限サポートするから、頑張って行くよっ!」

「……………!（コクッ）」

僕の言葉とメリアの返答を合図に僕達は武器を手に取り、戦闘を開

始した。

——簡単に結果を言おう。メリアの一撃で一瞬で片が付いた。戦闘開始、確かに僕の隣を走っていたメリアが突然消え、一瞬でオタオタを切り裂いた。

これで判明した事は彼女の職業は『盗賊』や『海賊』ではなく『忍者』である事。

そして彼女がかなり強い事。

よくゲームでは主人公であるディセンドーは強い、と言われていてその具体性は分からなかったが今回でよく分かった。

正直、オタオタに苦戦している自分が泣きたくなるぐらい。

「メリア……スツゴく強いね！」

「……………そう…?」

「うん、そうだよ！あ、衛司、そろそろ船が到着する時間じゃないかな？」

「ん、ああ、もうそろそろだね。なら、少し急ごうか」

カノンノが思い出したように言う。僕は頷いてそう答える。正直言う、もう軽くオーバーしてるんじゃないかな？

「あ、船に乗ったら、メリアの希望する場所へ送ってもらえる様に伝えるから」

「……希望する、場所……？」

「うん。どうかしたの？」

「……………」

カノンノがメリアを見て言う。不思議そうな表情をしたままのメリアにカノンノが首を傾げる。

此処は…僕がフォローする場所かな？

「……もしかして、だけど…メリアは何処に行けばいいか分からないんじゃないかな？」

「……………（コクリ）」

「ええっ！？それって……。そ、それじゃあ、どうしようかな」

僕の言葉にメリアも理解出来たのか頷くのをカノンノが見ると驚き、困惑する。

「……とりあえず、船まで連れて行こう。もしかしたら、アンジュが何か考えてくれるかもしれないし」

「ん……そうだね。メリアもそれでいいかな？」

「……………（コクコク）」

「ん、それじゃあ、行こう！」

僕の提案に少し考えた後、カノンノは頷くとメリアに問い、メリアの反応を確認するとそう言って再び山を降りる事になった。

その後、度々現れるオタオタを相手にするも、なんとか無事船の到着場所である下流へと付いた。だが案の定、船の姿はまだ無かった。

「――あれ？まだ船が到着してない」

「意外に僕達の方が先だったみたいだね」

「……ねえ、衛司。ひよっとしたらメリアって……」

「……多分、記憶喪失だろうね」

不意にカノンノが言ってきた言葉に先にそう言葉を出す。まあ、『あくまで』理由が分かっている僕はそう言うしかない。今、『彼女はディセNDERなんだよ』なんて言って通じる訳でも無いし、それに、まだ確実に彼女がディセNDERだ、とは言い切れないからだ。その彼女は現在、下流を流れる川を物珍しそうに眺めている。

「理由は全然分からないけど……やっぱりあの時メリアを包んでいた光に原因があったりするのかなあ」

「どうだろう、ね。……あ、船が来たんじゃない？」

「あ、本当だ！」

不意に耳に届いて来た機械音に空を見上げると、ゆっくりと僕達の乗る船兼ギルド『バンエルティア号』が降りてきていた。

「カノンノに衛司、二人共お疲れ様。あなた達が魔物を討伐してくれたお陰で、ペカン村の人達の移民は無事に済んだわよ。ところで、そちらの女性は？」

船に乗り、アンジュに依頼が終わった事を伝えた後、そう言われるとアンジュは僕達の後ろで船の中を物珍しそうに見回しているメリアを見てそう言ってきた。

「彼女とは、ルバーブ連山で出会って……」

「それじゃ、自己紹介からね。私はアンジュ・セレーナ。あなたの話を聞いてもいいかな？」



「……アンジュ…私、メリア。……その……あの……」

「あー。……詳しくは分かる範囲で僕達が説明するよ。実は――」

笑顔で問うアンジュに少し困惑しながらメリアが説明しようとするも上手く説明できなかったみたいなので、僕とカノンノが何とか見てきた内容で説明する。

「――そう。記憶が無いなら、どこに行っていいかもわからないよね。――記憶が戻るまで、ここに置くのは構いません」

「え、いいの、アンジュ？」

「ええ、当たり前じゃない。それに、衛司も記憶喪失なんだし、一緒にいてあげてたら案外、衛司の記憶も戻るかも知れないでしょ？」

――ああ、そう言えば僕そうだったっけ。最近ギルドに馴染みすぎてその事スッゴク忘れてたんですけど。

「でも、話を聞く限り体力には自信がある様だし、働いてもらいましょうか。それじゃあ、今からあなたをギルド『アドリビトム』の一員として迎えるね」

こうして、ディセンダー（であるであろう）の少女、メリアはアド  
リビトムへと入った。

——そして、物語の齒車は廻り始めた——

## 第二話（後書き）

グッダグダですよね、分かります↑↑

嗚呼、本当に文才が欲しいですorz↑

後、これでストックが切れたので、次回から更新が安定しません；；  
本当にすみません；；

でも、更新は必ずしますので、宜しくお願いします+

後次回は繋ぎでオリキャラ設定になるかもです+

## オリジナルキャラクター設定（前書き）

前話にて予告していたように、オリジナルキャラクターです＋  
べ、別に次話に詰まってる訳じゃないんだからねっ！？↑↑

……すみませんしたorz↑

※後半ネタに走っています、ご注意ください↑

※もし本編でまたキャラクターが増えようもんなら更新するかもしれません↑

## オリジナルキャラクター設定

名前…乾 イヌイ エイジ 衛司

性別…男

年齢…17歳

一人称…僕

容姿…至って普通な黒で肩までの髪、瞳の色も黒。顔立ちは平凡的な中の中。服装は現在『兵士のコート』装備一式。

身長…リオンより少し高め

職業…学生／剣士

詳細…

本作の主人公。元普通の高校生の普通の剣道部員。『レディアントマイソロジー3』を買った直後、子供の代わりに事故にあい、『レディアントマイソロジー3』の世界に迷い込んでしまう。

一応『テイルズ』シリーズについての知識はあるが、今回は発売日、しかも買った直後であった為、『レディアントマイソロジー3』についての知識はせいぜい公式サイト少量程度。

戦闘については剣道を習ってはいたものの、実力は少なく、当初は『オタオタ』にフルボッコされる程。現在はクレスやスタン、セネルやクラトスのおかげもあって、頑張ってウルフやローパーなら倒せる辺り。

特技も虎牙破斬や散沙雨等見様見真似程度で覚えたが、魔神剣や魔王炎撃破等は依然無理らしい。

武器は木刀。少し硬度が高いだけで他に特に深い事はない。

名前…メリア

性別…女

年齢…不明（外見年齢は15、16程）

一人称…私

容姿…背中まである長い金髪で、赤い瞳。顔立ちは良い。服装は『朱雀の衣』装備一式

身長…カノンノと同じ、もしくは少し下

職業…ディセンドー？／忍者

詳細…

突然、衛司とカノンノの前に光に包まれて現れた記憶喪失の謎の少女。衛司は『ディセンドー』と考えているが真相はいまだ不明。基本あまり喋る事は少ない。初めて会った人物でもあってか衛司とカノンノに懐いて(?)おり、よく二人についている事がある。

戦闘については武器の短剣と忍者としての気配遮断、スピードを利用した一撃必殺型。仕留められなかった場合はヒット&アウェイな戦闘スタイルを見せる。

実力は普通に高い。現在は『クラトスとともに闘えんじゃね?』レベル。

出演予定オリジナルキャラクター

名前…ロッタ



その見た目とは別に結構フrendリーな性格持ち。衛司のことは何処か気があったのか兄弟と呼んでくる（本人の許可無し）。  
何気に暑い。決してソッチの人ではない↑



### 第三話（前書き）

かなり急拵えでなんとか投稿できました+

まあ、切り方が中途半端ですが……;;

今回は、ぶっちゃけ傭兵のターンです↑↑

### 第三話

「――コンフェイト大森林の調査？」

「そ、出来ればアンタにも着いてきてもらいたいんだけど」

食堂でロックスさんが作ってくれた朝食を食べていると、目の前でケーキを食べている王冠を被った少女、ロッタがそのフォークの矛先を僕へと向けてそう言い放ってきた。

ロッタは『マイソロ』をやってて良くしっていた傭兵キャラクターである。今作も居るんだろうなー、とは薄々考えていた。

決して嫌いな訳ではない。むしろ好きなキャラクターである。

「いや、別に構わないんだけど……何で今更コンフェイト大森林で調査を……？」

「依頼者はあの森に住む木こりさんよ。何でも、最近コンフェイト大森林の様子がおかしいとかなんとか」

「様子がおかしいって……？」

「何でも……生息しない筈の魔物を見掛けるようになったとか、魔物

が活発化してきたとか、草木の成長がおかしいとか…」

「成る程…確かヴェイグとクレアの故郷のヘーゼル村、だったけ。確か…コンフエイト大森林から近いよね？」

「ええ、今はウリズン帝国に占拠されちゃってるけど……。つまり  
ホスチア  
……星晶ね」

ロッタの説明を聞き、僕が少し考え気付いた事を言うとなんとも理  
解出来たのかそう呟いた。

ホスチア  
星晶——教えてもらった程度だけど…：ようは世界樹の《マナ》と似  
たような物らしい。その星晶のおかげで産業が発展してるみたいだ  
けど…：さっき言ったヴェイグ達の村のようにその星晶を巡って国が  
動いてるらしい。

よくある…：自分の国を発展させようとする国の暴走だ。

「…アンタはもしかしたらその星晶になんかあるかも、て考え？」

「…うん、気がする程度だけ」

生憎悲しい事に、僕は原作を買って直ぐに車に当たっちゃって原作  
未プレイ状態だから、本当に原因がこの星晶なのかは分からない。

「…まあ、そんな難しい事私達が考えるだけ無駄よ、無駄。そういうのはウィルや新しく入ったハロルドみたいのが考える事よ。私が聞きたいのは結局アンタが来るか来ないかよ」

そういう言って再度、ビシツという効果音が付きかねんばかりにフオークの矛先を僕に向けるロツタ。

何故だろう、なんか怖い。

「うーん…。いや、だから別に構わないんだけど……その調査依頼って他に誰かに声掛けてるの？」

「今んとこアンタだけ」

なにそれ、怖い。

「僕だけって…そんな危険そうな依頼に何で僕だけ…」

「しょうがないでしょ。他の人達殆ど別の依頼行ってるし。危険そうなの、って言っても調査程度ならすぐ済むわよ。……それに……」

「ん……?」

苦笑いしながら言った僕にロッタがそう説明していくと、最後の方で僕から顔を逸らして何かブツブツ言っている。

「……何でもないわ。それに、なんかあったらアンタは私が守ってあげるわ」

「うーん……。それって本来男の僕が言うべき台詞だよね……」

「でも否定出来ないでしょ？」

「うん。正直否定出来ません」

あれ、何でだろう。目から汗が出てるや…。

そんなこんなで…何かコンフェイト大森林の調査に付き合わされる事になった。

「——ところでさ、ロッタ。そのケーキ一体何皿目？確か僕が食べ始める前から居たような気が……」

「……………パンが無ければケーキを食べればいいじゃない」

「いや、パン今僕食べてるから」

——コンフェイト大森林

——あの後僕達は準備を整え、現在コンフェイト大森林を探索しているのですが……

「——……なんでアフロ（ヴォイト）が居るのよ」

「はははっ！細かい事は気にすんなよ、ロッタ！」

同行メンバーが一人増えました。

今僕の隣で不機嫌そうな表情のロッタに対し、ニヤリと笑みを浮かべている頭のアフロが個人的過ぎる男剣士、ヴォイト。

彼も確か『マイソロ』では結構有名な傭兵キャラクターだ。特に…頭が。

「ちょっと……何でヴォイトがついてきてんのよ？」

「いや、それが……………」

「兄弟が困<sup>ブラザー</sup>ってんのを助けんのに理由があるか？」

「……………こんな感じです」

「…………頭痛いわ」

ロツタの問いに答えようとした所、ヴォイトからのその一言にロツタは額を抑えて溜め息を吐いた。

因みに兄弟<sup>ブラザー</sup>とは、僕の事らしい。何故か知らないけど。

「で、でもほらっ！人手は多い方がやっぱりいいでしょ？」

「それはそうだけど……………そうね、アンタはそういう奴だったわね…」

僕の言葉にロツタは何か思い出したように呟くと、呆れた様子で再び溜め息を吐いた。後、小さく「…………馬鹿」と聞こえたのは気のせいだろうか…。

「…………おかしいわね」

森の中をある程度歩いていると、不意にロッタの口からそんな言葉がもれた。

「…………？おかしいって…？」

「もう大分歩いたのに今私達、ウルフやローパーはおろか、プチプリやチュンチュンにすら当たって戦ってないのよ？」

「そーいやそーうだな。…いくら戦闘がないとはいえ……モンスターの姿が一匹も見えないのはおかしいな」

ロッタの言葉にヴォイトも頷く。

確かに今、僕達は戦闘を行っていないどころか…魔物の姿を森に入って一度も見えていない。何時もは結構見たり戦ったりする筈なのに……。

「……………こーうも静か過ぎると何だか不気味ね。早く調査を済ませて帰るわよ」



「そう、だね……。何か嫌な予感がしそうだし……」

僕のその言葉と同時に、三人の歩く速さが自然に変わった気がした。

――

しばらくして着いたのは、一度ヴェイグ達に教えてもらった、ウリズン帝国が星晶を採取している場所であった。そこで見たのは……

「これは……一体……」

「……酷い有り様ね」

周りの草木が枯れ果て、地面には大きなひび割れ等が見えた……まるで其処だけこの森から切り離されているような姿であった。

「……こりや大分枯れてんな。多分こんなじゃもう二度と花は咲きそうにねえぞ」

「……魔物が出なかったのもこれが原因なのかな」

「……採れるだけ穫って後はポイツ、ね。何とも帝国らしいわ」

暫くその場を見回して僕達の口から出るそんな言葉。これが……国のやる事なんだ。

「……正直キツいわね。……調査は終わったわ。早く帰りましょう」

ロツタが口早にそう言った。確かに……この場所はあまり長く居たいとは思わない。

「……そうだね。じゃ、早く――」

『帰ろう』、と言いかけて言葉が止まった。  
何故か。それは至って簡単だ。

僕達の来た道に、『ソレ』は居たからだ。

青い巨軀。鋭く研ぎ澄まされた牙や爪。

僕が此方に来て、今までで一番……『勝てない』と圧倒的に知らされる姿。

そしてそれはまるで……獲物を見つけたかのように大きく吼える。

——凶竜『ケイプレックス』はそこに存在していた——

### 第三話（後書き）

先ずは一言、中途半端すんません……orz

戦闘は書くと長くなりそうなので、次話にしようと考えた判断です……；

まあ、第一に自分に上手く戦闘が書けるかが一番の問題なんですが……orz↑↑

とにかく、早く更新出来るよう頑張りたいです……；

## 第四話（前書き）

更新遅くなり申し訳ありませんでした；；

戦闘を書き直す事数回、会話を書き直す事数回、現実逃避にスパロボに走る事数回↑↑

悪いのはスパロボだ！ ↑↑

本当にすみませんでした；；

そしてこんなに待たせて酷い戦闘文ですみません…；；

嗚呼、文才が欲しい…orz

## 第四話

GYA  
OOO  
OOO  
OOO  
OOO  
OOO  
OOO  
OOO  
OOO  
OOO  
OOO  
OOO

目で吼える青い巨躯の恐竜『ケイプレックス』。その姿はまさに  
 今、『蹂躪』という言葉が似合うであろう。

「……ねえ、ロツタ、ヴォイト。あれ……勝てたりする？」

「はははっ……ブラザー、中々面白い事いうじゃねえか」

「……珍しく同感ね、ヴォイト。はつきり言うわ………今じゃ『無理』よ」

木刀、劍、杖。僕達は武器を手にもロツタとヴォイトの言葉と同時に、此方に近寄ってくるケイプレックスに後退りしてしまう。

「……おいおい、かなり絶体絶命だな、今」

「馬鹿言ってる場合？さっさと逃げないとマジでヤバイわ……」

「逃げるつつつても唯一の逃げ道は奴さんが塞いでんだぜっ!？」

ヴォイトの言うとおり、僕達が来た道は今ケイプレックスが立ちふさがっている。

背後は枯れ果てた草木と大地で作られた行き止まり。正に、背水の陣だった。

「……一瞬でも隙作って逃げるか、怯ませて倒して逃げるか、なんとか頑張って倒すか、かしら？」

「おいおい、どれも簡単に言っただけの事じゃねえーよ!!」

ロッタとヴォイト一見落ち着いているように見えるけどその表情とは裏腹に現状に混乱しているように口論になりそうになる。

何か方法を……ケイプレックスを一瞬でも怯ませて、逃げ切る方法………そうだっ！

「ねえ、ロッタ!『フォトン』を結構大きめの威力で唱えたりできる!？」

「え…あ、一応、詠唱が普通よりは掛かるけど…そんなんでアイツが倒せる訳なんて……」

「ううん、唱えられるならそれでいいんだ！詠唱までの時間は僕とヴォイトが作る。フォトンを唱えた後にも考えがある。だけど……上手くいくかは——」

「いや、俺はいいぜブラザー。それしか方法はねえんだろ？」

「……そうね、どっちにしろ死ぬかもしれないなら…やった方がマシよ」

僕の言葉に決心したように杖と剣を構えるロッタとヴォイト。  
二人共……。

「……よし、それじゃ……行こうっ!!」

僕の声と同時に、僕とヴォイトが武器を手にケイプレックスへと走り出し、ロッタは詠唱を開始した。



「うおおおおおおおっ!!」

『GYAOOOOOOOOO!!』

僕とヴォイトの接近に対し、ケイプレックスは吠え、尻尾で風いくる。

僕はそれを下に、ヴォイトは上に避けると、ケイプレックスに向けて武器を奮わせる!!

「虎・牙・破・斬っ!!」

「裂空斬っ!!」

僕が下から切り上げ、切り落とし、ヴォイトが跳んだまま回転し、ケイプレックスへと攻撃を直撃させる———が……

———ガキンッ!!

確かに決まったそれは、ケイプレックスの肉を裂くことは愚か、皮膚を傷付ける事は無かった。

「くそっ！ 分かり切ってたけど、やっぱり木刀じゃ無理あるか！！」

「チィッ！！ ブラザー、避けろっ！！」

自分の武器にばやき、ヴォイトの声にその場から退くと、ケイプレックスの爪が奮われ、僕が居た場所に大きな爪痕が残る。

「っ……流石ケイプレックス…まさか武器が効かないなんて……」

「ブラザー…こんなんで本当に大丈夫なのかよ…っ！」

「少なくとも…今はロッタの詠唱待ちだ、よっ！！」

ヴォイトと言葉を少し交わせた直後、今度は叩き落とすかのように振り落とされてきた尻尾を左右ずつに別れて避ける。

「傷一つ付かないなら……ヴォイト、脚を狙おう！！」

「脚いつ!?!」

「いくら傷が付かなくても少しくらいダメージがある筈だよ!それなら、脚を一点集中で止めるんだっ!?!」

「なるほど……OKだ、ブラザーっ!?!」

二人で駆け出し、奮われる尻尾や爪をなんとか避けながら攻撃箇所を目指す。

狙うは……右脚!?!

「いっけエツ! 散・沙・雨ッ!?!」

「うおおおおおおおっ! 秋沙雨ッ!?!」

手数で勝負、と言わんばかりに右脚の一点に向け、僕とヴォイトの連続突きが放たれる。

そして……

『GYAOOOO!?!』

短い悲鳴の後、ケイプレックスは右脚から崩れる。だけど、これだけじゃ、すぐ戻る。

「ロッタアッ!!」

「ナイスタイミングよ、アンタ達ッ!! くらいなさい… フォトン!!」

僕の声に、ちょうど詠唱を終えたロッタの声が続く。放たれた光の魔法、フォトンは大きな円を作り、爆発し、眩い光を作る。

『GYA!?!』

そう、僕の狙いはこれだ。あくまで威力大のフォトンは攻撃に使うのではなく、目眩ましのものだ。ケイプレックスが怯んでいる内に、先にロッタを逃げ道へと走らせる。

そしてこのフォトンも一つの保険のような物。僕とヴォイトはロッタが逃げてる内に走り出し、怯んでいるケイプレックスへの距離を零にする。そして、僕は木刀を全力で前へと突き出し、ヴォイトは右腕に力を溜め込み、それをケイプレックスへと全力で放つ!

「はああああああっ！瞬・迅・剣ッ！！」

「獅子ッ戦吼！！」

青い巨軀へと直撃する全力を込めた、突きと獅子型の気の塊。  
ケイプレックスは悲鳴と共に吹き飛ぶと、近くの木へとぶつかり倒れる。

「ハア…ハア……ヴォイト、今のうちにッ！！」

「おうッ！逃げるぞっ！！」

ケイプレックスの様子を確認した後、来た道（逃げ道）へと向けて走り出す。

ケイプレックスは倒した訳じゃない。と、言うかあれで倒れる訳ないだろう。

今はケイプレックスがのびてる内に逃げるのが最優先であった。

————コンフェイト大森林入り口

「ハア…ハア……なんとか、逃げ切ったわね……」

「ハア……ハア……うん。ここまでくれば…ハア…もう大丈夫だね……」

「ゼエ……ゼエ……しばらくはもう来たくねえぞ……」

入り口の前に三人でその場に座り込み、肩で息をしながらそう言い合う。

正直今回は本当に危なかった。ヴォイトの言うとおり本当にしばらくはコンフェイト大森林への依頼は受けたくない気分だ。

「ハア……それにしてもケイプレックスって……本当ならもっと森の奥にいる筈なのに」

「……やっぱり、あの採取後になんかあるのかな」

「さあな…。兎に角、あんなんが居た以上、長居は無用だぜ。さっさと船に戻って、アンジュに報告しようぜ？」

「ん、そうだね……」

とりあえず、僕達はコンフエイト大森林を後にし、船に戻る事にした。

「——そう、そんな事があったの」

あの後、僕はコンフエイト大森林で事をアンジュに説明した。ロツタとヴォイトは疲れたので休むから報告は任せたとの事。  
あれ、これってパシリじゃない…？

「草木の急な変化に、最奥にいる筈のケイプレックスの出現……ね。とりあえず、しばらくはコンフエイト大森林の依頼は避けて、落ち着いてきたら再調査に行く必要があるそうね」

「そうだね……。うわぁ…次行くときは新しいトラウマ出来そう……。……そう言えばなんかあったの？」

「あら、よくわかったわね」

「うん。帰ってきた時やけにロックスさん忙しそうな半分、なんか

楽しそうに今日のご飯の献立考えてたから」

最近分かった事の一つ。ロックスさんが上機嫌の場合、アドリビトムで何か良いことがあったと思うこと。

例であげるなら僕が師匠達との練習で技を覚えた事が嬉しくて話したら、ロックスさん上機嫌で、その日のメニューがシチュー（僕の大好物／教えた事は：無かった筈）を作ってくれた時とか。

「それで、結局何があったの？」

「ええ、あなた達がコンフェイト大森林に行く少し前に、メリアとヴェイグ達がヘーゼル村に配給の依頼に行ってたの。その時に偶々、ガルバンゾ国のお姫様とその護衛の方がウリズン帝国の兵士に襲われて、それを保護したのよ。それで、此方で暫く保護する兼、アドリビトムで働いてもらう事になったの」

さも楽しそうに説明するアンジュ。彼女で言う『此方で居るならそれなりに働いてもらう』だろう。黒いなー…。

「あら、今何か失礼な事を思わなかった？」

「イエ、ナンデモアリマセン、サー。それで、そのガルバンゾ国の



お姫様と護衛って――」

「――あ、はじめまして！」

言葉を言いかけた時、声を聞いてそちらを見ると――

「アナタもギルドの方――ですよね？」

「何て言うか……あんまり期待出来なそうな顔してるわね」

「そう言ってやんなったの。まあ、面倒事に巻き込まれて世話になる身だ。これから宜しくな」

ガルバンゾ国のお姫様とその護衛こと、『ヴェスペリア』のエステル、リタ・モルディオ、せしてユーリ・ローウェルがそこに、楽しい表情を浮かべていた。

#### 第四話（後書き）

本当にグッダグダですみません；；↑

戦闘、やっぱり難しいなー、うん。

そしてガルバンゾ国のお姫様御一行ことヴェスペリアメンバー登場＋サレ戦？え、サレって誰？↑↑

次はなるべく早く更新出来るように頑張りたいです……；；

## 閑話―衛司の修行とフラグ編1―（前書き）

かなり遅くなってしまう申し訳ありませんでした；；

しかも久しぶりの投稿が閑話：はい、ネタが尽きてきましたとも↑↑

あうあうあう↑↑

現在マイソロをプレイし直してストーリーを見返しています。

サレ強エ……でも本作では空気↑↑

※今回の閑話はラタトスクのターンです↑

※マルタがキャラ崩壊

※マルタファンの方、本当に申し訳ありません；；

## 閑話―衛司の修行とフラグ編1―

あのケイプレックス戦から数日、いまだコンフェイト大森林からの依頼は中止されていた。

……で、ある程度依頼を終え、暇となっている僕が今している事は

「オラオラアツ！逃げてんじゃねえぞゴラアツ！！」

「ちょ、エミルッ！ラタモードは駄目って言ったじゃn――アツ――！！！！！！」

甲板でエミル（ラタトスク確変モード）と絶賛模擬戦中です。  
いや、うん、今ボツコされたけどね……。

「――……エミルう……ラタモードは禁止って言ったよね、僕……」

「うう……衛司、ゴメン」

いい感じにボッコされた僕は現在、甲板に仰向け状態で、申し訳無さそうな表情をしているエミルにそう言っていた。

何故、エミルとか、というところ現在、師匠達は皆依頼に行っていて練習が出来なかったたので船にちょうど残っていたエミルと一緒に模擬戦をしないか、という話になり、今に至るという。

「……いや、うん、しょうがないよ。元々模擬戦頼んだのは僕だし。それに、エミルがどれだけラタモードを自力で抑えて闘えるかも兼ねての模擬戦だったしね」

「う……うん。でも、やっぱり衛司に悪いよ……」

「あー……。なら、今度行こうと思ってるルバーブ連山でのゲコゲコ二十匹討伐手伝ってくれない？一応、カイウスも誘おうと思ってるからさ」

「え……あ、うん。でも、そんな事でいいの……？」

「何を当然の事を。僕は元々エミルに何かさせたい為に模擬戦を頼んだ訳じゃないんだし、それに、エミルは僕が一番安心して背中預

けられるメンバーの一人なんだからさ」

まだ申し訳無さそうな表情をしているエミルに笑ってそう答える。  
正直彼らには失礼かもしれないが、僕が今本当にこの船で対等に闘えるのはラタモードを解放してないエミルと獣化してないカイウスくらいである。

だからこそ僕はよく模擬戦ではラタモードを禁止したエミルや獣化を禁止したカイウスを相手にしている。

だが、これは言い換えると僕にとっては一番同じレベルで闘えて、仲間として唯一背中を預けて闘えるという意味でもある。

確かに、強い人と一緒に闘えるのもいいけど、それによって知ってしまう自分の力量差。

比べたくなくても比べてしまう程の大きなソレは、正直自分の心身に新たなトラウマが出来そうで嫌なのだ。

うん。ヘタレだな、僕。

だからそういう意味では、僕はエミルやカイウスとは安心して背中を預けて一緒に闘える仲、だと思っている。  
あくまでも……思っている。

「……背中を預けられる、か。……えへへ」

「ん、…エミル？」

「あ、うん。なんかそういうの……マルタ以外で言われるの初めてで…何か嬉しくて……」

そう言って嬉しそうに口元を緩めるエミル。何か少し意外であった。エミルなら普通にこういう事、言われるんだろうに。

「そうなんだ…。兎に角、僕達はちゃんと信じられる仲間なんだから、自分が悪いとかそういうのは無し。僕達は仲間で、友達で、『戦友』なんだからさ」

「衛司……うん！」

僕の言葉に、頷いて笑顔を浮かべるエミル。それにつられて思わず僕も笑顔を浮かべてしまう。

こうやって一緒に笑い合える人が出来るっていいな。こういう所は、この世界に来て良かったと思う。

この後、僕とエミルはもう暫く模擬戦を続ける事にした。ただエミルう……ラタモードは本当に勘弁してください……。

その後、あの苦しい死闘（模擬戦…だった筈なんだよね）を終え、僕とエミルは昼食の為に、食堂にいた。

エミルは昼食を食べた後、昼からはカイウス達と依頼がある、との事で先に出て行った。

で、今現在はと言うと……

「ぶうー……………」

「あ、あははは……」

目の前にやけに不機嫌そうに頬を膨らませているマルタが座って居て、それに苦笑いして答えるしかない僕が居た。

いや、彼女が不機嫌そうな理由はある程度分かるよ。

エミルは朝は僕が模擬戦で借りていて、昼からはカイウス達と一緒に依頼に行っている。

つまり、彼女、マルタは今日殆どエミルと一緒にいてはいない。

彼女でいう『エミル成分』が足りないんだろう。



「むう……何でエミルは衛司やカイウス達とは一緒に居て私とは一緒に居てくれないのーっ！」

「あははは……、本当に……エミルが好きなんだね、マルタは……」

「あつたりまえじゃーん。笑った所とか、戦っている所とか、私はエミルの事ぜーんぶ好きだもん！」

満面の笑みでエミルの事を語り出すマルタ。

ああ、駄目だ……このモード入るとまた小一時間エミルの事語り出すんだろうなー。

「……でも、さ……」

「？」

そう思っていると、いつもとはどこか違った声色で俯いて口を開き出すマルタ。

「最近、本当にエミルが私と前より長く居ないの。依頼とかつていう理由はよく分かる。それでも……どこかで、それはエミルが私と距離を置きたいから、とか考えちゃう自分が居るの」

何時もの元気ハツラツとした様子とは一転、俯いたままで表情は分からないがどこか、言葉を出しながら何時泣き出すか分からない様子のマルタ。

本来なら『いつもと様子が違うけど一体どうしたんだろう』とか思ったり、聞いたりしちゃうけど、多分……何となく理由が僕には分かるのでそれはしない。

元の世界でいた剣道部の部長。あの人、一応彼女持ちであった。しかも絵に描いたようなバカップル。良い意味でのエミルとマルタの関係という。リア充爆散すればいいのに……。

……それで、よくそのバカップル部長の惚気話を聞いてたんだけど、そのバカップル部長も今のマルタみたいな状況になった時がよくあった。

『最近長く居られないから不安』、『本当は自分から距離を置きたいのでは？』、そういうのはカップルにはよくある不安事であった。

僕自身の考えとしてその理由は、相手と長く居た分、急に一緒にいた時間が少なくなった事による不安感云々だ。

マルタにはこういうのはないだろうなー、と今まで考えては居たけど、マルタも確かに女の子。何時も明るい表情を出しているがその反面、その表情の裏ではどんな事を考えているのか。

そういうのは一番厄介な性格。不安な事を自分の中で整理して、自

分のせいだと自分で背負ってしまおう。

：まあ、そういう話を僕に切り出したという所では、一応、憎まれ口叩きながらも僕の事を頼ってくれているんだろう。

なら、僕は彼女のソレに答えるまで。

未だに俯いたままのマルタの額にそっと、自分の右手を近付け、そして――

「チヨイサーッ!！」

「はうあっ!？」

――力を指に込めたデコピンをCV・藤原啓治風に叩きこんだ。  
先に言っておくけど、あくまで『風』であって僕の声は決して、どこかの戦争屋さんとそっくりではありません。

「~~~~ッ!いきなり何すん――」

「あのさマルタ。君って実は馬鹿？」

突然の事に額を抑えながらキッと睨み、言葉を出そうとしたマルタ

に僕はそう言っでやる。

「あのね……マルタのあんな熱烈アプローチ受けまくってそれを嫌だ、とか近寄んな、とか言う人普通いる？それにエミルだって一応男の子だし、嫌なら嫌ではっきり言えるよ」

「それは……でも……」

「でももなにも無いよ。それにね、エミルはマルタの事、結構大事に思ってるよ。そうじゃないと、…何時も模擬戦終わった後とかに、いい笑顔で嬉しそうにマルタの事を話さないよ」

「え……？」

僕の言葉に驚いた様子を見せるマルタ。確かに、あのエミルが、と  
か思っでしまうがこれは事実である。

「だから、マルタはそう深く考えなくていいの。僕から見た判断だ  
けど、二人共結構息ピッタリだからさ。マルタはマルタらしく、い  
つもの元気な笑顔を振りまけばいいよ、きっと」

「うん……そうだね、うん！」

僕の言葉に決心したように大きく頷いた後、いつもの元気な笑顔を見せるマルタ。うん、やっぱり……

「うん、やっぱりマルタは笑顔が一番だよ。何か深く考え込んでるより、いつもの元気な表情の方が、マルタは可愛いと思うよ」

「――ふえっ!？」

マルタの笑顔につられて、僕もつい笑顔を浮かべ、思った事をそのまま言ったら、なんかマルタから爆発音がして、顔が真っ赤になった。

……………まさか

「…………え、あの、マルタ……。もしかして……」

「え、ちょ、ち、違うの!これは……あー、もう!頭冷やしてくるーっ!」

依然と顔を真っ赤にしたままそう大声で言った後、マルタはまるで嵐の如く、食堂を走って出て行った。

マルタのあの慌てよう……やっぱり……！

「マルタ……風邪なんだ！」

「……マジで言ってるんですか、ソレ？」

背後から聞こえた声に見ると、いつの間にやらロックスさんが後ろで飛んでいた。……何故か呆れたような表情で。

「あ、ロックスさん。……いや、だって……顔を急に赤くして、頭冷やしてくるって事は……具合悪い〓風邪じゃないの？」

「……………」

僕の問いに、ロックスさんは無言のまま、されど表情は、『え、コイツまじでそんな事言ってるの？アホなの？』と言い掛けんばかりの呆れた様子を見せていた。

……その後、何故か、しばらくマルタが顔を合わせてくれませんでした。合わせたとしても、何故か真っ赤になって走り去っていきます。

………僕、なんか悪い事したのかな……？

## 閑話―衛司の修行とフラグ編1―（後書き）

……よお、お前ら……。

こんな閑話で満足か…？

俺は……駄文だね↑↑↑

今回は本当にすみませんでしたorz

ふざけすぎた？

うん、自分でもそう思うよ↑↑

取り敢えず、衛司の修行＋フラグ建て話その1でした。

その1と言うことだから近々その2も考えてるんですけど、その旦  
那↑↑

次回はちゃんと本編を書くつもりです。

現在マイソロプレイし直してるんでまた遅くなりそうですが…；  
後、マイソロの他にも何か書いてみようかな、とか早くもコイツバ  
カじゃね？みたいな事（↑）考えてますので、宜しければご意見な  
ど、宜しくお願いします+

最後に一言。

本当に色々と申し訳ありませんでした…；



## 第五話（前書き）

ふざけすぎた、自分でもそう思う↑↑

↑↑  
前の後書きで本編進めるとか言っておいて…結果はこれだぜ、畜生

嗚呼、本当に文才が欲しい…↑↑

※今回のお話は『あれ、そーいやカノンの絵の話してなくね？』  
との事からこうなった↑↑

※前の閑話に続いて衛司が無双します（フラグ的な意味で↑↑↑↑

## 第五話

あのコンフエイト大森林の出来事から数日。大分森の方も落ち着いてきたとの事で、僕達とは別にアドリビトムで調査隊が結成され、調査が行われた。

結果は案の定、ホスチア星晶であった。

それで現在、あのコンフエイト大森林の場所と同じ様な現象が起こつたらしき別の場所、オルタータ火山の調査が開始されるらしい。

で、今現在、僕が行っているものは……

「――はあ、メリアもご飯くらいちゃんと食べてよ……」

ロックスさん特製のお弁当を手に、オルタータ火山への調査に向かうであろうメリアを船内で探していた。

何でも彼女、ロックスさん曰わく朝から依頼に出て戻ってきた今現在まで食事をしていないらしい。しかも、この後直ぐオルタータ火山への調査も行くらしく、ロックスさんがせめてお弁当でも、と作り、僕に任せてメリアに渡す事になった。

パシリじゃない。そう、頼まれたんだからきつとパシリじゃない。ロックスさんは良い人だから。

取り敢えず、彼女の部屋の前へと向かい扉を三回ノック。いきなり扉開けて入るというラッキースケベスキルは僕には付いてない筈だ。

「はい、どうぞー」

扉越しに聞こえてきたのはメリアではなく、よく聞くカノンノの声であった。

あ、そう言えばメリアとカノンノ、相部屋なんだっけ。

「すみませーん。乾衛司ですけど、再確認で入って大丈夫ですかー？」

「え……衛司？あ、ちょ、ちょっと待っててっ!!」

「……………衛司……？」

僕と分かった瞬間、先程の声とは打って変わって扉越しでも分かるように慌てながら何かをしているカノンノ。少し遅れて確認するようなメリアの声も聞こえた。  
うん、再確認しといてよかった。

「……も、もう大丈夫でーす」

「えっと……失礼します」

数分程して聞こえてきたカノンノの声に思わず恐る恐る扉を開ける。扉を開けてみると……やけに綺麗にその桃色の髪をとかし終えた様を見せるカノンノと、いつもと変わらず不思議そうな表情をしたメリアが居た。うん、さっきの数分で何があった。

気のせいカカノンノの表情は何かを期待しているようにも見えた。

「えっと……それでどうしたの？」

「ああ、うん。実はメリアに用が……って待って、何でカノンノはさっきと一転不機嫌になるの？」

「別に……」

何故か本来の用を言ったらさっきまでの表情とは一転、さもどこか不機嫌そうな表情となるカノンノ。いや、本当になんでさ？

「衛司…用って……？」

「うん。メリアご飯食べてないんでしょ？それで直ぐにオルタータ火山に行くんならせめてお弁当を持っていきなよ、だってさ」

小さく首を傾げるメリアに手に持っていたお弁当を渡してそう言う。  
今更だけど、メリアってあんまり食べる所見たことないから少食なのかな？

「お弁当……あり、がとう……」

「うん、どう致しまして。でも、ちゃんと食べないと身体壊しちゃうかもしれないから、頑張るのも十分だけど、気をつけないと駄目だよ」

「ん……うん……」

メリアの言葉にそう言った後、そっとメリアの頭を撫でると、心地良さそうに目を細めるメリア。  
最近分かったけどメリアは頭を撫でてあげると嬉しいらしい。

「……………」

——……そしてその近くにカノンノが居ると、カノンノが大層不機嫌になるのもよく分かった。

あの後、メリアはルビアやウィル達と一緒にオルタータ火山の調査に向かった。

で、僕は現在……

「いや、なんか、本当にすみません」

「別にいい……何で衛司が謝るのかなあ」

甲板で依然不機嫌なカノンノに全力で土下座していた。

プライド？ 此方の世界に来てオタオタに負けたあたりでどこかに行ったよ。

「いや、それは、その、本当にすみません」

「もう……別にいいよ。どうせ、衛司の事だから絶対分らないだろうから」

カノンノのやけに意味深なお言葉に首を傾げてしまう。……どういう事だろ。

「……むう。衛司のせいで今日はあんまり思い付かないや」

「本当に酷い言いようだね……。思い付かないって……?」

「あ、衛司には言ってなかったっけ。えっと、これの事なんだけど……」

そう言っただけカノンが差し出してきたのは少し大きめなスケッチブックであった。

手にとって開いてみると…此方の世界ではまだ見たことのない風景の絵が書かれていた。

「……この風景、見たことある?」

「……残念ながら、わからないよ」

「衛司もかあ。メリアもそうだったけど、記憶の手掛かりになるかと思っただけと……」

僕の返答に残念そうな表情を浮かべるカノン。正直な話、この風景は僕が元いた世界でも此方でも見たことのない風景であった。

「…なんかごめんね」

「ううん、気にしないでいいよ。……私もね、この風景を実際に見た事無いんだ」

「カノンノも見た事のない風景……？」

「不思議でしょ？スケッチブックの白い紙を見てるとね、たまに見えてくるんだ。色んな風景が。その見えた風景を筆でなぞって、出来たのがこれらの絵なの」

カノンノの言葉を聞きながら、パラパラとスケッチブックに描かれている風景を捲っていく。

うん……やっぱりまだ見たことのない風景だ。

「他の人にも見せたけど、誰もこの風景を知らない。それに、作り話でしよって、笑われちゃうの」

そう言って少し俯くカノンノ。  
確かに、誰も知らない風景なら、そんな言葉が帰ってきてても当然だろう。



「……でも、僕は信じるよ」

「え……？」

「カノンノがこんなに綺麗に描けてる風景を、『嘘』だとか、『有り得ない』とか考えれるわけないよ。こんなに鮮明に、分かりやすく描けてるならきつと直ぐに見つかるよ。僕は『嘘』なんて言わない。ちゃんと信じて、もし良かったら一緒に探してあげるからさ」

当然の事でしょ、と付け足し、小さく笑ってそうカノンノに言った後、メリアの時と同じ様にそつとカノンノの頭を撫でる。カノンノは驚いた様子を見せた後、嬉しそうに微笑んだ。

「ん、…うん。……ありがと、衛司」

「どう致しまして」

カノンノの感謝の言葉に、笑ってそう返す。

しかし、カノンノのこの風景……本当になんなんだろうか。

カノンノの頭から手を離し、再びスケッチブックを捲って見ていると、最後の絵が描かれているであろうページが前のページと二枚上手く重ねられて見えなかった。

「……………？あれ、この最後のページ…」

「え…………っ！ちょ、そこは見ないでっ！！」

重なったページを捲ろうとしたらカノンノに物凄い勢いで引ったくられた。

「え、ちょ…………カノンノ…………？」

「このページは駄目っ！！ぜえったい駄目っ！！」

「うう…………分かったから、落ち着いて…………」

大事そうにスケッチブックを抱え、僕から退いていくカノンノに、何故か僕は落ち着いてといいながら、反射的に土下座をしていた。

…………元の世界の両親や僕をよく知っている部長へ――

――僕の土下座は、本当に上達していております。

…………何故だか泣けてきた気がした。

衛司とのそんなやり取りがあった後、カノンノは自室に戻り、抱え込んでいたスケッチブックをゆっくりと捲り上げ始める。

「……見せれるわけないよ」

そう、カノンノは呟いて、二枚重なっている最後のページを捲り上げた。

「……不思議だなあ。なーんで書いたんだろ」

最後のページに、ふと不思議に自分が描いた『衛司』の絵を見てカノンノはそう呟くと小さく笑った。  
僅かながら、その頬は若干赤く見えたのは、気のせいではないだろう。



## 第五話（後書き）

一言言おう。

やつちやつたZE☆↑↑↑

後悔？反省？

知 っ た 事 か そ ん な 事 ！  
↑

いや、本当はスツゲエ反省してますorz↑↑

何時原作に入れるんだろ、本当……。

次話は……次話はちゃんとやるんだっ！↑↑

では、最後に一言。

その旦那エ……衛 司 の 進 化 は 止 ま  
ら ん ぜ っ ！（フラグ的な意味ry↑↑↑↑

**閑話―他者から見た衛司―クラトス編―（前書き）**

もうちょつと遅めに出す筈の閑話が早めに出来たので投稿＋

……決して本編に詰まってる訳じゃないよ、本当だよ？↑↑↑↑

※今回はかなり短めかつ、クラトスの独白のみなので見なくてもOKです。

※独白のみなので今までのと比べてかなり文が荒いです。

※最後近く、クラトスのキャラがブツ飛びます↑↑

閑話―他者から見た衛司―クラトス編―

――私、クラトス・アウリオンはある事を考えこんでいた。

ある事。それは突如、カノンノが海から見つけあげた少年、《乾衛司》の事である。

見慣れぬ服装をした少年を当初は新しい《ディセNDER》か、と考えたがその考えは直ぐに抹消された。

彼は弱かった。

歴代のディセNDER達とは比べようがない程弱かった。

それが一つの理由でもあるが、理由はまだあった。

それはディセNDERが放つ特有の『光』。

彼からはそれが感じられず、それは彼から後に来たメリアから感じられた。

ディセNDERではない謎の少年。彼は一体何者なのか？

ただ彼はディセNDERとは別の意味で『特別』な存在であった。

それは彼がオタオタに敗北し、私を主とした、クレスやスタン、それにセネルに修行を頼み込んだ事にあった。

その程度なら別に普通であるが、驚くべきはその進化。

彼は私やクレス達の剣技を少しずつだが確実に、自らの力にしているのだ。

その結果がどうだ、当初はオタオタすら倒せなかったのが数日で今ではケイプレックスと戦い、生きてかえってきたほどだ。

そしてこれは恐らくだが……彼には何故か魔法の才能も密かにある。いや、魔法だけではなく、恐らく彼の実力や考え次第では格闘家や大剣士等、多彩な戦闘方が出来るだろう。

ただ、彼自信はこの事には気付いてはいないだろう。無論、剣技の実力の方も。

私の見たところ彼には実力、才能は確実に揃っている。しかし、彼自身どこか心弱い部分がありそれが彼のその良い部分を消してしまっているであろう。なんとも不安定なものだ。

……だが、そんな彼を育てていてどこか楽しんでいる私もいてしまう。

彼が一体何者で、何が目的で此処にいるかは私も分からない。この世界樹にとって彼が害があるか否かも分からない。

ただ、私は、今心のどこかで楽しんでいる彼の修行をするだけなの



だ。

さて……出来れば今度は魔法でも教えていこうか…？

全く……楽しみなものだ。

——ああ、追記だが、彼の事は一つだけ、私も分かった事があった。  
それは……

「——ねえ、衛司！私と一緒に依頼について来てくれない？」

「——衛司っ！勿論私と来てくれるよねっ！？」

「——え、カノンノにマルタ？僕はこれからスタン師匠との修行が……って待って！何で不機嫌そうに二人共武器持ってるのっ！？ちよ、待っ……イヤアアアアアッ！！」

——彼は……鈍感だ。

………近い内、ロイドと合わせて見てみるか。何か面白そうなので。

.....  
フ  
ツ  
。

**閑話―他者から見た衛司―クラトス編―（後書き）**

今回は今までとはちょっと感じを変えたクラトス独白編でした。

うん、やっぱり会話文とかないのは難しいですね、はい；；

かなり後悔してます；；

で、結局最後にふざけてしまった自分が此処にいる↑↑

## 第六話（前書き）

何とか今日中に本編を完成させました+

ただ、大分端折ってる上に原作崩れてる気がする↑↑

後相変わらず妙な所で区切ってます；；

嗚呼、文才が欲しい：orz

※原作より若干ストーリーが変わってるかもしれません。

※ジョアンさん、マジ空気↑↑

※くぎゅフラグ絶賛上昇中↑↑

## 第六話

「――赤い煙？」

「ああ。ありゃ、どっからどうみてもおかしなもんだったぜ」

食堂にて、僕はオルタータ火山の調査に加わっていたユーリからそんな話を聞いていた。

結局、オルタータ火山の星晶採掘跡もコンフェイト大森林と同じ状態になっていたらしい。

そして一番の収穫と言える話は『赤い煙』。

何でも、星晶採掘跡の原因で貴重な種であるらしいコクヨウ玉虫…とかいうのが大量に死んでいたらしい。

そしてその内の生きている一匹に、突然赤い煙が現れコクヨウ玉虫にまとり、消えていったとか。

それで、現在その一匹はウィルさんが採取して今観察しているらしい。

「赤い煙、かあ。なんか変な話だねえ…。あ、チョコケーキ、もう一個追加で」

「生憎、こちらで生で見ちゃったからな。信じずにやられねえよ。……ったく、あんまし食い過ぎんなよ」

赤い煙についての話をしながら、ユーリの作ってくれているチョコケーキを口に運ぶ。

うん、流石ユーリ。普通に店とか開けるんじゃないだろうか。

「まあ、詳しい事はウィル達が考えてるんだし、私達は私達の出来ることすればいいのよ。ユーリ、私もケーキ追加」

「それもそうだな。俺は考えるよりも、動くのが優先派だし。へいへい……ってお前、何時の間に居やがった」

「ケーキと聞いて黙っていらなかったわ」

追記。最近ユーリがケーキ調理中の時は、ロットタが神出鬼没になります。

「——ゴホッ……では、そういう事で……」

「——……分かりました」

依頼が何か出ていないか気になりホールに出ると、アンジュと、やけに顔色の悪い男性が話をしている、男性がホールを出て行っていた。

「……アンジュ、さっきの人は？」

「依頼者の方よ。モラード村のジョアンさんで、ブラウニー坑道の奥地まで護衛をお願いしたいらしんだけど……」

「……大丈夫なのかな、あの人」

やけに顔色悪かったけど……何でそんな状態でわざわざブラウニー坑道に…

「なんでも医者もさじを投げた程、重い病気らしいの。それで何でもそのブラウニー坑道の奥地に、病気を直す方法があるって言っている」

「病気を治す……？それって一体……」

「私も深くは分からないわ。でも、依頼を頼まれた以上、私達もその依頼を受ける立場なんだから断れるわけないわ」

そうやって先程のジョアンさんの依頼内容を紙に纏めるアンジュ。

『医者でさえさじを投げる病気を治す方法』、か……。

「……アンジュ。その依頼、僕受けるよ」

「あら、本当？」

「うん。流石にあんな状態の人を見て見ぬ振りなんて出来ないし、それに……その『治す方法』って言うのが気になるからね」

「……そう。分かったわ。じゃあ、他に依頼を受ける人が増えるまで待っててね」

アンジュの言葉に頷いた後、僕は準備の為に自室へと向かった。

『病気を治す方法』……なんか嫌な予感がするんだよねあ。



その後、ジョアンさん護衛メンバーも決まり、今はブラウニー坑道の中を歩いている。

メンバーは僕、メリア、ファラ、マルタといった、『あれ、男って僕とジョアンさんだけじゃん?』パーティーだった。

それで現在、先頭では僕とファラが歩き、後方ではメリアとマルタがジョアンさんを守りつつ歩いている。

歩きながら話を聞いたが、なんでもジョアンさんの友人であるミゲルさん、と言う人も同じ病気だったらしく、この道中で発作が始まり身動きが取れなくなり、死を覚悟した際、何かが起こりそのミゲルさんは病気が治ったらしいのだ。

「……ジョアンさん、大丈夫かな? さっきから後ろで気になるくらい咳き込んでるけど…」

「そうだね……。さっき聞いた話なんだけど…ジョアンさん、もう長くないみたいなの…」

先頭と一緒に歩くファラにそう話しかけると、ファラは一度、心配そうに後方のジョアンさんを確認した後、そう切り出す。

「やっぱり、か……。それにしても……『病気を治してくれる存在』……か」

「本当にいるのか分からないけど……まずは行ってみたいと分からないよ。……だから、私達はそこまでしっかりとジョアンさんを護衛しましょう！大丈夫、イけるイける！！」

先程までの重い空気を変えるように、右腕をグッと上に伸ばしそう元気に言うファラ。

……うん。なんでこのメンバーにファラが居るのか、段々分かってきた気がした。

-----

その後、向かい来るモンスターを撃退しながらなんとか指定された二層目の奥地まで来る事が出来た。

――が、そこにも案の定、魔物はいた。

岩で構築された独特な巨体。『ストーンゴレム』であった。

「うわぁ……すごい硬そうなんですけど……」

「でも……アレを倒さないとだめみたいだね」

各々の武器を手に持ち苦笑いしながらそう言い合う。向こうのストーンゴレムは依然やる気満々と言わんばかりに腕を回している。

「……嫌だなあ。よし、マルタとメリアはジョアンさんの護衛をお願い。僕とファラで、ストーンゴレムを叩こう」

「えっ！わ、私もちゃんと闘うよっ！」

「……衛司…何で……？」

「うん。マルタの言葉は嬉しいけど……この依頼はあくまでジョアンさんの護衛だからさ。もし僕達全員がストーンゴレムと闘ってる間に、他の魔物が現れてジョアンさんに襲いかかってきたらって考えて。マルタは後衛からでも回復魔法で援護してもらえるし、メリアは僕達が抜かれた時の最後の要だからさ。ちゃんと二人を信頼しての配置だよ」

どこか物言いたげな二人に僕の出した案の理由を説明する。これは僕なりに考えた配置である。僕達の依頼の要点はあくまで、ジョアンさんを無事に護衛する事。その事も考えて、前衛である僕とファラでストーンゴレムに向かい、このメンバーの中で一番の実力であるメリアと回復魔法で後衛から援護可能なマルタをジョアンさんの付近に配置する。

これがあくまで僕が考えた最高の配置である。

「うゝ……分かった。でも、絶対勝ちなさいよねっ！」

「……衛司、ファイト……」

不満げながらも納得しそう言いマルタと無表情ながらもそう言ってくれるメリア。

よし、やる気出てきた。

「じゃ、ジョアンさん。もうちょつとだから、待ってて下さいね」

「……ゴホッ……すい、ません……わざわざ私の為に……」

「いえいえ。絶対、ジョアンさんを助けますよ」

顔色の悪いジョアンさんに、そう言って少しでも安心させようと笑ってみせる。

……何故かマルタが顔を逸らしたがとりあえず置いておこう。

僕は武器である木刀を手にファラと共にストーンゴレムの前へと立つ。

「……間近で見るとやっぱりこう…強そうだね」

「あはは…。でも、きっと私達なら勝てるよ」

「イけるイける、ってね。よし……じゃ、人助けの為に出来る限り頑張ってみようかっ!!」

僕が木刀を、ファラが拳を構えたと同時に、ストーンゴレムはその腕を震い上げる。

そして、戦闘は始まった――

## 第六話（後書き）

本当、グダグダですいませんorz↑

思った以上にストーリーが進まない……キツイぜ↑

次話は無論、ストーンゴレム戦です+

もしかしたら次話、若干衛司君がチートるかもしれません;;;

いや、ちょっと皆しってるテイルズ定番『全・力・全・開!』をしようと考えて……↑↑↑

そして次話……その旦那エ、フラグ臭ですぜ↑↑↑

## 第七話（前書き）

頑張って書き上げたけどやっぱりあれだね。

日本語って難しいね↑↑↑↑

嗚呼、文才が欲しい↑

※戦闘が荒く、尚且つかかなり無理があっているのでご注意ください；；

※「こう」の正しい字が出なかったので「煌」を使用しています；；

※ジョアンさん達マジ空気↑

※フラ……グ？↑↑

## 第七話

「――――！！」

目前でその大きな腕を振り上げ、戦闘態勢に入る岩の巨人、『ストーンゴレム』。

思い切った事を言ってしまったが、その文字通り岩の肉体に対し、僕とファラの武器は木刀と拳。

うん、改めてどうしたもんか、コレ。

「衛司、向こうから来るよっ！」

「んっ……考えるよりも……まずは行くべきだよねっ！」

ファラの声に意識を前に戻すと既にストーンゴレムは腕を振り上げ此方へと向かっていた。

僕は右に、ファラは左にその場から走り出し、ストーンゴレムの攻撃をかわすとそのまま接近し、僕は木刀で、ファラは拳でストーンゴレムへと攻撃を開始する。

「これでっ、散・沙・雨ッ！！」



「ハアアアアッ！！連牙弾っ！！」

ストーンゴレムに近付いたと同時に放たれる木刀による連続突きと拳による連続打ち。

ストーンゴレムは防御力と攻撃力が高く確かに強いが、その一撃一撃は遅く簡単に懐に入り込み、攻撃が可能である。

ストーンゴレムの弱点はそんな所である。

僕とファラの同時攻撃が効いたのかストーンゴレムは怯み、一旦体勢を崩す。

「よしっ！このまま……」

「まだ迂闊に近付いちゃ駄目だよ、衛司っ！」

「え……って、うおうっ!？」

追撃を仕掛けようとする则ちファラの声に立ち止まると、ストーンゴレムはその場から体勢を直ぐ様直し、体を回転させ両腕を振り回してくる。

思わずその場から後退すると、僕が居た場所の岩にその腕が当たり、その岩はいともたやすく粉碎される。

……何あれ、こわい。

「……流石はストーンゴレム……。名前の通り堅いなあ……」

「ううん……確かに思ってたより堅いね」

ストーンゴレムから距離を置き、苦笑いする僕と先程攻撃した手を軽く振るファラ。やっぱり拳でも痛いもんは痛いんだ。うん。

「――――！！」

当のストーンゴレムは叫ぶような姿を見せた後、両腕を振り回し、再度此方を睨み付けてくる。

くそ……やっぱり、ゴレムタイプは手数もそうだけど一撃一撃で確実に決めていかないと駄目か……。

……それなら……

「……ファラ、一つの作戦というか、お願いがあるんですけど……」

「え、何。急に改まって……」

「僕が先攻を掛けてストーンゴレムの気を逸らすから、その合間で

できる隙に協力な攻撃をアレに出来ない？」

「っ……それって！」

僕の提案に驚いた様子を見せるファラ。

それもそうだろう。僕の出した案は言うなれば『匪』。ただいつもと違うのは相手である魔物が普通の魔物に比べ一撃一撃の攻撃が非常に高いこと。一撃でも当たればそれこそさっき粉碎された岩と僕の身体が同じようになるんだろう。

だからこそ、ファラは驚いていた表情から一転、真剣に、怒っているような表情に変わる。

「衛司……そんな危ない役、衛司で大丈夫なの？」

「正直、僕の身体は先程の岩より脆いので、一撃で粉々になれる自信があります」

「っ……！それなら——」

「でも、考えたら一撃のダメージの大きさならファラの方が上だし、自慢じゃないけど僕は相手の攻撃から逃げる事なら一丁前だし……。それに——」

「それに……？」

「――僕は信じてるから。ファラならきつと上手くやってくれるって」

未だ真剣な表情のまま此方を見るファラにそう小さく笑って僕は答える。

ファラは先程とは少し違った驚いた表情を見せた後、小さく笑ってみせる。

「……分かった。そこまで言われたら、私だって頑張るよ。それに――」

「僕達ならイけるイける、ってね」

「うん、その通りっ！言われた以上は……一撃で決めるよっ！」

そう言って構えを取る僕とファラ。それと同時にファラの周りの気圧がどこか変わっていくのを感じた。

なんとなく分かる。テイルズで一撃で仕留める方法。恐らく『アレ』だろう。

「それじゃ……行こうっ！」

言うと同時に僕は木刀を手にストーンゴレムへと走り出す。ストーンゴレムもそれを認識すると腕を大きく振り、此方に突き出してきた。

「ッ……魔・神・剣ッ!!」

突き出された腕に向け最近覚えてたテイルズ定番である初級技、斬撃を飛ばす『魔神剣』を放ち、相殺して動きを止める。覚えた時は本当に感動した。

そして隙が出来た懷に、更に動きを止めるべく追撃を放つ!

「――双牙アッ!!」

無防備な懷へと再度放たれる魔神剣の斬撃。結構効いたのかストーンゴレムの体が揺らぐ。よし、今だ……!!

「フアラッ!!」

「ナイスだよ、衛司っ!」

僕の呼び掛けに答え、僕の隣を素早く駆け抜けるファラ。その彼女の周りには様々な色の光が円を作って回っているのが見える。そう、『オーバリーミッツ』だ。

そして、その状態から放たれる強力な一撃はただ一つ。

「ハアアアアッ!!」

体制の揺らいだままストーンゴレムの無防備な体へと叩き込まれるファラの連撃。それは徐々に炎を纏っていき、ストーンゴレムの体を燃やしていく。

そしてファラ自身が炎を纏い、上空へと舞い上がり、最後の一撃をストーンゴレムへと叩き込む!

「火龍炎舞ッ!!」

龍のような炎を纏った強力な蹴りを最後に叩き込まれ、炎上していくストーンゴレム。その様子に僕や忘れていたが今まで後ろで見守っていたメリア達も目を奪われた。

「よし、一丁あがりっ!」

此方を向いてグッと親指を立て笑顔を見せるファラ。思わずつられて笑顔を作ってしまう。

——だが、まだ終わってなかった。

「——ッ！！フラッ！！」

炎上しているストーンゴレムとは別に、その背後から現れた新たな影。恐らく、ストーンゴレムは元々『二体』いたのだ。

「え……——」

僕の声に後ろを振り向くファラ。そしてようやく気付いたのか体を動かそうとするが、気付くのが遅かったのか対応が間に合わない。このままじゃ……。

「ッ……やらせてたまるか…」

最悪な光景が脳裏を過ぎる。思わず走り出す。知らない内に体の勢いが上がっていく。

「——やらせて……」

ファラに向け徐々に振り下ろされていく岩の腕。ファラは腕を交差させ少しでもダメージを減らそうとする。

間に合わないだろう。だけど僕はまだ駆ける。絶対に助ける為に！

「たまるかアアアアッ！」

声を上げたと同時に僕の周りに様々の色の光の円が現れる。

これは……『オーバーリミッツ』？

足の勢いが上がっていくのを感じ、そのまま先程のファラよりも早く駆け抜け、ファラのストーンゴレムの前まで走り、ストーンゴレムの攻撃を木刀で防ぐ。

「――！？……衛司っ！？」

「うおおおおお！瞬・迅・剣ッ！！」

一度ファラの無事を横目で確認した後、オーバーリミッツで上昇した身体の勢いのまま強力な突きをストーンゴレムの腹へと放ち、ストーンゴレムを突き放す。

ストーンゴレムはその勢いで距離が離れるが、僕は上昇した足の勢いで再度一気に距離を詰める！

一度だけ船の模擬戦で味わったある人物の秘奥義。通常の僕の身体能力ならどう考えても不可能だけどオーバーリミッツで覚醒した今ならきつとできる筈だ！！

「閃け、鮮烈なる刃ッ！」



まずは一撃。それを直撃させるとストーンゴレムは動きを止める。

「無辺の闇を鋭く切り裂きッ！」

そのまま連続してストーンゴレムの体に一撃、一撃と確実に攻撃を与えていく。

「仇なす者を微塵に碎かんッ！！」

更に一撃、一撃と連続で攻撃を与えていく。ストーンゴレムはそのダメージの為か、石で構築された体が徐々に崩れ落ちていく。

「見様見真似の——漸煌オ狼影陣ッ！！」

そして最後に放つ強力な一撃。それが直撃すると同時に、ストーンゴレムは確実に崩れ落ち、ただの岩の山と化した。

「——ハア……ハア……」

ストーンゴレムを倒したと分かった瞬間、先程の漸煌狼影陣とオーバーストーンの反動が体に襲いかかってきた。

うわ、今立つのもやっただ……。

「――衛司……？」

ゆっくりと視線をファラやメリア達に向けて無事を確認する。  
うん……大丈夫そうだ。

ファラ達が無事と分かった瞬間……僕の意識は完全に黒くなった。

「――ん……此処は……」

「――あ、衛司！目が覚めたんだ……」

目を覚ますと意外に見慣れたバンエルティア号の医務室で、目の前には安心した表情のファラが居た。  
どうやら、現在僕は医務室のベッドで寝かされているらしい。

「あれ……確か……そうだ、ジョアンさんは？」

「はいはい、落ち着いて。ちゃんと説明するから」

僕の言葉に、ファラは溜め息を吐きながらも説明を始めた。

あの後、僕はオーバーリミッツと技の反動により気絶していたらしい。

ジョアンさんの護衛は無事に完遂した。そして問題はその後だ。

あのブラウニー坑道の奥地でジョアンさんが生きたい事を願うと、例の『赤い煙』が現れ、ジョアンさんの病気を完治させたらしいのだ。

結局その後、その場所に赤い煙は出なかったらしい。

で、その後、気絶していた僕はファラにおぶらされてこの医務室まで運ばれたらしい。

赤い煙……結局謎のままだけど、一体なんなんだろう。

「全く……あの後本当に大変だったんだよ？ メリアやマルタは勿論心配してたし、ジョアンさんも自分せいだ、とか考えてたんだから」

「ははは……面目ありません」

ムツとした表情のまま怒っている様子を見せるファラ。うん、今回は本当に申し訳なく思っている。

オーバーリミッツと技の反動は結構大きかったのか体が上手く動かないのが現状である。

「――……でも、ありがとう」

「え……?」

「衛司が居なかったら私、今頃どうなったか分からないもん」

そういつて俯いてしまうファラ。その様子はどこか元気が無さそうに見えた。

僕はとりあえず、いまだあまり動けないがゆっくりと右手を伸ばして……

「——え?」

そっと、ファラの頭を撫でた。此方側で覚えた僕なりの『元気の無い相手にするべき行動』の一つである。

「衛司……?」

「——僕はあくまで当然の事をしたまで。ファラも大切な仲間の人だからさ。だから、わざわざそんなに深く思い込まないでよ。何があろうと、僕達は仲間なんだから」

「……………うん」

ゆっくりとファラの頭を撫でながらそう笑って言うと、ファラも頷いた後、小さく笑い返してきた。  
うん、良かった。

「……あ、私、皆に衛司の目が覚めた事言ってくるね。皆、心配してたから」

「あ、うん。ありがとう」

そう言ってゆっくりとファラの頭を撫でていた手を離す。一瞬どこか名残惜しそうな表情をした気がしたけど、きっと気のせいだろう。

「――衛司」

「……………ん？」

「――ありがとう」

「…どう致しまして」

医務室の扉の前でファラが振り返り笑って言うと、僕も笑ってそう言葉を返す。

部屋を出て行く時のファラ表情、笑っていたがどこか顔が赤らんでいたのも、きっと気のせいだろう。

## 第七話（後書き）

よお、お前ら……。

こんな話で、満足かよ……？

俺は……泣きたいね↑↑

うん、今回かなり無理があつたと思う↑↑

オーバーリミッツ：これってある種使った瞬間チートじゃね？↑

と、言うわけでチートを阻止したい自分は使用後、衛司の場合のみ身体に反動が起こるようにしました↑↑

やったね☆↑↑

因みにオーバーリミッツ解放は「マイソロ2」や「アビス」の方を使用。

個人的にあちらの方がオーバーリミッツっぽいので↑

『漸煌狼影陣』も使用後は反動仕様です。

だってあの技自体が軽くチートじゃね？↑↑

そしてファラ。

ちょっと難しかったけど建ったよ。

フラグ建ったんだよ↑↑

次話はちゃんと原作介入させたいです；  
かなり、難しいですが……；





## 第八話（前書き）

気付けばPVは25000、ユニークは3500、お気に入り件数は50を突破+

皆様本当にありがとうございます！+

だけど皆……やっぱり日本語って難しいね↑↑

文才欲しいぜ……旦那↑↑

※後書きにて報告というアンケートがありますので、宜しければ  
ご意見を+

## 第八話

——あのジョアンさんの依頼から数日がたった。

僕の体も今では完治し、普通に以前と同じように依頼をこなせるようになっていた。

ただ、現在……一つの問題が発生していた。

「——また来たんだ、この依頼」

「——ええ。本当、どうにかならないかしら」

僕が手にした一枚の依頼書。それに書かれている内容に一緒に見ているアンジュと共にそんな言葉が出た。

依頼の内容は一つ。

『赤い煙の発生場所までの護衛』

今現在、この護衛の依頼が殺到しているのだ。

仕事が増えた事は確かに良いことだが、あの赤い煙の正体はいまだに不明なのだ。依頼者の事も考え、今この手の依頼は全て断っているのだ。

だがいくら断ってもこの依頼は止まる所か、増える一方なのである。

しかも、先日アドリビトムに入った『イノセンス』のスパイダの情報では『赤い煙は見るものによって姿が違う』らしいのだ。そして街の大衆は赤い煙に対する認識が『病気を治す』から、『願いを叶える』というものにならわっているらしい。

はっきり言って、それはどう考えても『危険』としか言いようがない。だが、それでも依頼は増える一方なのが現実である。

「……はあ、本当どうにかならないかなあ」

「……どうにもならないのが現実よ」

二人して思わず深い溜め息を吐いてしまう。  
——そんな時だった。

『ギニャアアアアアアアアっ!?!?』

「うおうっ!?!?」

「えっ!?!?」

突然艦内に響き渡るやけに聞き覚えのある悲鳴。  
今のは……多分イリアの声だ！

「…研究室の方から聞こえてきたわね。どうしたのかしら…」

「分からないけど…とりあえず様子を見てくるよ」

研究室への扉の方を見てそう言うアンジュに言うと、僕は恐る恐る  
研究室の扉へと歩み寄る。

どうしたんだろ…。……またハロルドが何かやらかしたんだろうか  
……。

そんな事を考えると余計に入りたくなくなってしまいが、見て見ぬ  
振りもあれなのでとりあえず研究室の扉を開ける。

「あのー、なんかさっき此処からイリアの悲鳴g——「イヤアアア  
アアアアッ！！」ーげぶるうあぁっ！！！！？」

扉を開けて中を見ようとした瞬間、素晴らしい速度と悲鳴で『人間  
弾丸X』と化したイリアがタイミングよく僕の鳩尾に向けて突撃した。  
あまりの痛感に当たった鳩尾を両手で抑えて悶える僕。  
うん、復帰早々これはないだろ…？

「——あ、ごめん…」

「——いや、うん、いいよ。気にしないで…」

当たった事に気付いたイリアが悶えている僕を上から覗き込むような形で言ってきたので、現在できる精一杯の作り笑顔でそう答える。

うん。正直、かなり気にしている。

「——あら。イリアが静かになったと思ったらアンタだったの。で、そこで鳩尾抑えて何かあったの？」

未だ悶えて居るところに上から聞こえてきた声に見上げると、やけに嫌な笑みを浮かべるハロルドが居た。

「……その笑みの通りこの現状の原因は十中八九ハロルドのせいとしかいいようが無いんだけど」

「あら、酷い言いがかりね。私はあくまで『コレ』を見せただけで、ぶつかったのはイリアなんだから」

そう言いながらハロルドは『ソレ』が入った入れ物を此方に見せてきた。後ろでイリアが再び変な悲鳴を上げて僕の後ろに隠れる。

……何故に僕。

……それにしても……

「……ハロルド。『コレ』って一体……」

「ウィルが持って帰ってきた赤い煙に包まれてたコクヨウ玉虫よ」

ハロルドのその返答に、嘘だと思ってしまふ。何故なら、当初僕がウィルに見せてもらったコクヨウ玉虫は、まるでんとう虫を思わせるような色合いの虫であったが、今ハロルドが見せているソレは、その色合いは無く、虫とは思えない程の岩のような甲殻に身を包まれたモノだったからだ。

「ああ。先に言つとくけど、嘘じゃないわよ。ちゃんとウィルやリタも見てるし。それに面白いわよね。この虫、目や耳、口や鼻とか元々あった生物にあるべき物が無くなってるもの。まるで別の世界の生物みたいに」

本当にさも楽しいげな表情を浮かべるハロルド。……本当にある意味マッドサイエンティストというか何というか……。

それにしても……『生物にあるべき物がない』、『別の世界の生物』……か。

……待てよ。このコクヨウ玉虫にそんな特性がある訳ない。あるとすれば……『赤い煙』！？

「ねえ、ハロルド！この特性ってさ……もし人間に起こったら――」

「アンタが思ってる事はコッチも現在調査中よ。でも、もし発生すれば…害があるのは確実ね」

そう言った後「んじゃ、まだ観察は続けるから何か分かり次第言うわ」と言って鼻歌混じりに研究室に戻っていくハロルド。

コクヨウ玉虫に起こった謎の現象……もし本当に『赤い煙』が関連してるなら…ジョアンさん、大丈夫だといいいんだけど…。

「……………ところでさ、イリア。そろそろ離れてくれない？」

「行った！？あの虫とハロルド、本当に行ったのっ!？」

「行ったからさ、マジ離れて下さい」

別に嫌って訳じゃないけど……そろそろ爪が食い込んで痛いんだけど……。

「――では、宜しくお願いします」

「――はい、分かりました」

ホールに戻って見るとやけに髭が特徴的な老人が依頼を頼んで出て行っていた。

――あれ、なんかジョアンさんの時とデジャヴ…？

「えっと、アンジュ……さっきの老人は？」

「あら、衛司。さっきの人はモラード村の村長のトマスさんといって、何でも村で捕まえた魔物をカダイフ砂漠のオアシスまで搬送して逃がして欲しいらしいのよ」

「捕まえた魔物を……？……そう言えばモラード村って確か……」

「ええ。ご想像の通り、ジョアンさんの住んでる村よ。さっき聞いておいたけどジョアンさん、元気に村の仕事を手伝ってるみたいよ」

僕の問いにそう答えて、どこか安心した笑顔を浮かべるアンジュ。確かに、あの煙で本当に元気になったか不安だったが、元気だと分かれば安心するだろう。



……あくまで村長の話が『本当であれば』だが。

「……アンジュ。その魔物の搬送依頼、僕も受けるよ」

「あら、本当？…でも、大丈夫？あなた、一応病み上がりでしょ？」

「うん。でも病み上がりだからこそ、リハビリ感覚で依頼をやっていかないと体が動かなくなるからね。それに……気になる事も出来たし」

アンジュにそう答えた後、先程トマスさんが出て行った方を見る。本来ならジョアンさんの無事は聞いたら普通に頷いていたが……流石に先程のコクヨウ玉虫の例を見た後じゃどうにも上手く頷けなかった。

それに……気のせいかな何か嫌な予感がした。

——その後、まさかこの嫌な予感が本当に的中するとは僕は思ってもいなかった……。

## 第八話（後書き）

うん、切り方が雑で本当にすみません；orz

くそう……文才が欲しいぜ、旦那↑↑

さてさて、今回は皆様にご報告……というかアンケートというか……まあ曖昧なアレです↑↑

取り敢えず今後のストーリーについてです。

まず一つ。主人公、衛司君の正ヒロインについてです。

現在皆様ご存知の通り、衛司君フラグ無双中です↑↑

それで……まあそろそろ彼の正ヒロイン決めないとなあ、と思って話を出しました。

因みに正ヒロイン候補キャラクターは、フラグ未成立を含め、

カノンノ、メリア（ディセンダー）、シャーリィ、マルタ

の四人です。

正ヒロインが決まった場合は、ストーリー上の衛司君のフラグ無双のやや低下、閑話で正ヒロインとの場面を増やそう、と考えています。

そしてもう一つ。此方はアンケートというよりはご意見なのですが……現在ちよつと無謀かもしれませんが、原作（マイソロ3）でいまだ未登場となっているテイルズキャラをほんの少数出してみようかな、と考えています。

無論、現在どういう感じに出そうか、誰を出そうかなどは決まってはいません。

また、自分の技量で本当に出せるかも分かりません；；  
此方はあくまで未定なのですが、良ければご意見等頂ければ嬉しいです；；

と、こういう感じですよ↑

宜しければ皆様、アンケートとご意見の方、宜しく願います+

閑話——喜ぶ事とは——（前書き）

アンケート現在、フラグルート真っ直線で御座います↑  
皆エ……俺…そんな皆が大好きだっ！↑↑

今回の閑話は、現在状況でアンケートで個人一位となっているメリ  
ア話です＋  
取り敢えずメリアのデレが書きたいなー、と書いてみました＋  
だけど……どうしてこうなっ た ！ ？ ↑

※今回の閑話はいつもよりかなりグダグダです；；

※皆が皆、キ ャ ラ 崩 壊 ↑

※ロックスさんエ……↑↑↑

閑話——喜ぶ事とは——

「——……衛司の喜ぶ事……何……？」

「……………はい？」

バンエルティア号の食堂にて、昼食の準備をしていたロックスは、今現在、隣でその準備を手伝っている少女、メリアのそんな唐突な言葉に、思わずそんな声を出していた。

「……ま、また随分と急ですね。どうしてまた衛司さんの……？」

「……………衛司、喜ぶのを見ると……なんか……胸がぼやぼやする」

「……………またですか」

ロックスの問いに、メリアは一度小さく首を傾げた後、そう説明すると、ロックスはそう呟いて思わず溜め息を出した。

話の話題である《乾 衛司》は、最近どうにも……異性からの好感度が上がってきている。色んな意味で。

ロックス自身、知っている限りでは、カノンノにマルタ、ロットタに

…定かではないがフアラも衛司を意識しているのを分かっている。  
そして今現在では、メリアもだ。

だが、メリア自身は、記憶喪失でもある為か、その感情の深い理由は理解出来ていないらしい。

「…オマケにあの人、鈍感ですからね。…何したいんでしょう、本当」

「……ロックス……？」

「―あ、すみません。えっと…それで、衛司様が喜ぶ事でしたよね？」

少し考え込んでいたのかメリアの声に気付くとロックスは再確認のように問うと、メリアは小さく頷いた。

因みに、今話の話題の張本人、乾衛司は、現在エミル、カイウス、ルカと共にコンフェイト大森林に大量発生したらしいプチプリ百体の討伐に出ている。

「それにしても…衛司様が喜ぶ事、ですか。……衛司様は基本、何でも喜んでくれますからね」

「……何でも……？」

「ええ、何でもです。料理を作っただげる事、料理の作り方を教える事、相談に乗っただげる事、一緒に話をする事…他にも色々ですが、その何でもに衛司様は喜んでくれるんですよ。それをする此方も嬉しくなってしまうぐらいに…」

其処まで自分で言っただけ付くロックス。そうだ、きっと彼の話してて此方も楽しくなる、不思議とひかれる感覚に、誰もが衛司に友人的にも、異性的にも好意を抱いていくのだろう。

そこまで考えると、ロックスは自然にクスリと笑みを浮かべた。

「……メリア様、衛司様が喜びそうな事、私なりにですが…教えましょうか？」

「……ん……？」

ロックスの急なその提案に、メリアは一度首を傾けたが、直ぐに頷いてロックスから『ソレ』を教わった。

「――…ハア…疲れた…」

ゆっくりとした足取りで食堂に入る僕。  
自分で受けといてなんだけど、あの依頼はない。プチプリ百体討伐は本当にないよ。

「おかえりなさいませ。討伐、終わったんですか？」

食堂に入るとそう言って笑顔を見せるロックスさんと、何か柱の影からジーツと此方を見ってくるメリアが居た。

…いや、メリア何事？

「いや、うん…まだ途中。プチプリちょうど五十体倒した所でアイテム切れしたからね。エミル達は今アイテム補給に行ってて、…悪いけどロックスさん…多分直ぐ行っちゃう事になるからお弁当、作ってくれない？」

「いえいえ、何となく分かってたんで…ちゃんとお弁当は作ってますよ。この後も頑張ってくださいね」



そう言って僕にお弁当を渡してくるロックスさん。うん、流石と言  
うか何というか……有り難い。

「ん、ありがとうロックスさん。……アレ、三つ……？」

「ええ、私が作ったのは三つです。それで後一つの衛司様の分は……」

「……ん……」

渡されたお弁当の数に小さく首を傾げて、ロックスさんに問いかけると、返ってきたそんな言葉の後、いつの間に出たのか、少し大きなお弁当を持ったメリアが居た。

「えっと……メリアが作ってくれたの……？」

「……ダメ……だった……？」

「ううん、嬉しいよ。ありがとう、メリア」

「ん……」

僕の問いに首を傾げるメリアにそう言って笑って頭を撫でると、嬉し気な表情をする。

取り敢えず待ってるであろうエミル達に間に合おうと、メリアからお弁当を受け取ろうと少ししゃがんでメリアからお弁当を受け取った瞬間――

「――ん…」

「…………え…………？」

自分の頬に何か触れる感覚に目を向けると、何故か真横にメリアの顔があった。

…………え…………？

「…………が…………頑張って、ね…」

そう言った後、頬を染めて食堂から走り去っていくメリア。

いや、ちょ、今…………頬…………ゑ…………？

「――おい、衛司！？まだn――「うるあああああっ！！？」――え、衛司っ！？ちょっ！？」

気付けば僕は、食堂に僕を呼びに来たであろうエミルを横切り、全力疾走していた。

うん、取り敢えず今は……駆け抜けたんだっ!! (現実逃避)

――……この後、捕獲された衛司はこの際の記憶がないらしい。

――

食堂で一人残されたロックスはどこか楽しげな笑顔を浮かべていた。

「さて、これでメリア様が皆様より一步リードですかね……。これからどうなるでしょうねー」

そう一人呟くように言うロックスの表情は……本当に、いい『笑顔』だった。



閑話——喜ぶ事とは——（後書き）

モルモ「オイラと契約してディセンダーになってよ☆」

ごめん、上は気にしないで下さい↑↑

今回の閑話、正直グダグダすぎたorz↑  
やっぱりアレですね、願望って難しいですね↑

そしてロックスさんエ……↑↑

アンケートとご意見の方、まだまだ募集中ですので宜しければ、宜しく願います+

最後に一言、

『萌え』って難しいね↑↑

## 第九話（前書き）

今更だけど、第九話でまだカダイフ砂漠って結構遅くね？って思ってたしまった自分が此処に……↑↑

原作ストーリー結構長いし……上手く書けるだろうか、自分……↑↑

あ、アンケートはいまだ絶賛受付中ですので、ご協力宜しくお願いします+

※また戦闘前の半端切りです↑

※ふざけた訳じゃない、『萌え』が書きたかったんだ↑

※イリアの口調が見当たらない……orz↑

## 第九話

——やあ、皆。最近、本当に実力がついてるか不安になっている僕こと、乾 衛司です。

何故、僕がこんな始め方をしてるかというところ……

「——うわあああああっ！！イリア早く！スプレッドでもアクアレイザーでもいいから早くうううっ！！」

「分かってるからあんまし動き回らないでよっ！狙いにくいっつのっ！！」

「イヤ、僕達も動き回らないとこれ危ないから！本当に危ないからっ！！」

『グオオオオオオッ！！』

「「イヤアアアアアアッ！！」」

現在、カダイフ砂漠にてクレス師匠と一緒にイリアの魔法や援護時間を稼ぐ為に、僕達の身の丈二倍以上は楽に超える『サンドワーム』から逃げ回ってます。  
うん、現実逃避です。

「――ハア……ハア……危なかったあ……。依頼受けてオアシスルート入った瞬間サンドワームとか……。不意打ちすぎる……」

数分後、僕達は息を整えながらなんとか倒したサンドワームを見ながらそんな言葉をもらした。

「ハア……。うん、確かに危なかったね。でもなんとか倒せたし、ケージも無事みたいで良かったね」

「まあね。ケージに近付きそうになったらメリアが守ってくれてたし」

「そうだね……。……ありがとうね、メリア」



「……ん…」

クレス師匠の言葉を始めに、イリアがそう言うのと、僕がそう言った後、メリアの頭を撫でる。

……それにしても……

「…このケージに入ってる魔物……本当に何なんだろう」

メリアの頭から手を離し、その近くなる大きめなケージに目を向けると、僕はそう言葉を出した。

今回の依頼の理由であるこのケージ。依頼者であるモラード村の村長、トマスさんの依頼内容の『オアシスへの魔物の搬送』。結局この依頼を受けたメンバーは僕、メリア、クレス師匠、イリアであった。

そして、カダイフ砂漠へつき、依頼を受け、魔物が入ったこのケージを受け取った際、受けた条件がある。

それは――『絶対にケージの中を見ない』事。

トマスさんが言うには薬で眠らせてあるから光で起きてしまうかもしれないらしいのだが……イリアが開けようとした時の反応がどうにも……何か隠しているようにも見えた。

それに理由も……若干矛盾点がある気もする。

僕の気のせいならいいんだけど……。

「うゝっ！ やっぱり面倒だし、暑いし、此処でパパッとケージを撃ち抜いて帰りましょうよゝっ！」

「駄目だよ、イリア！ 僕達の依頼は魔物の搬送であって、魔物の討伐じゃないんだから！」

ケージの前で繰り広げられるイリアとクレス師匠の数回目にもなるやり取り。

僕も正直、このケージの正体が気になっているが……クレス師匠はかなり真面目だから、中を見たくてもさっきのイリアのように止められてしまう。

——…と、言うか……今更だけど、なんで僕…こんなにケージの事を気にしてるんだろ…？

『赤い煙』のあんな生物変化を見た後に、直ぐに赤い煙を浴びたジヨアンさんの住んでいるモラード村からこんな依頼が来たから…？でも……もし本当に『そう』であるなら……あの村長は……

「——…衛司……？」

不意にそんな声が聞こえ、服の袖を引かれるような感覚に顔を向けると、メリアが心配そうに此方を見ていた。

考え過ぎてたのが顔に出ていたのだろうか。

「どうしたの、メリア…？」

「……大丈夫…だよ」

「……え…？」

「……何か分からない…けど…皆居るから…衛司一人じゃないから…大丈夫…だよ…？」

メリアの唐突なそんな言葉に、思わず先程までの考えが止まってしまった。

僕ってそこまで思い込んでた表情してたんだろうか…。

でも、そんなメリアの言葉のおかげで、自分なりに大分表情が落ち着いた気がした。

「——…うん。そうだね…ありがとう、メリア」

「……ん……」

そう言った後、僕は手を伸ばすとそっとメリアの頭を撫でる。癖に

なってしまったのか最近、よく僕は人の頭を撫でている気がする。  
落ち着け僕。よく考えたらそれは確実にセクハラだ。

撫でている対象であるメリア自身は目を細めて結構心地良さそうに  
している。

「……………」

「……………あ……………」

なんとなく、手を引いてみるとメリアは小さく声を出した後、どこ  
か心残りの表情をしてシュンと落ち込んだ様子を見せる。  
何だろう……この子犬みたいな生物。

少し可哀想に見えたので再び頭を撫でると今度は機嫌良さげな笑み  
を見せた。

……本当になんだろうこの子。  
いや、うん……普通にかわい——

「……………」

——今更だけど気付いたらイリアとクレス師匠が口論を止めて此方  
を見てた。  
うん、ガン見で。

「――：あ、ご、ごめんっ！アンタらがまさか『そこまで』進んでるとは思わなくて……」

「ちょっと待ってイリア！絶対なんか勘違いしてるよねっ！？『そこまで』ってどこまでデスカっ！？」

「衛司…、メリアと一緒にしていたのは分かるけど、今は依頼なんだからちゃんとしないと…」

「師匠っ！？アンタやけに『大丈夫、僕は分かってるから』みたいな顔してるけど色々分かってないからね！むしろ色々間違ってるからねっ！？」

「「はいはい、ごちそうさまごちそうさま」」

「アンタら武器構えろオオオオオッ！！」

木刀を持って走り出す僕とそれから逃げるように走り出すイリアとクレス師匠、突然始まった僕達の追いかっこに小さく首を傾げてそれを見ているメリア。

依頼そっちのけで何やってんだろ、とか思ってしまったけど……メリアの言うとおりで、こんな事のおかげで先程までの考えが一気に楽

になった気がした。

うん……僕は、僕は一人じゃないんだ。

因みにこの後、ちゃんと二人を捕まえて誤解である事を言いました。

その時の二人の疑うような表情に本当にイラッときたのは言うまでもない。

-----

「――此処がオアシス、か……さっきまでの砂漠地帯に比べて結構綺麗だなあ……」

その後、僕達はなんとかオアシスまで到着する事が出来た。

目前に広がるそれは先程までのただっ広い砂漠とは打って違う、少しの木々と小さな泉がある光景だった。

さっきまで砂ばっかり見てたせいかな余計に綺麗に見えた気がした。

「あゝ……もういいからさっさとケージ置いて帰りましょうっ！正直暑くて堪えないのよっ！」

「それもそうだね……。イリアの言うとおり、早くケージを置いて帰

ろうか」

イリアとクレス師匠の言葉に小さく頷いて、ケージを泉の前まで運んでいく。

……こんなもんなかな？

「――さて、それじゃ帰ろう――」

『ギシャアアアアアッ!!』

「「「!?!」」」

ケージから離れた瞬間、響き渡った声に視線を向けると、どこから現れたのかケージの周りに四体のトカゲの様な魔物『サンドファング』が群がっていた。

「コイツ等……一体どこから……」

「でもアイツ等、ケージに群がってるじゃん! もう気にせず帰っていいでしょ!」

いきなりの出現に戸惑っていたが、イリアの言葉の通り、サンドフ  
アングはケージの周りに集まっていた。

確かに本来ならイリアの言葉の通り、此処は帰っていただろう。

——だが、

『——う、うわああああっ!?!? な、なんだ……揺れてるぞっ!?!?』

『な、何が起こってるんだっ!?!?』

「なっ……人の……声……っ!?!?」

突如、ケージの中から聞こえだす人の声。しかもこのどこかで聞いたことのある声は……

「……っ!まさか……ジョアンさんっ!?!?」

「えっ!?!?…それってこの間病気が治ったって言ってた……!?!?」

「じゃ、じゃあ今あのケージの中に居るのは……魔物じゃなくて…



…」

「……………人…」

メリアの最後の言葉で理解し、思わず舌打ちをしてしまう。  
くそっ……………案の定、やっぱり…ジョアンさんの身に何かあったんだ  
……………！

「っ……………皆、散開して一人一体の割合で早くサンドファングを倒そう！」

「そうだね……………早くしないとジョアンさんが危ないっ！」

各々武器を持ってサンドファングに向けて走り出す。  
くそっ……………最悪の状況にはなってないでくださいね、ジョアンさん  
っ！

そして…戦闘は始まった――

## 第九話（後書き）

また戦闘前半端切りですみませんorz↑  
多分自分が戦闘まで書き出したら投稿にプラス一週間弱はかかりそうなんで、いや、マジで↑↑

そして父さん、僕、文才がほしいよ↑↑

旦那エ……『萌え』って難しいよ…orz

次話はサンドファンク戦です+

なるべく早く投稿出来るように頑張りたいです；  
アンケートもまだまだ受付中ですので、ご協力宜しくお願いします+

……感想が欲しいなー（ボソツ／チラツ↑↑↑↑

では、次回も宜しくお願いします+

## 第十話（前書き）

父さん、文才が欲しいよ↑↑

やっぱり戦闘文って難しいですね…；

畜生……文才が欲しいぜ、旦那エ……↑↑

今回は原作のシナリオがシナリオなので多分、シリアスです。

何故多分か？それは簡単。自分にシリアスは書けないからさっ！↑↑

………Orz↑

## 第十話

——武器である木刀を手にする僕。標的はケージに群がる魔物『サンドフアング』の一体。

「——魔・神・剣ッ！」

ケージから意識を此方に向けるために放つ斬撃。それは見事にサンドフアングに直撃し、此方を睨んでくる。

『キシヤアアアッ！』

「っ……双牙アッ！！」

奇声を上げながら、トカゲ特有な走り方で接近してくるサンドフアングに、再び斬撃を飛ばす。  
うん、正直キモかった。

二度の斬撃を受けたのもあってか、サンドフアングの動きが止まる。それを確認したと同時に僕は走り出し、サンドフアングに接近する。

「ハアアアアッ…双・牙・斬ッ！！」

怯んでいるサンドファングに対し、攻撃の手を休める事無く斬り下げから斬り上げの攻撃を与える。

サンドファングは石化とか色々厄介なので、此方としても手早く倒したいからだ。

此方の石化は本当に質が悪い。ゲームでは石化なんて簡単な戦闘異常かと考えていたのに、此方の石化は……あまり語りたくない。少なくとも、味方を石化させるのも自分が石化するのも嫌だというのは確実である。

「――これで……飛・天・翔・駆ッ!!」

双牙斬を受けて上昇したサンドファングに対し、自分も飛び、トドメとばかりにサンドファングに向け急降下し、木刀を打ち込む。度重なる連撃にサンドファングも効いたのか、僕が着地したと同時に、サンドファングは奇声だけを残して消滅した。

「――…ハア……他の皆は…」

息を整え、他の皆に視線を移すと、皆もちょうど今倒したところであつた。

「――皆、大丈夫みたいだね。……問題は…」

サンドファングの群れを退けケージの前に集まり、クレス師匠がメ  
ンバーを確認してそう言うのと、ケージへと視線を向けて手を伸ばし  
た。

「契約はどうすんのよ…？」

「…僕達の依頼は『魔物の搬送』だ。僕達の受けたのは『人間を捨  
てる』事じゃない」

イリアの質問にクレス師匠はそうはつきりと返すと、ケージの扉の  
鍵を開く。

僕達はそれを静かに見守る。メリアも少し不安なのか、不意に服の  
袖を引かれたので、そっと手だけを動かして頭を撫でた。

終始無言のままクレス師匠がケージを開く――と、同時に中から現  
れた二体のモノに思わず僕達は身構えてしまう。

ケージの中から現れたモノは…：姿形は確かに人型であるが…：それ  
はまるで船で見た変化を起こしたコクヨウ玉虫のように…：岩のよう  
な独特な皮膚に覆われた『ナニカ』であったからだ。

だが、その『ナニカ』が着ている服に僕は見覚えがあった。

「……まさか……本当に、ジョアンさん……ですか!？」

「は、はい……。その声は……衛司君……ですかっ!？」

聞き返してきたその声はやはり、ジョアンさんのものであった。じやあもう一人は……ジョアンさんが言っていたミゲルさん、か……?

「……どうしてそんな姿に……」

「そ、それが……私達にもわからないのです。

あの……赤い煙に触れてから、病は治って村で過ごしていたんですが……なぜかはわかりませんが、村の中にいる事がひどく居心地悪く感じる様になって……いえ、村……だけじゃなく、この世に生きている事自体に……。自分で、自分の存在が分からなくなって……自分が今まで知っている自分でない気がして……」

どこか苦しそうに、淡々と説明していくジョアンさん。『自分が自分でない』……? 一体……。

「——そうして、次に意識がハッキリした時には檻の中でした。私は、この異形の姿になって暴れていたらしいのです」

「――俺も：ジョアンと同じです。赤い煙に触れて、病気が治った後：ジョアンと同じ様に体の変化を始めて……。もう、村には置いておけないと……。でも、確かに：俺の身体はもう人とは違う様だ：人の中じゃ、生きていけないんだろうよ。  
――ああ、これから俺達はどうすりゃいい！？ここに残って死ぬのを待つしかねえのか：！？」

淡々と説明した後、苦しそうに、どこか悔しそうに言葉を出すジョアンさんとミゲルさん。  
願いを叶える赤い煙。それを受けた結果とはいえ……。いくらなんでもこんなのって……。っ！！

自分の何も出来ない悔しさに思わず舌打ちをしてしまう。

――その時……。

「……………」

「……メリア……？」

隣で黙っていたメリアが歩き出し、二人の前で止まる。僕達が不思議気にメリアを見ていると：それは起こった。



「――え……っ!？」

「「!？」」

突如、メリアの両手が光り出し、そのまま辺り一面が眩い光に包まれ、僕は思わず目を塞いでしまう。

そして次に目を開くと……ジョアンさんとミゲルさんの姿は……先程の異形ではなく、元の人の身体に戻っていた。

「これは……っ!？」

「人の……元の姿に!! ああ、あなた方には助けられてばかりです! ありがとうございます!!」

「凄い……メリア、これは……君がやったのかっ!？」

その場の全員が驚いた様子でメリアを見る。メリア自身はどこか疲れたのか……フラフラと此方に向き直る。……って、危なっ!

「……わからな……い……っ」

「メリアっ!!」

言い切り、崩れかけるメリアに駆け寄り、倒れる前になんとか支えた。

……眠ってるみたいだ。

「…よく分かんないわね。無意識なのか…コイツの力なのか」

「少なくとも…今は一旦船に戻ろう。メリアを休ませないと……ジ  
ョアンさん達も、僕達の船に来てください。ここに留まるのは危険  
ですから」

「は、はい…」

ジョアンさん達が頷いたのを見て、メリアを背中に背負い、僕達は  
船へと戻る事にした。

それにしても…メリアのあの力……多分、『ディセンドー』の力だ  
ろう。

じゃあやっぱり……今回の世界樹の敵は…あの赤い煙って事……な  
のかな。

その後、なんとか船まで戻り、今回の事を説明した。メリアは医務室に直ぐ様休ませに行って、アニーがいうにはやはり眠っているだけらしく、身体に異常はなく、少ししたら直ぐに起きる程、らしい。

そして今回の事…コクヨウ玉虫の変化とジョアンさん達の変化。この二つによって、赤い煙が『生物変化の原因』であると確定した。肝心の人の治癒や生物変化を起こす過程は分からないままだが。

次にジョアンさんとミゲルさんの事だけど…アニーの診察の結果、二人は完全に元の人間に戻ったようだ。ただ、しばらくは元の村には戻れないので、アンジュが所属していたらしい教会で保護するらしい。

これで一応一件落着…とは言いたいけど…。

「――やっぱり…僕は気に入らない」

そう。僕は今回の事は正直気に入らなかった。魔物化したとはいえ、同じ村の人間を捨てた事。

それを…何も出来ないとはいえ捨てる此方側には何も伝えずにそうさせようとしたモラード村の村長の判断。

船に戻った当初、僕は直ぐにでもモラード村に向かって、あの村長に一言言いたかったけど…アンジュやミントに止められて、結局行くことはなかった。

自分が今いる世界は確かに…最近この世界に馴染みすぎて薄れ掛けたけど…ゲームの世界なんだ。

元いた世界では絶対に起こる事のない今回のシナリオ。だからこそ…今、実体験したからこそ…今回の事に僕はイライラしてるんだろう。

恐らく…今回の敵であろう『赤い煙』。

それに対して…ただ一人の人間として…、この世界で戦うものとして…改めて、戦う事を心に決めた。

## 第十話（後書き）

ぐっだぐだですね、分かります↑

今回はややシリアス……に、なってたんだろうか……↑↑  
不安です、ええ不安ですとも↑↑

実はゲーム上は、正直自分はあまりこのシナリオは好めませんでした；

なんか村長が気に入くわな↑↑↑

次話は……多分閑話になるかも、です。

閑話の場合は、衛司君の修業とフラグ編パート2です↑  
皆様、お待たせ致しました↑↑

本編の場合は、原作は次はソーサリーリング編なんですが、ストーリーにあまり差し障りないのでカット（↑）、多分ミブナの里編です↑

皆、もうすぐシンフォニアのあの人だよっ！↑↑↑

ではでは、次回もなるべく早く投稿出来るよう頑張りたいです+

## 閑話―衛司の修行とフラグ編2―（前書き）

駄目だ、文が思い付かない……orz↑

くそう……自信がないぜ、旦那エ↑↑

※原作での、アスベル参戦、シフノ湧泉洞の依頼はまだ先です。今回の閑話の為に出了ました↑↑

※後半、文が荒くなってます；；↑↑

※この物語はフィクションです↑  
間違っても、『衛司君氏ね』（↑↑）、『衛司マジ爆発しろ』（↑↑↑）  
とか思っちゃ駄目です↑↑↑↑

※衛司マジ爆発しろ↑↑↑↑↑

閑話―衛司の修行とフラグ編2―

「ハアアアアッ!!」

「く……………っ!」

――目前で横風に抜かれる剣閃。それを何とか避け、体勢を整えながら納刀したように持った木刀を素早く拔刀し、攻撃しようとするが…

「まだ拔刀仕切るのが遅い! 裂震虎砲ッ!!」

「くうっ!?! ぐあああッ!」

見切られたと分かった瞬間、振るった筈の木刀が弾かれ、そのまま、獅子のような一撃が僕の腹部を抉り吹き飛び、僕はそのまま、下へと打ち落とされた。

「――すまない…その、やりすぎた…」

「……いや、うん……僕が悪かったんです…はい」

甲板に横たわっている僕に、申し訳なそうな表情で言ってきた彼、『アスベル・ラント』に、僕は倒れたまま苦笑いでそう返した。

アスベルは皆さん知っての通り、『グレイセス』の主人公であり、騎士団に所属しているあの抜刀術使いの彼である。

此方のアスベルもガルバンゾ国の騎士団に所属していて、ガルバンゾ国の王女であるエステルを迎えに来た……みたいだったんだけど、エステルはそれを拒否。それで、結局エステル達と同じく暫く、このギルドを手伝ってくれるようになった。

それで、今どうしてこうなっているかと言うと……僕がアスベルに抜刀術を教わりたい、と言ったからだ。

何でか、って言う……やっぱり僕はまだまだ弱いし、前の赤い煙の件もあり、それこそ少しでも戦える力が欲しいからだ。

前の世界でも抜刀術は少しかじってはいたけど……やっぱりそう簡単に来る訳もなく、ちょうど抜刀術使いでもあるアスベルが加入したから、直々に彼に教えてもらおうと考えた。

それに……うん、正直言う……アスベルの抜刀術には男子特有の憧れがあるからだ。



でもまあ……結局はこの結果なんですがね。

「――…それにしても……聞いていた通り、衛司は凄いな」

「へ……？」

そんな事を考えていると、不意に言われた言葉に思わずそんな声を出してアスベルを見る。

僕が凄い……？

「いや、そんな…僕は凄くなんか全然ないよ。さっきもズタボロだったし……」

「いや、君は十分凄いよ。なんだかんだありながらも、君は少しずつ、確実に俺の教えた通りに動いていつてる。聞いてたとおり、やっぱ君は凄い実力の持ち主だよ」

「そう……かな？ 実感ないけど…そう言われると嬉しいや」

アスベルのべた褒めに思わず恥ずかしくなり頬をかいてしまう。僕が凄い……か……。本当、実感ないなー。

——…それにしても。

「聞いてたとおりって言ってたけど…：一体誰が僕が凄い、なんて言ってたの？」

そこが思わず気になった。少なくとも僕の事を凄い、なんて言う人は早々や滅多を通り越して確実に居ないだろう。  
もし居たとしたら…やっぱりクレス師匠やスタン師匠だろうか…？

「え？ そうだな…俺がその話を聞いたのはカノn——」

「——アスベル…？」

アスベルが僕の問いにそう言いかけた時、不意に声が掛かり見ると、カノンノやロツタやマルタといったやけに揃えが珍しいメンバーが笑顔で立っていた。  
そう、『笑顔』で。

「…あれ、どうしたの三人共」

「ううん、深い意味はないんだけど…ちょっとアスベルに用があっ

て」

問いにそう、カノンノが笑顔のまま答える。何故だか、…後ろから何かが見えてる気がした。

アスベルもそれを感じたのか、どこか表情がぎこちない。

「お、俺に……？」

「そうそう、アスベルに。構わないかな、衛司……？」

「あ…僕はもう大丈夫…ですけど…」

「そう…じゃ、ありがとう」

そう言った後、カノンノ達は笑顔のままアスベルを連れて行った。連れて行かれるアスベルのBGMは、きつと『ドナドナ』が似合うだろう。

数秒後、ホールの方から『マモレナカタ…』とか聞こえたけど…  
…きつと気のせいだろう。うん。

「――雷・斬・衝ッ!!」

「――ファイアボールッ!!」

迫り来る蟹のような魔物『クラブス』に対して、雷を纏った木刀を振り下ろすと、クラブスの動きが止まり、その瞬間に火の玉がクラブスに直撃し、クラブスは消滅していった。

「――…ふう…今のでちょうど十体だったっけ？」

「はい。確かそのはずです」

僕の問いに小さく頷いてそう答えるシャーリィ。

僕達は現在、『シフノ湧泉洞』と呼ばれる場所にて、クラブス十匹討伐の依頼をしていた。

まあ、一番の理由は、アスベルに教わった抜刀術をどれだけ覚えたか実戦で試そう、と思って受けたんだけど。

アスベルについてきて貰おうかな、と思ってたけどアスベルは何故の負傷で医務室で眠っているらしく、流石に一人は駄目だと言われ、同行者はちょうど依頼もなく休んでいたシャーリィに。

そう言えば、シャーリイを連れて行く時、セネルから『シャーリイに手を出すなよ』ってかなり念押しされたけど……どういう事だろ？

「それじゃ……この水が満ちてこないうちに、帰ろうか」

「は、はい。そうですね」

僕の言葉に再度頷いて答え、歩き出すシャーリイ。  
それにしても……

「……シャーリイ。前にも一度言ったけど、僕には別に敬語じゃなくてもいいよ」

「えっ！？あ……はい……」

僕の言葉に、どこか慌てた様子を見せるシャーリイ。

彼女は僕に対しては何故かずっとこの様子なのだ。シャーリイは僕が此処にきた当初から船のメンバーにいた事もあるけど、詳しく知り合ったのは確か……僕とセネルが訓練してるのを見ている時だったかな。

あの時のセネルの目はなんでか怖かったなあ……。魔神拳・竜牙を連発してきたもんなあ……。

……とりあえず、兎に角シャーリイは何故だかそれから僕に対して結構遠慮しがちである。

うーん……もしかして……

「シャーリイ……もしかして僕って……怖い？」

「……え……？」

「いや、さ……シャーリイってなんか僕に遠慮しがちだからさ。もしかしたら、僕がなんかその……怖がらせたりするのかなあって……」

「……はあ……」

僕のその言葉に、シャーリイは額を抑えて溜め息を吐いた。  
あれ、違うのかな……？

「あのですね……私は別に衛司さんは怖いなんて思ってますよ。  
そのですね……あの……」

「……？」

そう言いかけて何かもじもじとし始め言葉を濁すシャーリイ。……  
？何だろ……？

しばらくそんな話を話ながら歩いていると、不意に足が止まった。

「――あ…少しだけど…水が来ちゃってる」

「――そうですね…出口まで後少しなんですけど…」

出口まで後少しのところで、膝ほどまで一カ所の道の水が満ちてしまっていた。

「どうしよう…。此处を通らないと出口の通路までいけないのに…」

隣のシャーリイからそんな言葉がもれる。

此方のシャーリイはどうやら『レジェンディア』同様、海水が苦手らしい。

どうしようか…。

……あ……。

「ねえ、シャーリイ。ちよつとシャーリイには辛いかもしれないけど……一応此処を通る方法があるんだけど…大丈夫？」

「え……それって……？…通れるなら私は大丈夫ですけど…一体…？」

「うん……。じゃあ、ちよつと目を閉じててね」

シャーリイは僕の言葉に小さく首を傾げた後、目を閉じる。  
うん、これは本当にシャーリイに辛いかもしれないからね。

「——よいしょ、と……あ、シャーリイって結構軽いんだね」

「……へ……？」

僕のした行動と言葉に知らずと目を開けたのか、シャーリイはそんな声を出した。

まあ、それはそうだね……僕、今シャーリイを横抱き（属に言うお姫様抱っこ）してるもん。

「——…え、ちよ…え……ええっ!？」



「…だから言ったでしょ？ シャーリィ、恥ずかしくて辛いでしょ…？」

予想通り真っ赤になってるシャーリィ。うん、やっぱり怒ってるかなあ…。

因みに何故背中に背負うのではなく、横抱きかと言うと、背負っているで一応膝まであるからもしかしたら足がついてしまうかもしれないからだ。

「ごめん…やっぱり怒ってるよね…？」

「え、あ…その…別に…怒ってないと言いますか…その…うう…」

僕の言葉に真っ赤なまま言葉を出そうとするシャーリィ。  
うーん……とりあえず、今のうちに早く行こうか。

——その後、その通路は無事に抜けれたけど、何故か船に向かうまで、シャーリィに横抱きを強要された。

……何でだろ……？

———『オマケ』

「なあ、衛司…。シャーリイをお姫様抱っこしたって本当か…？」

「え？…あ、うん。…その…通路に海水が満ちてて危ないかなって  
思ってた…」

「そうか……………」

「うん……………。それで…………やっぱり怒ってるよね？」

「大丈夫だ。俺は怒ってない」

「そう……。じゃ、なんで…………拳を構えてるの…？」

「大丈夫だ、問題ない」

「問題大有りですけd『魔神拳・竜牙アッ!』――げぶるあああああ  
ああっ!？」

閑話―衛司の修行とフラグ編2―（後書き）

ごめん、今回マジふざけすぎたと思うっ！↑↑↑↑

旦那、マジほのぼのが書けないよ…：どうしようよ…：O R Z↑↑↑

とりあえず…：衛司マジ爆発しまえ↑↑↑↑

次話できれば本編をちゃんと書きたいです…：；

自信ないなー、うん…：…O R Z↑↑↑

## 第十一話（前書き）

うわーい、話が思い付かない…orz↑

やっぱり難しいもんだね、うん↑↑

後、以前のアンケートの結果を発表します。

アンケートの結果、正ヒロインの件は、いまだ完全には決まっては  
いませんが二人にはしぼりました。

ラスト付近の話の構成次第でどちらかにしようと考えています＋  
それで、そこまでのしばらくの間は意見で頂きました、衛司君フラ  
グ無双で行こうと思います＋↑↑  
やったね☆↑↑

後、原作未登場のキャラについてですが…一応、出来れば出そうと  
思ってます＋

まあ、どこで誰をどう出せるかは分かりませんがね…↑↑

※相変わらず戦闘前切りです↑

※文が……荒いorz↑↑↑

## 第十一話

「――赤い煙は、最近じゃ色々な形に見える、って言ってたよね？  
それって…もしかして、実態を持つとしてるのかな？」

クラトス師匠との修行を終え、ちょうど食堂にてクラトス師匠と一緒に昼食を食べていると、その場にいたファラがそんな話を出した。確かにファラの言うとおり、最近噂では様々な形をした赤い煙を見るようになったらしいけど…。

実態を持つとしてる、か……まあ、結局正体不明のままだからなあ…。

「精霊なら、正体を知っていたりするかな」

「精霊かあ…あってみたいなあ」

ファラと同じく食堂にいたコハクの言葉に、僕は思わずそんな声を出した。

いや、前作でも精霊でセルシウスが出てたし、テイルズファンならば出来ればみたいもんだもん。

「でも、本当にいるかはわからないよ…。昔はいたって聞いた事あるけど、どこまで本当かわからないよね」

「精霊と交流を持つ、『ミブナの里』という場所がある」

コハクのそんな言葉に、先程まで静かだったクラトス師匠が不意に  
そう言葉を出した。

「…ミブナの里…：師匠、それって…？」

「行く意志があるのなら、案内する。依頼として届けておこう。ま  
あ…衛司はちょうど先程の鍛錬の成果もみたいから出来る限りつい  
てこい」

「う…：…了解致しました」

それだけ言うとかラトス師匠はホールの方に歩いていった。  
それにしても…：『ミブナの里』かあ…。

「――ミブナの里…、聞いた事があります。あそこは妙な昔話があ  
るんです」

不意に、厨房にいたロックスさんが此方に来てそう言葉を出した。

「妙な昔話……?」

「ええ、人がお化けになったり、動物になったりする昔話です。他にも、悪い事をしてカエルにされた男とか……」

「うわぁ……なんか……怖いな」

「ロックスも元々ヒトだったりしてね!」

ロックスさんの説明に思わず苦笑いしていると、唐突にファラが笑ってそう言った。

「えーえええ……えっと。何でしょうか、ヤブカラボーに……」

「ふふ、冗談だよ!ただ、ロックスってすごくヒトみたいだから。私達より頭がいいし、色んな事出来るし。何だかヒトとの違いを感じないもの」

「そ、そうですか。それは……、どうも……」

ファラの言葉を聞いて、どこか焦った様子から少し落ち着いた様子を見せるロックスさん。



……？どうしたんだろ……？

その後も少しロックスさん達と話をしてホールに向かう事にした。

「ん……？」

ホールに入ると、足下に一枚の何か書かれた紙が落ちていた。誰かの捨て忘れかな……？

手に取って見ると……案の定、文字が分かりませんでした。  
うん、そういや僕、まだ完全にこの世界の文字覚えてなかったね。  
……自分で言ってる泣きたくなった。

取り敢えず、自分が分かる範囲で読んでみる。

「——えつと……『終末……近し』？……『今こそ……ディセンダーが降臨する時……ディセンダーをこの世に迎え……腐敗した世界を共に打ち砕き……輝ける未来を再建しよう』……『世界再建の要……、暁の従者』？」

読んでみて改めて小さく首を傾げる。ディセNDERを崇拝する団体……前作でいう『ナディ』みたいな存在だろうか……？  
だとすると……危ない、かな？

こういうの場合……もし本当にディセNDERが居ると分かればどんな過激派な行動を取るかわからない。それこそ、前作で『マナ』を崇拜し過ぎ、負の感情に落ちた『ナディ』のように……。

「……しばらくはメリアと一緒に居るべき、かな…」

「――あら、それはメリアへの告白かしら？」

「――ブっ!？」

突如、背後から聞こえた声に驚き振り向くと、そこにはまさに『ニヤニヤ』という擬音が似合いそうな笑みを浮かべたアンジュが居た。

「う……いや、別に告白とかそんなんじゃないから……」

「あら、そうかしら？ 怪しいわねえ……その紙は……？」

「ん……ただのゴミ」

僕の言葉に、依然と笑みを浮かべるアンジュは一度僕の手にしていく紙に視線を向けた後、再度僕を見てそう聞いてきたので紙を丸めてそう答えた。

少なくとも…今はあまり気にする事はないだろうし。まあ、一応警戒すべきだろうけど。

「――…そう言えばアンジュ。クラトス師匠から話、聞いてる？」

「ええ、聞いている。それにしても驚いたわ…精霊と関わりのある里が実際にあったなんて…。教会でも、世界樹と共に精霊を奉じるけど、私達の様な教会関係者でも精霊と会った人なんていなかったから…」

「そっか…。もし本当に精霊がいるなら…赤い煙についてまた一歩近付けるかな」

「そうね。さあ、肝心のミブナの里へ行く方法なのだけど、ブラウニー坑道を通ることになるらしいの」

「ブラウニー坑道を……？」

「ええ。何でもこの前の奥地を更に深く行くとか…それじゃ、行く人数が揃うまで待っててね」

アンジュのその言葉に頷いた後、僕は準備の為に自室に向かった。ブラウニー坑道の更に奥地かあ…なんか嫌な予感しかないなあ…。

そして現在、ブラウニー坑道の三層目を魔物を倒しながら歩いている。

結局パーティーはクラトス師匠に僕、ハロルドにメリアとなった。…最近思うけど、僕よくメリアと結構一緒に依頼行きまくって本来の重要なイベントがなんなのか分かんなくなってきた。いや、元から知らないけど。それにしても……

「メリア…何でハロルド、あんなにノリノリなんだろう？」

「……さあ……？」

僕とメリアは、ヤケにテンション高い（いや、まあいつもだけど）ハロルドを見ながらそんな話をしていた。

クラトス師匠の話では確か…ミブナの里は忍者の住む里らしい。忍者というと…：…やっぱ『シンフォニア』や『ファンタジア』のあの人かなあ…。

多分、ハロルドはその忍者に興味津々なんだろう。先程から絡まれてるクラトス師匠の顔がやけに疲れてる表情をしてる。

ただミブナの里で気掛かりなのは…：ウリズン帝国がミブナの里の<sup>ホスチア</sup>星晶を狙っているらしい。

その事もあってこういう人知らない奥地の方を通らないといけないらしいけど…：…やっぱり心配だな。

「――あら…？」

四層目に入り大分奥まで来た辺りで、不意にハロルドが止まり何か

を拾い上げ見ていた。

「何を読んでいる？それは何だ？」

「そこに落ちてた紙。新興宗教の勧誘チラシよ。こんな人のいない所まで布教だなんて、ご苦労な事よね」

そう言って手にした紙を見せるハロルド。これは……確か船で拾った『暁の従者』の……？

「暁の従者……。ディセンダーの出現を待つ集団か」

「世界の危機が訪れた時に現れるディセンダー、ね。まあ、危機の感じ方って人それぞれだろうけど、今が危機の最たる時なわけかしら？」

「どう……だろうね。世界の住人って……わざわざ人だけって訳じゃ無いけどね」

そう言っていると、隣を歩くメリアが少し俯く。やっぱりまだ分かってはないけど……一応ディセンダー……なんだし、不安なのかな？  
そんなメリアの頭をそっと撫でていると――

「わー！！待てっ！こらーっ！っ！！」

多分、女性の声だろうか、そんな声が辺りに響いた。

「なあに、今の声？」

「あの声は…！何か、異様な気配が流れてくる。先を急ぐぞ！」

そう言って走り出すクラトス師匠と後を追う走る僕達。  
異様な気配って…一体…？

「――先程の気配はコイツか」

声のした奥地につくと、そこには大きな台座に乗った石像の魔物『ストーンシーサー』が此方を睨み付けていた。

「……戦う…の…?」

「恐らく、門番のつもりだろう。こいつを倒さねば、ミブナの里へは行けそうにないだろうからな」

「やっぱり！これが忍びの技術なのね♪面白そうだから、相手しちゃおうよ！」

「面白そうって……まあ、取り敢えず…要注意しながら倒さないとねっ!!」

——僕達が武器を構えたと同時に、ストーンシーサーは此方に接近し、戦闘は始まった。



## 第十一話（後書き）

本当、ぐっだぐだですいませんorz↑↑

くそう……ネタを掛ける程の知能と文才が欲しい↑↑

次話はストーンシーサー戦です。

相変わらず戦闘、荒くなりそうで心配ですorz↑

## 第十二話（前書き）

ヒヤッハー！ストーリーが思い付かねえぜ、旦那エツ！！↑↑

……orz↑↑

※相変わらず戦闘が荒い↑↑

※しいなさんマジきょん（ry↑↑↑

※メリ……ア……？↑↑

## 第十二話

『―――！』

独特の奇声を上げ、此方に接近してくる石像の魔物『ストーンシーサー』。

僕達はそれぞれの武器を構えて、ストーンシーサーの接近に対応する。

「行くぞ、魔神剣！」

「行け、デルタレイっ！！」

突撃してくるストーンシーサーに向け、クラトス師匠から放たれる斬撃と、ハロルドから放たれる光弾。

ストーンシーサーはデルタレイの二発を避けるも、避けた直後、魔神剣の斬撃に当たったと同時にデルタレイの三発目が当たり動きが止まる。

それが分かると僕とメリアはストーンシーサーに向け走り出し、攻

撃を開始する。

「吹き飛ばせ！ 裂・震・虎・砲っ！！」

「……滅掌破……」

ストーンシーサーに向け放たれる獅子の形の気と強力な気。  
それは見事に直撃し、ストーンシーサーは吹き飛んだ――かのように見えた。

「……うわぁ……やっぱり……」

「ほう……分離……いや、元々二体で一体だったか」

そう、ストーンシーサーは確かに吹き飛んだ……が、吹き飛んだのは本体であったストーンシーサーであり、土台である魔物『シーサーチェスト』はストーンシーサーが上から居なくなったのもあってか興奮したかのように暴れ出す。

そして、吹き飛んだ筈であったストーンシーサーは何事もなかったかのように着地し、土台が無いのか回転しながら此方を睨み付けてきた。

「二体分離…グフフ、なんか浪漫を感じるわ〜♪」

「余計な事を言っている場合か…。…本体の方は私と衛司が潰す。  
ハロルドとメリアは土台だ」

ハロルドが分離した二体をやけに輝いた目で見てみると、クラトス  
師匠は溜め息を吐いた後、そう指示する。

ストーンシーサーは僕とクラトス師匠を確認すると、転がるように  
移動し、此方に接近してくる。

それに対し、クラトス師匠は何か詠唱を始め、僕はストーンシーサ  
ーに向け走り出す。

「ハアッ！双・牙・斬ッ！」

接近してきたストーンシーサーに向け、木刀による斬り下ろしから  
斬り上げの攻撃を放つ。

『-----！』

「っ！？」

だが、打ち込んだ双牙斬をストーンシーサーは腕をクロスさせ防ぎ、僕が着地した瞬間、その腕を回転させ、僕に向け殴りつけてきた。

「っ…本当…ああいうタイプは苦手だなあ…」

「…衛司、下がれっ！——サンダーブレードッ！」

ストーンシーサーの攻撃を何とか木刀で防ぎきりそうばやいていると、不意に後ろから届いたクラトス師匠の言葉にその場を退くと、強力な雷を纏った剣がストーンシーサーに向け落ち、直撃する。ストーンシーサーは未だに健在していたが、サンダーブレードの効果もあり、動きがよろめく。

「衛司…今なら倒せる。…『アレ』で決めるぞ」

「はいっ！」

クラトス師匠の言葉に頷くと、僕はクラトス師匠から少し離れた位置で木刀を構える。そして、それに応えるようにクラトス師匠も剣を構えた。

目標は目の前で鈍く動くストーンシーサー。それに向け、全力を叩き込む！

「タイミングを外すなよ、衛司！」

「はいっ！食らえ…っ！」

言葉を合図に、僕とクラトス師匠は武器を突き of 体制にしてストーンシーサーに向け走り出す。  
狙いとタイミングは確実。これなら……いけるっ！！

「——衝・破・十・文・字ッ！！」

声と同時に、その名の如くストーンシーサーを十字に貫く二つの剣閃。

ストーンシーサーを貫いた後、クラトス師匠と僕が武器を納めた瞬間、ストーンシーサーは音と共に崩れ落ちた。

メリアとハロルドの方を見ると特に難なく倒したみたいだ。

「——…ふう…勝ったああ」

思わず気が抜けてそんな声がもれてしまった。

いや、だってまあ、強かったですし……。

「――衛司、人工精霊を相手によくやったな。安心しろ、お前は十分強くなっている。まあ……まだまだ鍛錬の必要はあるがな」

「はあ……はい……」

不意にクラトス師匠からそんな声を掛けられつい苦笑いしてしまう。それにしても……。

「師匠……人工精霊、とは……？」

「それは――」

クラトス師匠が言い掛けた所で、不意に後ろから足音が聞こえ、振り返ると……そこには予想通りの人物がいた。

「――しいな。お前だったか……」

「クラトスだったのかい！ 久しぶりだねえ。あいつを始末してくれて助かったよ」



そう、現れたのは、『シンフォニア』で忍者である藤林しいなであった。

しいなは此方を見てニツと笑うと口を開いた。

「あんた達が倒したのは、あたしが『光気丹術』で作ったものなんだ。それが扱いきれなくて暴走しちゃってさ…。もしあれが外に出たら大変だったよ。本当、ありがとう。ところで、何の用だったんだい？」

「えっと…僕達はこの先のミブナの里に精霊に関わりがあると聞いて精霊と話がしたくてきたんですけど…会わせてもらえないでしょうか…？」

しいなの問いに僕が前に出てそう答える。しいなはそれに対しやや苦い表情を浮かべた。

…？ どうしたんだろう…？

「ミブナの里の精霊かい…会わせたいのは山々なんだけど…今はもう居ないんだよ。…ミブナの里周辺の星晶が採取され始めてから、いなくなったんだ」

「ウリズン帝国か…」

「それ以外の国もだね…。奴ら、星晶ばかりじゃなく、土地にあるものを何でも取っていこうとする。ミブナの里が奴らに見つかるの

も時間の問題だよ」

苦い表情のままそう答えていくしいな。

…遅かった、か……くそっ……どんだけ国って、自己満足なんだよ…。

「…だから、奴らが入って来れないようにって、人工精霊を作ろうとしたんだ。…でも、難しくてダメだったね。あたしなりの解釈だったんだけど、結局あの程度さ」

「んー、とりあえず、精霊への接触はムリって事ね」

「……引き、返す……？」

しいなの言葉を聞いてハロルドとメリアがそう言ってくる。  
うーん…やっぱりそれしかないよね。

「そうだな。…一度戻るとしよう」

「待ちなよ！…クラトスが精霊を頼るって事は、余程の事なんだね」

クラトス師匠の言葉にしいなが反応してそう言うと、クラトスは小さく頷いて答える。

「そうかい……。ミブナの里に精霊はいないけど、他の地域にいる精霊についてだったら、何か分かるかもしれないよ。：里に文献があるから、後であんた達のギルドに届けにいくよ」

「本当ですか：！？あ、ありがとうございますっ！」

しいなの言葉に思わず僕は礼をしてしいなの手を握る。良かった：手掛かり無しにならなくて：！

「えっ！？あ、ああ、あんた達にはさっきの礼もあるからねっ！とと、当然の事だよっ！！」

少し驚きながら、何故か頬を赤らめて目を逸らしてそう言うしいな。……あ、いきなり手とか握ったら失礼だね。

「兎に角、ありがとう。しいなののおかげで手掛かりが繋がったよ」

「い、いや……。別にそれ程でもないよ」

改めてそう礼をして手を離すと目を逸らしたままそう答えるしいな。  
うん、本当に良かった。

「――それじゃ、皆戻ろう……か……?」

僕がそう言いながら皆に振り返ると――

「……………はぁ」

――僕に呆れたように額を抑えて溜め息を吐くクラトス師匠と――

「グフフフフ♪」

――嫌に目を輝かせるハロルドと――

「……………胸が（チツ）」

——やけに黒々しい気を放ち出すメリアがいた。  
……というか、メリア…なんか言わなかった…？

……取り敢えず……なんでさ……？

——そんなこんなで……しばらくはしいなの乗船待ちになる事になった…。

——追記、メリアが帰り際…本当に怖かった。

## 第十二話（後書き）

相変わらずぐっだぐだですね、分かります↑↑

と、いうわけでストーンシーサー戦、荒かったですね↑↑↑

旦那エ……もう自分……プレッシャー怖エよ……orz↑↑↑

そしてメリア……。

あれ、おかしいな……自分、メリアは不思議系無口っ子デイセンダーを想像してたのに……どうしてこうなった？↑↑↑↑

すみません、批判等が多ければ即刻書き直します……；

次話は……どうなるんだろ……↑↑

すみません、本当に思い付き更新で……；  
なるべく原作に沿えたら嬉しいです↑  
ではまた、次回、宜しく願いします↑

## 第十三話（前書き）

ネタが尽きてきました☆↑↑

………O r Z↑↑

もう普通に原作ストーリーを進めるしかないのか……↑↑↑

※文が荒い↑↑

※カノンノがカノンノぽくない↑↑

## 第十三話

「オラオラッ！左手がお留守だぞっ！」

「くっ！っう……！」

迫り来る剣閃の連撃。それを手にした木刀と剣で何とか防ぎ、直ぐ様攻撃をしようとするが……

「よっと…当たらねえな」

ひらりと簡単に避けられ再び剣閃の連撃が始まる。  
くそっ……扱いにくっ……！

「そらよ、右側がお留守だっ！」

「しまっ……があっ……！」



僅かに出来てしまった隙。それを突かれ、僕はその場へと崩れた。

「――…おーい、大丈夫か？」

「――は…はあ……大丈夫です」

甲板に倒れている僕を見下ろような形でそう言ってきた、先程までの鍛錬相手であったユーリの言葉に、倒れたまま苦笑いして僕はそう答えた。

「まあ…これでお前が二刀流に向いてないのはよく分かったな」

「はい……仰る通りに御座います」

笑いながらそう言うてくるユーリに苦笑いしたまま僕はそう返した。

うーん……一刀なら結構動くのに…やっぱり二刀となると両方に意識が持っていけずに、どうしても片方が開いてしまう。改めてスパ―ダとか凄いなあ。

「んー……もう少し頑張ってるかあ…」

「おいおい、確かに頑張るのはいいが、お前、最近あんまり休んでねえんじゃないか…?」

「え……そう、かな……?」

「そうだろうが。昨日はアスベルと一日中鍛錬やって、一昨日はクラトスと鍛錬した後、依頼行ってただろ?」

「あ、あれ………」

ユーリのそんな言葉に思わずそんな声を出してしまった。うわあ……全然覚えてなかった…。

「ったく……やっぱりな。……いくら今手掛かりが見つかってリタの解析待ちだからって張り切り過ぎだっつーの」

「はあ……本当にすいません」

ユーリの言葉にそう言葉を出す。

ユーリの言ったとおり、あのミブナの里の一件からしばらくして、

精霊の手掛かりである文献を手にしいなやロイド達『シンフォニア』一行と『ファンタジア』のすが、この船に来航、ギルドに所属する事になった。

それで、肝心の文献は暗号化されてて、解読待ち。ついでで、リタの研究だった『ソウルアルケミー』っていうのが、『光気丹術』と同じかもしれないって事でそれも解析待ち。  
今のところ、赤い煙の情報も来ていない。  
つまるところ、現在暇なのだ。

「……幾らその解析待ちだからって、解析終わった後にこっちが動けなきゃ意味ねえだろ。……ったく、昼からの鍛錬は無しだ。しつかり休みやがれ」

「……はい。……ありがとうございました」

「おうよ。風邪ひかねえ内に船に入れよ」

そう言って軽く手を振って船内に戻っていくユーリ。  
……やっぱり凄いなあ、ユーリって。

「――さあて……どうしょ……」

僕は甲板に倒れたように寝転がったまま、空を見上げて思わずそう

眩いた。

「――…あれ、カノンノ？」

「――あ…衛司」

やることもなくなり暇となったので、船内を歩き回り操舵室に上がると、そこには操舵室の窓から外を眺めているカノンノが居た。

「あれ、衛司…今日は昼から鍛錬じゃなかったの…？」

「いや、休みを貰っちゃって…カノンノはどうしたの…？」

「私は……これだよ」

僕の問いにそう言うと言ったスケッチブックを見せてきたカノ

ンノ。ああ、成る程……。

「また絵、描いてたんだ」

「うん。今日はこういうのなんだけど、どうかな？」

そう言っただけカノンノはスケッチブックを僕に渡してきた。

最近本当に、カノンノは描いた絵を僕やメリアに記憶の手掛かりになるかもしれない、とよく見せてくれる。

メリアの場合は確かに記憶喪失……と、言うかディセンダーの初期状態みたいなものかもしれないから、手掛かりになるかもしれないけど……僕の場合はちゃんと記憶があるので……なんか騙している罪悪感が堪らない。

まあ……それでも、カノンノの描く絵の鮮明さについて目が行ってしまうところはある。

そんな事を考えながらも渡されたスケッチブックのページを捲り出す。うん……やっぱり分からないけど……結構綺麗に描けてるなあ……。

「……衛司は、凄いよね」

ページを捲り見てみると、不意にカノンノからそんな声が聞こえ、顔を上げて思わず首を傾げてしまう。

「……凄いって……僕が……？」

「うん。いつもクラトスさんやセネル達の鍛錬をやって、依頼をこなして、かなりキツイ筈なのに、いつも楽しそうに笑って……凄いなあ、って」

「はは……。僕は別に凄くなんてないよ。クラトス師匠やセネル達の鍛錬も、僕がまだまだ皆より弱いから頑張ってるんだし、依頼も当然の事だし……。全然凄くなんてないさ」

カノンノの言葉に苦笑いしながらそう言葉を返す。事実、僕の実力はきつとまだまだ低い。だから鍛錬するのも当然の事だし、それで依頼をこなすのも至って当然だと思っている。そんな僕の言葉にカノンノは小さく首を横に振る。

「ううん、それでも衛司は凄いよ。それに、衛司は私たちより弱くなんてないよ。私から見たら……。衛司は多分、戦い方次第でユーリと同じ……くらいだと思うよ?」

「そう……。かな……。?」

カノンノの言葉に思わずそう言って頬をかいてしまう。だって、今まで鍛錬でいい感じにボッコされてるのに、他者からそう言われるのは初めてであり、かなり意外だったから。

「そうだよ。だから…衛司は自分に自信を持とう。衛司が思ってるより、きっと衛司自身には強さがあるって、私は思ってるから」

そう、僕を真っ直ぐと見て、少し頬を赤らめながら言葉を出したカノンノ。

自分に自信を持て…か…。

「そう…だね…。うん…ありがとう、カノンノ。なんか…元氣貰っちゃったみたいで」

「ううん。どう致しまして、だよ」

そう言った後、二人して笑い合う。  
そして、僕はスケッチブックをカノンノに渡す。

「……カノンノ」

「……………」

「いつになるか…分からないけどさ……僕、カノンノや皆を守る  
ぐらいに強くなるよ、絶対に」

そう自分の決意を言って小さく笑っておく。カノンノは少し呆然と  
した後、何故か顔を真っ赤にしてあわあわとし始めた。

そんな様子を見ていて少し楽しく思っただけでカノンノの頭を撫でておい  
た。

——この世界にいて、やっぱり不安もあるけど……それでも、この  
世界にきて良かったと思った。



### 第十三話（後書き）

カイル「カイル・デュナミスが命じる……お前は……生きろっ！」

アスベル「俺は……生きるっ!!」

原作でこういうネタフェイスチャットがして欲しかった↑↑

今話、もうグツダグタ↑↑

誰か……ネタくれないかなエ↑↑↑

駄目だよ、話のネタが思い付かないよ↑↑

これが……スランプかつ!!↑↑

次話、頑張れるかな……orz↑

## 第十四話（前書き）

遂に：PV十万突破っ！ユニークは12000突破っ！！そしてお  
気に入り件数160件突破っ！！！！

皆様、本当にありがとうございますっ！！

※今回はシリアス一色：の筈です↑

※もしかしたら修正するかもです↑↑

※それでももしかしたら次話投稿遅れます↑↑↑

## 第十四話

「――…あれ…あれって…?」

――クラトス師匠との朝の鍛錬を終わらせ、甲板からホールに入ると、何やら神妙な面持ちでメリア、アンジュ、メルディ、ハロルド、リタといったメンバーが揃っていた。

「――…どうやら、ある程度の解析が終わったようだな」

「そのとおり。どうやら、光気丹術は憶測通り、ソウルアルケミーの一端だったみたいよ」

隣に居たクラトス師匠の言葉の後、ハロルドが此方に気付いたのか、そう言いながら此方に近付いてきた。

ソウルアルケミー……確かリタが研究してた魔術の曙……だっけ？

「えっと……それで…?」

「一応調べて分かった事は、生物全てに『ドキュメント』があるって事ね」

「…『ドキュメント』……？」

「そね、まあ直接見たほうが早いわね」

知らない単語に思わず首を傾げるとハロルドはそう言ってリタ達の元へと歩いていき、僕とクラトス師匠もそれについて行く。そして少しして、リタがメルデイに手を伸ばすと――

「――……ほう」

「――……これは……！？」

「………輪っか……出た……」

メリアが言ったとおり、突如、奇妙な音と同時に、メルデイの体の周りに数個程の白色の光の輪が現れた。

「――これが、ドキュメント。この場合はメルディの情報、あるいは設計書みたいなものと思って。物質はまず、このドキュメントというエネルギー体ありきな。自分の設計書を持って、皆生まれてくる。これは生命の営みでもあるの」

「……こんな輪にそれ程……すごいな」

リタの説明を聞きながら思わずそんな言葉が漏れた。だって確かに大きいけど、こんな細い輪に人の情報が詰まっているなんて想像もつかない。

「驚くのはまだこれからよ。これをさらに細かく見ると……」

そう言って、リタは何かを呟くと、先程現れた輪の周りにもう一つ大きな白い輪が現れた。

「これは潜在能力とか、病気になりうる要素とか、設計書のさらに細かい所ね。ドキュメントと物質体は互いにフィードバックしあっているの。治療術ってのは、実はここに干渉して傷や疲労を治したりするの」

「いわゆる『呪い』って奴も、実はこのドキュメントに干渉して相手

にダメージを刷り込むわけ」

リタの説明に続け、ハロルドがそう続ける。ドキュメント、かあ……  
本当に凄いな……。

「このソウルアルケミーはドキュメントをいじったり、作り出したりする技術。ミブナの里に伝わる人工精霊もこれの応用よ」

「ドキュメントをいじるって……大丈夫なの？」

「ドキュメントの中の、ヒトをヒトたらしめている設計をいじる事が出来るんだもの。それは…ヒトの存在や形を変えてしまう事も出来るかもしれないわね」

それって色々ヤバいんじゃない？…って…つまりそれって…。

「成る程な。つまり、今起きている生物変化は、この仕組みで起きているかもしれない、という事か」

「現段階じゃ正解って事かしら。じゃあ、ドキュメントを閉じるわね」

クラトス師匠の言葉にリタが頷いてそう言った後、メルデイの周りに出ていたドキュメントはゆっくりと消えていった。

「――うゝ……メルディ、何か、クラクラするよゝ」

「……大丈夫……？」

ドキュメントが消えたと同時にフラつくメルディをメリアが支える。  
それを見たリタは苦い表情を浮かべた。

「ごめん。無理をさせてしまったわね。本来、不可視のものを、今は無理矢理可視状態にしてるから、被験者には負担がかかってしまうのよ」

「細かいドキュメントの展開も危険ね。本当は細かいところまで解析させてもらいたいけど」

そう説明していくリタとハロルド。そうなんだ……それじゃ人工精霊は……？

「それじゃ……人工精霊はどうやって出来てるの……？」

「人工精霊の場合は、人工的にドキュメントを作り出すところから始

まるわ。ドクメントは、精妙な非物質エネルギー。術者の念、自然界の気なんかを掛け合わせてドクメントを作るの。んで、その人工ドクメントエネルギーの振動数を、濃密な状態へ落とすと実体化するってワケ。

あ、ほら。聖者が何もない所から、食べ物や衣類を出して人々に与えたって話とかあるでしょ？ あれは、この技術の為と言われてるわ。マナ、自然界の気、術者の意識を持って非物質状態でドクメントを構成して。そのドクメントの振動数を落としてやると物質になっていくのよ」

ハロルドの長い説明に頭がこんがらがったいく気がした。ただ分かったことと言えば……それってどんだけ凄い事だよ。

「でも……実質そんな事って……」

「まあ、術者の精神力や技量によってまちまちよ。そこまでの力を持つ様な精神力の持ち主は滅多にいないと思うわ。この技術は、そうそう簡単に使えるもんじゃないわね」

「……だよね。そんな事出来る人がいればそれこそ大騒ぎだし……だからこそしいなの人工精霊も暴走したんだろうね」



シリアスな空気の中、不意に『どうせアタシなんか……』とか聞こえた気がした。

「――……リタ、ハロルド……ちょっとお願いがあるんだけど」

ホールに集まっていた面々が解散した後、僕はリタとハロルドについて研究室に入り、二人の前でそう口を開いた。

「――何よ急に改まって……面倒事なら勘弁よ」

「それで、なにになに〜お願いって？新しい薬の実験台になってくれるなら喜んで聞いてあげるけど♪」

リタが面倒そうに、ハロルドが楽しげな笑みを浮かべながらそう言うてきたが、僕は真剣な表情で二人を見る。

僕のお願ひ……それは先程のドクメントの説明を受けて……自分自身に気になった事……。

「僕のドキュメントを……展開して欲しいんだ」

「……アンタ、さっきの話聞いてた？どうせ、アンタの記憶の事についてだろうけど……これは、調べる対象に相当な負担が掛かるのよ？それこそ記憶なんて事になったらどれだけ深く調べるか……——」

「ううん。別にそこまで調べなくていい。ただ……展開してくれればいいんだ」

「……どういうこと……？」

僕の言葉にリタが先程までの面倒そうな表情から一気に表情が変わりそう聞いてくる。

それもそうか……いきなり現記憶喪失設定の僕がそんな事いいだしたらなあ……。

でも………。

「……理由は上手く言えない。だけど……お願い。少しの間でいいから、展開してください」

「……アンタねえ……」

「いいんじゃない？展開してあげれば」

僕の言葉に、どこか怒ったように見えるリタが言いかけた時、ハロルドがそう口を開いた。

「調べられる対象がどうなるか本人も知ってのその言葉だし。それに、衛司の場合はこうなったらだーいぶ諦めないわよ」

「……分かったわよ」

ハロルドのその言葉に、リタは一度深めな溜め息を吐くとそう言っ  
て僕の前に立った。

…良かった…後でハロルドに感謝しとこう。

「……先に言っとくけど、アンタも知っての通り、ドクメントを展開される対象はそれなりに疲労するから、辛くなったり、気分が悪くなったら直ぐに言うこと。分かったわね？」

「うん…。宜しく願います……」

リタの言葉に僕は頷いてそう言った後、ゆっくりと目を閉じる。自分なりの意識集中である。

因みに現在、研究室には僕とハロルドとリタしかいない。もしも僕の考え通りなら……この事実を知るのは出来る限り少数がいいからだ。

そして目を閉じて数秒後、自分の周りに奇妙な音が聞こえた気がした。多分、ドキュメントが展開されたんだろう。そして――

「――…嘘……何よ、これ…」

「――ふうん……成る程ねえ…」

少しして聞こえ始めた、驚いた様子の声と、意味深に調べるような声。

そして、僕はゆっくりと目を開けると……――

「……やっぱり、か…」

僕の周りに展開されたドキュメント。それは先程、メルディに展開された白く、綺麗な輪ではなく――今にも崩れそうに脆く、やや灰色に近い物であった……。



## 第十四話（後書き）

ぐっだぐださ、ああ、ぐっだぐださ↑↑

話がない付かない……くそうorz↑

旦那エ…俺に…力をオ↑↑

今回書いて『これ、シリアスか?』とか自分で悩んでいます↑

ネタが尽きてるからしゃあない☆↑↑

……orz↑↑

はてさて次話、衛司君のドキュメントの意味とはなんなんでしょうね  
?↑↑

出来れば早く投稿出きるよう頑張りたいです;;;

## 第十五話（前書き）

何とか書き上げましたが……駄目だ、自信ねえ……orz↑↑

後半、大分考えが無くなって荒くなって……;;

衛司君も若干衛司君っぽくなかったし……orz↑

自分にシリアスは向かないと改めて分かった今日この頃↑↑

よし、近い話の内、またはっちゃけるか（フラグ無双的なi（ry  
↑↑

※文がかなり荒い

※シリアスではないシリアス↑

## 第十五話

「……それで、さっきのドキュメント……あれはどういう事なの？」

——ドキュメントの展開を止め、そうやや強く言ってくるリタ。その隣でハロルドは興味深そうに僕を見ていた。

……どう説明すればいいかなあ…。

この二人、くさっても『天才』だから、多分曖昧な誤魔化し返答は聞かないだろう。

「……えっと……信じてもらえるか、分からないけど……これから僕が話すのは……僕自身の話だから……」

そう言って、真っ直ぐと二人を見る僕。

元々、この話の始まりを切り出したのは僕自身なんだ。先程のドキュメントの状態も詳しくは分からない今は……ある程度話す必要があるだろう。



僕の言葉に、二人はゆっくりと頷いた。

――

――それから、僕はある程度の事を二人に話した。

僕が別の世界から何らかの方法で来てしまった事。

僕にはちゃんと、記憶がある事。

ただ、僕がこの世界に來た発端である『あの事故』の事と、この世界……『レディアントマイソロジー』の世界樹という一つのシステムの事は話していない。

後者の方は今までの『マイソロ』のストーリー上、きっとこれから分かっていく事だろうから僕が話すべきじゃないだろうし……前者の方は、正直：話す気にはなれないから。

「――この世界とは別の世界から、ね……。：普通なら俄かに信じられないわ」

「……ですよねー」

僕の話聞いて、そう言ってきたリタに思わず苦笑いしてしまう。  
まあ、まだマシなりアクションだね。いきなり『実は僕、この世界とは別の世界から来ました』なんて言ったら普通は痛い目で見られるかドン引かれるもん。

「……でもさっきのドキュメントを見る限り…その普通じゃないって事は分かったわ」

「……と、言いますと？」

「少し前に言ったとおり、ドキュメントはそのものの『情報』や『設計書』みたいなもんよ」

「つまり、アンタのドキュメントからは、この『ルミナシアの世界で生まれた』、っていう情報の入ったドキュメントが全く見えないって事よ。それから考えれば、アンタが『別の世界』から来たっていう話には納得出来るわ」

「そっか……良かったあ、信じてもらえて…」

リタとハロルドの説明を聞いて、僕はそう言って一安心する。一応、

信じてはもらえたようだ。

「……ただ、色々とも問題も見つかったのよね」

「……問題……？」

「アンタのドクメントの状態よ。正直、ドクメントの状態が悪すぎるのよ。さっき見たように：アンタのドクメントはボロボロで、情報を見る事も、調べる事も出来ないの。下手に調べたりしたら、それこそドクメントに余計な損傷を増やして、アンタの身体に何か起こし掛けないからね」

そう言って、少し俯くりタ。確かに、僕のドクメントの状態は酷かった。メルディのような形は保ってなくて、今にも壊れそうな感じだったからなあ…。

何故あんな感じになったのかは……多分……。

「何でああいう状態になったのかの詳しい理由は正直私達も分からないわ。考えうる例を上げるとすれば、このルミナシアに来た際の影響が原因、とか、このルミナシアの特殊な何かがアンタのドクメントに干渉しているか、とか：例を上げだしたらきりが無いわ。少なくとも、これからしばらくは研究室に来て、私やリタに体の状態を教えること。分かったわね？」

「うん……分かった。ありがとうね、色々……。出来ればこの事は他の皆には……教えないでいてね」

ハロルドの説明を聞いた後、小さく頷くと僕はそう言って礼をした後、研究室を出ようとした。

「――アンタ……いつまで皆に隠すつもり……？」

ハロルドのその言葉に、足が止まる。扉の方を見ているため、表情は分からないけど……その声からはいつもの楽しげな様子は感じられなかった。

「……多分、ハロルド達の説明を聞いても、信じてくれる人はあんまり居ないだろうしね。……もうしばらくは……隠すつもりだよ」

「もうしばらく、ねえ……。……アンタにはその『もうしばらく』は決まってるの……？」

「……どうだろう、ね……」

ハロルドの意味深なその言葉に、僕はそう応えて、研究室を後にした。

「――『もうしばらく』、か…ハロルドには若干気付かれてるのかなー？」

――甲板に上がり、僕は海を眺めながら先程のやり取りを思い出してそう、呟いた。

ハロルドは…多分僕が、この世界の成り立ちを少し知ってる事に、薄々感ずいているんだろう。

僕の説明って若干ボロ出てたんだろうか…？でも、まあ…実質僕はこの『レディアントマイソロジ―3』の世界の事に関しては正直全く分からないので、気付かれても答えにくいんだが…。

ただ、一番僕が気になってるのは――

「『状態が不安定なドキュメント』、かあ……」

自分のドキュメント。あまりにも不安定で、今にも壊れそうに見えた

ソレ。元々当初、僕自身は僕という存在に、ドキュメントがあるのか無いのか。はたまたどういう形なのか。それが気になってハロルド達にドキュメントの展開を頼んだのが……今回の状態は流石に予想外だった。

ハロルドはその状態の理由は例を上げれば様々ある、って言うていたが……。

「……多分……もしかしたら……っ!!」

一瞬、自分がこの世界に来た理由である『あの事故』を鮮明に思い出し、急に来た吐き気に思わず口元を抑える。

ドキュメント。それはものの『情報』や『設計書』、つまりは『生』に関係している。

それが崩れそうな形を保っているという事は……少なからず、僕の『生』が関係しているんだろう。

そしてそれを不器用なりに深く考え、考え、考え尽くした結果、行き着く答えは――

『現実の世界の僕は、僕という存在はあの事故で――』

「っ!!……止めよう……考えるのは……似合わないし」

行き着いた自分なりの『答え』を否定するように首を振ってそう呟いた。元々、この世界に來た時点で、現実の世界に歸れるかどうか、っていう思考は半分諦めてたし…。

「……よし、止めた。頭痛いし、ロックスやユーリの作ったお菓子食べて、寝よつと」

再び考える思考を止めて、ぐっと両手を空へと伸ばして呟くと、僕は食堂へと向かう事にした。

——現実の世界で、僕が…僕という存在がどうなっているかは分からない。

だけど……今、僕は此処で生きているんだ。

そう、僕は自分に言い聞かせ続けるのだった。

## 第十五話（後書き）

ぐっだぐだだZE☆↑↑

いや、あれですね…自分にシリアスは全く似合わないと分かりました↑↑

なんだか今話はテイルズらしからぬテイストに……ああ、いつものことか↑

書いてて無性にはっちゃけたくなってきた↑

次話……どうなるだろ……↑

出来る限り頑張って原作扱いで更新したいです；



## 第十六話（前書き）

意外と早く書けたので投稿＋

まあ、原作をほぼまんま移したようなもんだけどネ☆↑↑

……orz↑↑

後、何となく書いときますが、私はラザリスは大好……ゲフンゲフン、愛してます（↑）が、『暁の従者』は大っ嫌いです↑↑↑

※文？荒いよ？↑↑

※原作まんま↑↑

## 第十六話

「…………ルバーブ連山に…?」

「…………ん…………」

——食堂にて、僕の聞き返すような答えに、メリアは小さく頷いた。

何がどういう事か、というと……どうやら、あの『願いを叶える存在』がルバーブ連山に居る、という話が入ったらしい。

それで、これ以上一般人をソレに接触させるのは危険、と判断したアンジュが、その『願いを叶える存在』がいるルバーブ連山に数人程派遣したいらしいのだ。

それで、メリアがそのメンバーの一人にしたい、と現在、ロックスさんに料理を教わっていた僕を誘いに來たのだ。

『願いを叶える存在』が、かぁ…………どうしよう。

「——行ってきてはどうです？メリア様もその方がいいようすし」

「え……、いいの、ロックスさん？」

「ええ。この料理は後は味付けぐらいですし……帰ってきた時に教えてあげますよ」

「うん、…ありがとう」

ロックスさんのその言葉に、ちよつと嬉しくなってそう礼をする。  
ロックスさんに料理を教わるのは結構楽しみなからでいいんだよねあ。

でも、何故か教えてもらえる料理は油物とか結構カロリー高めな物が多かったりする。

「……衛司……行く…？」

「うん、僕も気になるからね。僕もついて行くよ」

「……ん……」

小さく首を傾げながら聞いてきたメリアにそう応えようと、メリアはどこか嬉しげに頷いて僕の袖を引っ張り歩き出した。

最近、やけになんというか…メリアのスキンシップがこういう感じに強くなってきてる気がするんだけど……どうしたんだろ……？

それにしても……『願いを叶える存在』か…本当、一体何なんだろうか。

兎に角……行ってみれば分かること、かな。

「――……はあ…相変わらず、ルバーブ連山って、登りは本当にキツいなあ」

「んー？　そうかー？　俺はまだまだ元気だぜ！」

――ルバーブ連山の山頂ルートを登っている中、ふとこぼしてしまった言葉に、隣を平然とした表情で歩くティトレイが笑いながらそう言ってきた。

ルバーブ連山に派遣されたメンバーは僕、メリア、ティトレイ、メルディの四人であった。

それで、当初は、今まで扉があった山頂ルートの手前までかなー、と考えていたら案の定、山頂ルートへの扉が解放されており、もしかしたら既に『願いを叶える存在』を求めて人が入ったかもしれない、との事から山頂まで向かう事になった。

流石に山道でしかも山頂までのルートなので、会話を繋げながら僕は山道を登っていた。

例えば：『一番効率のいい練習方法』とか、『異性に作られて喜ぶ料理』とか、『ティトレイ、シスロリコン疑惑』だとか。詳しい詳細は載せないでおこう。

けどやっぱり山道は山道。キツいもんはキツいのである。まあ…クラトス師匠の鍛錬に比べればまだマシだが。

——それにしても……

「……さっきので何人目だっけ？」

「……六人目……」

「まったく。大層な野郎共だぜ、全く」

先程までこの山道を登る最中、無謀とも言える装備で山道を登っていた人達を思い出しメリアがその人数を言うのと、ティトレイは呆れたような、どこか怒っている様子で呟いた。

登っていた皆が皆、『願いを叶える存在』に会うためにこの山道を登っているのだ。

「ティトレイ、何か怒ってるか？」

「ああ、大して努力もせずに、夢を叶えようってヤロウを見るとムカムカするんだよ。正直、さっきまで会ってた奴ら、一発ずつ殴らせろって思ったくらいだ。ああいうヤロウ共は、何でもしてもらって当然って思ってたやがる。だから、他人の大事なものを平気で踏みにじって、奪い取れるんだよ」

メルデイの問いに、そう、見ていてイライラしているのが分かるように、言葉を出すティトレイ。

確かに……先程まで会っていた一般人は『億万長者になりたい』等々、自分の欲を丸出しにしていた者達ばかりだった。

「……でも……確かに、後者や、大した努力もせずに夢を叶えようって言うのは気に入らないけど……もし本当に願いが叶うのならって思うと……僕もさっきまでの人達を否定はできないかもしれない」

「……どういう事だ？」

僕のふと出した言葉に、ティトレイが少し怒った様子でそう聞いてきた。

「うん……さっきも言ったけど、確かに他者から奪い取る事や、大

した努力もしない人の事は否定するよ。……でも、逆にさ……頑張  
って努力しても上手くいかない人や、奪い取られた側の人は、こう  
いう話が来ると多分、……うん、きつと望んじゃうよ。『こんな不  
運な自分に幸運を』って、感じにさ……」

そう、言わばそれは一種の麻薬だ。効力だけ聞いて、副作用を聞か  
ずに服用した人間と同じ、一度入れば抜け出せず、それは服用する  
人間が今まで不運である程、効力は高くなる。  
そして今と同じように……噂となり、広まり、服用する人間が多くな  
って来るだろう。

だからこそ……。

「……だからこそ、此処で何なのかを見極めて、今流れているこ  
の現状を少しでも止めないといけないんだ」

「……ああ、そうだな」

僕の言葉に、ティトレイの他、メルディとメリアも頷いて、再び山  
頂に向け歩き出した。

そう、他の何よりも早く、『願いを叶える存在』を止めるために――  
！。

「――…ッ…霧が…」

しばらく山頂ルートを登っていると、徐々に霧が濃くなっていき、  
広い場所についたと思えば霧が更に濃くなってきた。  
山頂…じゃ、ないみたいだけど…。

「――…おい、ありゃ何だ？」

不意に、ティトレイから出た言葉に、その視線の先を見ると、前方  
の濃い霧の中に、赤い何かを周りに纏った人影らしきものが見えた。

「バイバ、光ってるよ！」

「あれは……一体……」

思わず目の前にそんな言葉が見えた。霧が濃いためよくは分  
らないけど…多分、あの『願いを叶える存在』だろう。  
……って事は、赤い煙が此処まで変化したって事…？



そう考えていると、突然それは歩き出し、此方に近寄ってきた。どうやら……メリアに歩み寄ってきたみたいだ。

「……………」

「多分……大丈夫、だよ。メリア」

不安になったのか袖を握ってきたメリアに、目前に近寄ってきた赤い人影を見てそう言う。

攻撃してこないって事は……、危害を加える気はない……のかな？

そして、メリアが少し警戒しながら、ゆっくりと赤い人影に歩み寄ろうとした時であった――。

『いたぞ!! ディセンダー様だ!!』

突如、後ろから聞こえた大声に全員が振り向くと、何か変わった服装をした二人組が現れた。

ディセンダー……様……だって？

思わずメリアを自分の後ろに隠すように下がらせる。

「願いを叶え、全ての者を導き給うお方。ディセンダー様! やはり、降臨されていたか!」

興奮したように大声でそう言う一人。まさかあの人達が言ってるデ  
イセNDER様って……この赤い人影っ!?

それにデイセNDER様って口振りからすると……この人達、例の『暁  
の従者』か!?

「我々の救世主をお運びするぞ!」

「ちょっと待てよ! コイツがデイセNDERだって確証はあるのか?  
うかつに接触しない方がいいぜ!」

「何だ、お前達は。邪魔をするな!」

「その方こそが、貧しき者を救いに導き、私欲に肥え膨れ、墮落し  
た大国の者共を成敗する為に降臨したデイセNDER様だ!」

ティトレイの言葉に、強い言葉でそう言い出す暁の従者の人達。こ  
の喋り方からすると……相当、酔ってるみたいだな……。

しかもタイミングが最悪だ……こんなに崇拜に酔ってる団体が……偽物  
とは言えデイセNDERって言える存在を見つけたとなると……ヤバ  
いなあ。

「ちょっと待って下さい! アレが本当にデイセNDERっていう確証  
が無い今、アレを下に下ろすのは危険ですっ!! 今、もしかしたら

アレは、この世界の生物全てに害を成す危険な存在かもしれないんですっ!!」

「貴様アっ！ディセンドー様を侮辱するか!!」

「違いますっ！まずは落ち着いて、こちらの話を聞いてくださいっ!!」

「黙れっ！さては貴様等、ディセンドー様を私欲の為に独占する気だな。ならば、これでも食らえ!!」

僕の言葉に、暁の従者がそう言葉を出したと同時に、只でさえ霧が濃い場所に、光が広がった。くそっ……閃光弾かっ!?

「――あああああっ!! 光ってる奴がいねえ!」

ティトレイのその声に目を開くと、その場には先程までの赤い人影や、暁の従者の姿はなかった。

「イナイよー。連れてかれたな!」

「急いで戻って報告だ！アレが人の手に渡ったんだ。えらい事にな

るぜ……」

ティトレイの言うとおりだ。……しかもあの赤い人影が、ディセンダーを崇拜する暁の従者に渡った以上……状況は最悪な方に転がり出しただろう。

そして、この事をアンジュに報告して数日後、それは案の定、最悪な事態へと転がっていた。

## 第十六話（後書き）

ぐっだぐだd（ry↑

……誰か、自分を救ってくれ↑↑

如何せん、最近シリアスを書きすぎたせいで、はっちゃけられない↑↑

if 閑話でも作ってふざけようかな、うん↑↑

次話は……どうなるんだろ↑↑  
出来る限り早く更新したいです；

## if 閑話―メリアのヤン☆でれ日記―（前書き）

やっちまったよ……マジで↑↑

if 閑話についてですが、if 閑話はあくまで『if』、『もしもこうだったら』っていう閑話なので、本編とは一切喝采関係ありません。

なので、本編にまだ登場していないキャラの名前もあがりますし、キャラ崩壊も普通ですので御了承下さい。

※今回は大幅な大キャラ崩壊です↑

※メリアの印象を壊したくない方は今話は見ない方をオススメします。

※再注意です。メリアの印象がこの話では大崩壊していますので、メリアのキャラクターを壊したくない方は見ない方をオススメします。

※この閑話はフィクションです。本編とはなんら関わりがないはず  
です。……きつと↑↑



if 閑話―メリアのヤン☆でれ日記―

○月 ○日 天候 晴れ

カノンノに、『につき』を書いてみれば、と進められて、書くことにした。

につき……その日にあった事とか…思った事を書くといいらしい…。

○月 ×日 天候 晴れ

衛司達と一緒にロックスから料理を教わった。

楽しい。



○月 △日 天候 晴れ

衛司と一緒に魔物の討伐依頼にいった。

魔物を倒すと衛司が誉めてくれた。

嬉しい。

思わず、魔物を4……どれくらいだっけ……？嬉し過ぎて覚えてない。

□月 ■日 天候 雨

今日は天気があんまりよくなかったので、船の中で過ごした。

衛司が『あやとり』っていうのを教えてくれた。

『はし』って難しい……後で衛司に教えてもらおう。

□月 ×日 天候 晴れ

今日の依頼はなんか：偉い人の護衛だった。

意外と簡単に早く終わったけど、衛司が『凄いね』って言って頭を撫でてくれた。

凄く嬉しい。

後十年は戦えると思った。

△月 ●日 天候 曇り

衛司がカノンノと何か話してた。

衛司もカノンノも楽しそうだった。

……でも私は楽しくない。

……なんでだろ？

△月 ■日 天候 曇り

今度は衛司がロッタと楽しそうに話してた。

……つまらない。

……つまらない つまらない つまらない つまらない つまらない  
ない……。

△月 ◎日 天候 雨

今度はシャーリィと楽しそうに話してた。  
……つまらない。

でも、今日は二回私の頭を撫でてくれた。  
凄く嬉しい。

---

×月 ○日 天候 晴れ

衛司は今日はクラトス達と鍛錬らしい。  
しょうがないなあ、と思ったけど、何か胸がちくちくした。

この前までの事をロックスに聞いてみるとなんでも『しっと』って  
言うのらしい。  
でも、ロックスに深く聞いてみるとそれ程悪いことでもないらしい。  
……なら、いっぱい……『しっと』しても構わないんだ…。

---

×月 ●日 天候 晴れ

今日は衛司がカノンノの頭を撫でてた。カノンノ、嬉しそうだった……。

『しつと』しそうになった……けど気にしなかった。

——だってずっとずっと見てたけど、衛司は頭を撫でる時はカノンノにする時よりも私にする時の方がずっと優しく撫でてくれるし、私を撫でてくれる時の方が楽しそうだもん。うん、そう。きっとそうだもん。だから気になんかならないもん。

●月 ●日 天候 晴レ

今日は衛司はカノンノと朝から依頼に行ってて中々帰ってこなかった。

つまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらない……。

つまらなすぎたから、衛司が帰って来た時に思いっきり飛び付いた。驚いてた。反応が楽しい。

楽しくて、楽しくて、楽しすぎたから別に――衛司からカノンの匂いがしたコトなんてキニシテナイヨ？

●月 ▲日 天候 雨

衛司が中々起きなかったので、起こしてあげるのに衛司が寝てる布団の中に潜り込んでみた。

起きた時の反応がこれまたよし。またやろうと思う。

衛司の寝顔、凄く綺麗で、格好良くて、可愛くて、愛しくて、ついつい、×しっちゃんおっかなって思った。

●月 ■日 天候 曇り



■月 ■日 天候 ハレ

今日は衛司と一緒に居てくれた。嬉しい。

最近は全然一緒に居れないけど、やっぱり一緒に居てくれる時は嬉しい。

……どうにかしてずっと……ずっとずっとずっとずっとずっとずっと一緒に居られる方法はないだろうか？

——あ、そうだ……。

『きせーじじつ』をつくればイインダ。

ちよっと前にジェイドが言ってた。

『きせーじじつ』を作ればこっちのものだって。

そうすれば衛司とずっとずっとずっとずっとずっと一緒に居られるだろうし、衛司は私の……私だけの人になってくれる。

楽しみ……すごくスゴく凄く楽しみ。

そうと決まれば今日早速しよう。

だって早くしないと他の人に衛司がトラレちゃう。

カノンノよりも、ロッタよりも、誰よりも早く……衛司は私の、私だけなんだもん。



だから、待っててネ？ エイジ……？

**if 閑話―メリアのヤン☆でれ日記―（後書き）**

――……と、まあ、どんな感じでしたか、今回の閑話？↑

ヤンデレ……だったんだろうか？↑

凄く、不安です↑↑

まあ、確実に今話でドン引かれたろうな、自分……↑↑

後、これはあくまで『if』なので、本編とは一切関係ないので、メリアはヤンデレないのでご安心下さい↑↑

今回、好評だったら他のif 閑話もやってみよっかなー……↑↑↑↑

## 第十七話（前書き）

ヒヤッハーツ！文が思い付かないぜえっ！！↑↑

今回はいつも以上に文が荒い↑↑

これはアレか、俺自身が暁の従者嫌いだからか、はたまた前のif  
閑話のメリアの人気度に自分にプレッシャーを感じたのか……↑↑↑↑

またヤンデレメリアが見たいのか、アンタ達はっ！！（CV…セネ  
r（r y↑↑↑↑

※文がひたすら荒い↑↑

※相変わらず戦闘前切り↑↑

※衛司君のキャラが最近分からなくなってk（r y↑↑↑

## 第十七話

——あのルバーブ連山の出来事から数日、事態は大きく進展していた。

まず一つ。リタの研究で、以前から生物変化をしていたコクヨウ玉虫のドクメントが侵食されている事が分かった。

それで分かった事は、赤い煙はこの世界には存在しない『異質なドクメント』という事であった。

しかも自分も相手も、ドクメントを自在に変化させてしまう。それはまるで、『願いを叶える』事によって相手の想いに触れ、ドクメントを覗き見、学び、進化しているようにも見えるらしい。

そして、もう一つ。それは……。

「——国の方でそんな事が……」

「——ええ、相当、大変みたいよ」

アンジュから聞いた話に僕がそう呟くと、アンジュはそれに溜め息して応えた。

つい先程このアドリビトムに来た、『ジアビス』で有名なジェイド、ティア、ナタリアの国、『ライマ国』で、『暁の従者』の導引による、暴動が起こったらしいのだ。

聞けば、暁の従者の信者は皆、人を超えた異様な力を持っていたらしく、国民はそれによって信者に煽られ、城を攻めたらしい。異様な力……多分、あの赤い人影から受け取ったんだろう。

『——貴様等、ディセンドー様を私欲に使い、独占する気だな！？——』

不意に脳裏をよぎった、ルバーブ連山で暁の従者に言われた言葉。思い出して舌打ちする。

くそっ……独占して私欲に溺れてるのは…アンタ達の方じゃないかっ！！

「——それで、ジェイドから話を聞いて暁の従者の拠点が分かったわ。それで今、その場所に向かうのにメンバーを決めてるんだけど……衛司はどうする？」

僕が小さく俯いていると、アンジュがそう言葉を出した。

暁の従者の拠点……多分、あの赤い人影の正体が今度こそ分かるんだろう。

だけど……僕はそれ以前に……。

「——うん、それじゃあ、僕も行くよ。『暁の従者』に……面と向

かって、はつきり…言いたい事があるから」

僕の返答に、アンジュは一言、『分かった』と言うと他のメンバーを探しに歩き出した。

そう、僕はただはつきりと、あの暁の従者に言わなきゃいけない…  
…『国の為を思ってディセンドーの力を借りて、国を救おう』と言う言葉の『矛盾』を言ってやる為に…。

――『アルマナック遺跡』。過去にディセンドーを祀っていた遺跡らしく、暁の従者は此処を拠点にしているらしい。

結局、メンバーは僕、メリア、アンジュ、ジェイドとなった。

それにしても……。

「……………なあんか……………イライラする」

思わず、溜め息を出すと同時にそんな言葉が漏れた。

つい先程、このアルマナック遺跡に入って暁の従者の会話を立ち聞きたけど……『手から金を出した』、『裏切り者に罰を与えて下さいと願った』、『司祭クラスの許可がないと会えない』……どうもこいつもふざけてるんじゃないだろうか…？

「――……衛司…大…丈夫……？」

ふと、そんな声の後、服の袖を引っ張られる感覚に見ると、メリアが心配そうに此方を見ていた。

…いけない、また顔に出ちゃってたかな…。

「……うん、僕なら大丈夫だよ。……ありがとう、メリア」

「……ん……」

心配そうな表情をするメリアの頭を撫でてそう言うしておく。メリアもそれで分かったのか小さく頷いた後、心地良さそうに頭を撫でられていた。

と、言うか……メリアって本当、頭を撫でられるの好きだな。

「――はいはい、そこのお二方。いちゃついても構いません

が、先に進みますよー」

「ブッ!？」

此方をかなり悪そうな笑みを浮かべたジェイドが出したそんな言葉に思わず吹き出す。

「あのですね、ジェイドさん……僕は別にメリアとはそうそう関係じゃ……」

「おや、違いましたか？こんな場所でやけに仲良く頭を撫でていたのでもう思ってたんですが……いやいや、若いとはいいいですねー」

「――だから違うんですってっ!!」

いらぬ誤解を生み出しているジェイドに、それを否定する僕。クスクスとジェイドの隣で笑うアンジュに、否定している僕をどこか不機嫌そうに見ているメリア。

はっきり言おう……なんだ、このカオス。

そんな感じで…僕はアルマナック遺跡を奥へと歩き続けた。



『——おい、これ見てくれよっ!!』

「——…今のは……?」

「——…どうやら、奥からのようですね…」

暫く歩いていると、広いエリアにつき、不意に奥から聞こえた声に  
そう言うと、警戒しながら奥を覗き込む。すると目に入ったのは…  
…二人の暁の従者が居て、片方が大きな岩を浮かしている姿であっ  
た。

「……あれは……」

「恐らく、『ディセンドー様』とやらの力でしょう。我々の国で暁  
の従者が使っていた異様な力と似てますし」

「そうみたいね……とりあえず、あの人達からその『ディセンドー  
様』の事を聞きましょうか」

そうアンジュが言った僕達は頷くと、暁の従者の二人に歩み寄っていった。

暁の従者もそれで僕達に気付き此方を振り向く。

「んっ、何だお前達は？我々の同志になりに来たのか？」

「いいえ、そうではないの」

「じゃあ、何の目的で来たんだ？」

「あなた方がディセンダーと呼んでいるものを引き渡してもらいます」

ジェイドのその一言で、暁の従者の目が変わり、此方を警戒するようになり睨み付けてきた。

「あれは、ディセンダーなんかじゃないの。もっと得体の知れない何かよ」

「そう、危険な存在かもしれませんよ」

「危険な存在だと？ バカな事を…今は誕生されたばかりで、予言通り名前以外何も記憶はない。だが、今この奥でこの世の事を学んでおられるのだ。それが終わるまで、誰もこの先へは通すわけにはいかないのだ!!」

「この腐敗した世の中を正す為に降臨されたデイセNDER様だ。じきに、自ら立ち上がられ、この世界を理想郷へと造り変えられる。邪魔はさせないぞ!!」

ジェイドとアンジュの言葉に、暁の従者は鼻で笑い、そう言って戦闘体勢に入る。

思わずアンジュは苦い表情に、ジェイドは『やれやれ』と言わんばかりの溜め息を出した。

ただ、僕は……何故か本気で……この人達に怒りを覚えていた。『予言通り名前以外何も記憶のない』存在を…言わばこの人達は『兵器』として利用しているんだ。

だから……………。

「——もう、いい」

自分でも正直驚く位低いそんな声が、自分から出た。

その声にジェイド以外の皆が何か、と此方を見る。ジェイドはジェイドで意味深に此方を見てるけど。

「――アンタ達のそのくだらない理想も、言葉も聞くのはもううんざりだ……アンタ達は……今、此处でその矛盾した現実ごと潰してやる」

「貴様……我々の理想がくだらない……だとっ!？」

僕の言葉に、暁の従者が敵意を増してそう言ってくる。

ディセンダーの事を知ってんのにまだ……分からないのかよ……。

「……ああ、くだらないよ。はっきり言ってやる……今のアンタ達は……帝国や星晶を独占する国よりよっぽど屑だよ」

「貴様……一体何を――」

「――分からないなら教えてあげるよ。僕が……力づくで、全力で……!!」

――僕のその言葉を同時に、戦闘は始まった――

## 第十七話（後書き）

見ろよ、ぐっただだぜ↑↑

いや、うん、あれだよ………if 閑話からのメリアの人気っぷりにプレッシャー負けしたんよ↑↑

ヤンデレメリア……謎の好評に作者ビツクリです↑↑

そして衛司君、ついにプツンいきました↑↑↑

おとなしい人ほど、怒らせたら怖い……果たして自分に上手く書けるのか……↑↑

次話は暁の従者戦&皆様お待ちかね、ラザリス登場です↑↑  
まあ、会話絡みはあんまり無いだろうけど……ね……↑↑

ではではまた次回……早く更新出来るよう頑張ります↑↑

## 第十八話（前書き）

やっと書き終わった…;

本当ならもっと早く投稿出来たのに…戦闘描写やらラザリス登場やらで今までで一番長くなった…;

しかも切りが中途半端という…泣くわあ↑↑

※戦闘描写、荒いよ↑↑

※ラザリスとの会話がヌエツ!!↑↑

※衛司のキャラが本当に分からなくなってきt（r y↑↑

## 第十八話

「――我々の力を見るがいいっ!!」

「――ディセンダー様を侮辱した罪は重いぞっ!!」

「チツ……一々、五月蠅いっ!!」

――アンジュとジェイドの術の詠唱を暁の従者の二人組の攻撃からメリアと一緒に守りながら、暁の従者の言葉に思わずそう呟いてしまう。

この二人組……元は一般人だけど、『願いを叶える存在』の力もあってか、攻撃の一撃一撃が重い。メリアも僕ほどではないけど、苦戦するような表情をしている。

「くそっ……覇・道・滅・封ッ!!」

二人組の攻撃から一旦下がると、片方に向け、アスベル程大きめではないけど灼熱波を飛ばす。

――だが、

「ははっ……なんだその攻撃はっ!!」

当たる直前、狙ったのは別の片方が『バリアー』を唱え、弾かれる。くそっ……相手は今までの魔物と違って生身の人間だから、力を出し過ぎても駄目なのに……抑えたら先程のように『バリアー』で防がれる。

チッ…本当に面倒くさいっ!!

「二人共、下がってっ!!」

不意に後ろからかったアンジュの声に、僕とメリアは後ろへと下がる。それと同時に、ジェイドとアンジュが詠唱を終え、術を発現する。

「食らいなさい……スプラッシュッ!!」

「これでどうかしら…レイッ!!」

ジェイドとアンジュの声が響くと同時に、暁の従者の二人の頭上から滝のような水流と複数の光線が降り注ぐ。

……と、いうか……二人共手加減してくない……?



見ていてそう思ってしまう程の術の勢いであったが……暁の従者の二人は多少の傷は見えたがいまだ健在していた。

「はははっ……今度はこちらから行くぞ。吹き飛ばっ!!」

「ッ……皆、散って!!」

僕の声と同時に皆がその場を退くと、僕達が居た場所の石が浮き上がり、そして急降下して潰れる。あれは……『トラクタービーム』か……。

「——どこを見ているっ!!」

「——ッ!しまっ……くうっ!!」

「……衛司……っ!!」

トラクタービームを認識した直後、僕が退いた位置に先行していた暁の従者が迎え撃ち、それに対応しきれず一撃貫い、あまりの重い攻撃で吹き飛ばされる。

それに気付いたメリアが途中で支えてくれ、なんとか壁に直撃する

事は避けた。

「……衛司……大丈夫……？」

「……っ……うん、なんとか。……ありがとうね、メリア……」

メリアにそう応えながら体勢を立て直し、再び暁の従者の方を向く。  
くそっ……結構キツいな……。

「やれやれ……これは最早、異様というよりも『異常』ですね……」

「これこそディセンダー様より頂いた力だっ……!!」

「我々はこの力で、ディセンダー様をお助けするのだっ……!!」

ジェイドの呟きに、暁の従者達は自分達の力を自慢げにそう言う。  
この人達……まだ分からないのかよっ……!!

「――…黙れよ」

僕の口から出たその言葉に、暁の従者が此方を見ると、僕は再度、手にした木刀を構える。

「――ねえ、なんで分からないんだよ…。確かに、アンタ達の言いたい事は分かる…。でも、今のアンタ達のやり方じゃ、帝国や星晶を独占する国と変わらないって…。どうして気付かないんだよっ！」

「我々と腐敗した国は違うっ！！我々は、ディセクター様のお力を使い、恵まれぬ民を救っているのだっ！！」

僕の言葉に直ぐ様否定するようにそうやってきた暁の従者。この人達は…完全に『願いを叶える存在』に目を奪われて、周りを見失ってるんだろう…。  
なら……。

「そう……。なら……。僕はアンタ達のやり方を……。全力で否定してやるっ！！」

僕がそう、強く宣言したと同時に、僕の周りに様々な色の円が姿を表した。前に見たことがある…。そう、オーバーリミッツ限界突破だ。

そして、オーバリーミッツが出たのを確認すると、僕は先程よりも強く走り出す。オーバリーミッツをしている為、先程とは違うスピードに、暁の従者も反応が遅れる。

「――は…アアアアアッ!!」

「ッ…貴様…一体何をっ!?!」

僕は暁の従者の近くまで接近すると、手にしていた木刀を地面へと突き刺し、集中する。

突然の僕の行動に、暁の従者は勿論、後ろで僕の様子を見ているメリア達も表情が変わるのを感じる。

だけど、今はただ意識を集中させる。

以前、クラトス師匠とユーリが言っていた。『技はイメージだ』と。その言葉を思い出しながら、集中し、イメージを高める。

すると同時に、僕の周りに巨大な陣が浮かび上がり、それは暁の従者の地面まで伸び、メリア達の地面の前で止まる。

「なッ…これは…一体っ!?!」

「――ハア…これで…どうだあっ!?!」

陣が浮かび上がると、今度は地面から突き出る氷をイメージする。そしてイメージを完成させ、強く、そして対象である暁の従者の二人に向け、発現させるっ！！

「―これが…僕なりの…大技だあっ！！『守護ッ！大・氷・槍・陣』ッ！！」

そう宣言した瞬間、浮かび上がっていた陣から複数の大きな氷槍が出現し、陣内の暁の従者の二人を貫き、ダメージを与えていく。

――『守護大氷槍陣』――

僕が守護方陣の使えるクラトス師匠やユーリ、氷を扱うヴェイグにアドバイスを教わりながら考えた僕なりの大技だ。言うなれば『守護氷槍陣』の強化版。守護氷槍陣と違うのは陣の範囲が広がり、地面から現れる氷槍の大きさだ。

威力は見ての通り。先程までダメージを一切気にしなかった暁の従者が完全に息を乱している。それでも一応、まだ抑えめな方なのだ。

ただ、これの難点は……。

「――…ハア……ハア……ハア…」

ゆっくりと木刀を下ろしながら呼吸を整えていく。難点……それは……僕はオーバリーミッツやこういう大技を使った後の体力消費が半端ない。正直今、立ってるのがやっとだ。

「……衛司……」

「ハア……大丈夫、だよ……メリア……。メリア……ジェイドさん……アンジュ……ちょっと、待ってて下さい……」

僕を心配そうに見るメリアに呼吸を整えながらそう言った後、三人にそういうと、傷付きながらもいまだに敵意を剥き出しにしている暁の従者に向き直る。

「くっ……やるな。だが、まだ屈しはせんぞ。一部の者ばかりが益を得る腐った世の仕組み。必ずやディセNDER様が打ち砕く」

「搾取のない、平等で平和な世界を望んでいる者達の声の為に……ディセNDER様を、お前たちに渡すわけには行かない!!」

「――さっきから聞いてたら、『ディセNDER様』『ディセNDER――」

様』、アンタ等は何様だよっ!!」

「「「っ!?!」」」

自分でも初めて出すくらいの大声で出した言葉に、その場の全員が驚く。

だけど、そんなの今は関係ない。

「……確かアンタ等は言ったよね……? 『予言通り、名前以外の記憶が何もない』 って……?」

「あ、ああ、……そのとおりだ。だからこそディセクター様は——」

「じゃあアンタ等はっ! 言い換えれば、生まれたばかりで何も知らない子供を、兵器として扱ってるんじゃないのかよっ!?!?」

僕の言葉に、今気付いたような表情を浮かべる暁の従者。やっぱり、か……。

「わ、我々は、ディセクター様を兵器として扱ってなど——」

「例えばアンタ等が、そのディセンダーを兵器として扱ってなくても、アンタ等がそうやって、ディセンダーからもらった力を傍若無人に振り回してれば、周りの皆は、国は、ディセンダーを兵器として見てしまう……見ちまうんだよっ!!」

僕の言葉について押し黙る暁の従者。だけど、まだ言い終わるつもりはない。

「それに『星晶を独占する国から星晶を奪い返して平和を取り戻す』？奪い返してどうなるの？それで本当に来るのは平和？違うだろ！？奪って、それをまた奪おうと戦いが起こって、それをまた奪おうと戦いが起こる。結局待ってるのは平和なんかじゃなくて戦争だろっ!!」

「それをアンタ等自身は『裏切り者に罰を与えるように頼んだ』？、『ディセンダーに会えるのは司祭クラス』？、アンタ等はふざけてんのか！？そんなくだらない事内部で作ってて本当に平和なんて勝ち取れんのかよっ!？」

僕の言葉に徐々に俯いていく暁の従者。僕はそれに向け、下ろしていた木刀をゆっくりと突き付ける。

「これでまだ分からないならもう一回言っただけ。アンタ等がやってる事は…何も知らない子供を兵器として扱った挙げ句、戦争を起こそうとしている……帝国や星晶を独占する国よりも、よっぽど屑



なんだよっ!!」

何も言えなくなった暁の従者に、僕はイラついた感情をのせて、今声の出る限りそう言ってやる。

「――わ、我々は……っ!？」

しばらくして、暁の従者が何か言葉を出そうとした時、それは起こった。暁の従者の身体に、『赤い煙』が現れたのだ。

「こ、これは……っ!？」

「身体が…、身体があああ!!」

突然の出来事に慌てる暁の従者。

メリア達もそれに気づき、僕の周りに集まる。

そして…それは起こった。

「ヒィッ!?! な、何だっ、この姿は!!」

「まさか…、生物変化現象!？」

隣にいるアンジュの言葉通り、暁の従者の二人に『生物変化』が起こった。

「あああ、…なぜ。なぜだ、なぜ…こんな姿に。ラザリス様…」

「ラザリス様…助けて下さい…。ディセクター、ラザリス様あああ  
!!」

そんな悲痛そうな声を上げながら、生物変化を起こした二人は奥へと走っていった。

あれが…『願いを叶える存在』に祈った人の末路、か…。  
くそっ……。

思わず俯いてしまうと、不意にアンジュに肩に手を置かれた。

「落ち込まないで、衛司。確かにあんな事になってしまったけど…  
…衛司はよくやってくれたわ」

「……そう…かな……」

「ええ……本当よ。それより、身体は大丈夫…?」

アンジュの言葉に気を持ち直し、そう聞かれると、少し身体を動かしてみる。

「――……ちょっとキツイけどなんとか歩けるよ。……休んでもいられないしね」

「そう……分かったわ。それじゃ、奥に向かいましょう。あの人達を……あのままにしておけないしね」

そう言われ、僕はゆっくりと頷くと奥へと向け歩き出した。  
あの暁の従者の二人と……『願いを叶える』を会うために……。

――

――しばらく歩くと、また少し広い場所についた。ここで一応終わり、みたいだけど……。

そう、周りを見ながら歩いていると――『ソレ』は居た。

以前のジョアンさん達のように生物変化を起こした暁の従者の前に立つ、背は低めの結晶のような装飾品を身体の至る所から見せる少女。あれが……？

「あの子が…あの、赤い煙だったもの…?」

「誰…?」

アンジュの言葉に気付いたのか、此方を見て低めな声を出した少女。

「あなたは一体何者なの!?!」

「ラザリス…。僕は、ラザリス…」

「あなたが人々の願いを叶えてきたの? 願いを叶えるのはなぜ?」

アンジュの質問に少女、ラザリスは小さく首を傾げてみせる。

「…どうしてかな? 実のところ僕にもわからない。けども、君らから少しずつ世界を知るには都合が良かったからだと思う」

「あなたが願いを叶えた生物から、学習した。こういう事ですか?」

「そうなるかな。『願いを叶えて』と、向こうから僕に接触してき

たからね。この世界に出たばかりの時は、僕にも接触する能力がなかった。でも、やがてあらゆる生物が僕の方へ手を伸ばしたんだ」

ジェイドの問いに、ラザリスは小さく頷いた後そう言いながら説明を続ける。

「願いを叶えるという意志のコネクトを通じて、僕はこの世界の生命力と情報を少しずつ手に入れた。おかげで実体も思考も手に入れた。思う存分、僕の好きな様に力を振るう事が出来る」

「あなたは、さっき世界の生命力と情報を手に入れたと言ったけれど…あなたは、ヒトじゃない。…何者なの…？」

「――僕は、この世界ルミナシアの様に、誕生するはずだった『世界』だ」

アンジュの言葉に、先程まで低めだった声が、やや強くなってそうラザリスは答える。

誕生するはずだった…『世界』…？

「ああ…、ああ…。この世界にはうんざりだ！僕ならもつといい世界になるはずだった！！こんな、腐りきった世界をもたらすヒトがいる世界なんて、僕なら造らなかった！！」

「「「っ!?!」」」

突如、声が荒くなり、何かと思った瞬間、ラザリスが腕を横風呂ぎ振るい、大きな衝撃が身体に当たったのを感じ吹き飛ばされ、僕はそのまま飛ばされ壁に直撃した。  
くうっ……さっきの戦闘やオーバールIMITSの消耗もあってか……意識が……。

「――…君は……へえ……『イレギュラー』、か…」

そんな声が聞こえた直後……僕の意識はなくなった…。

――――

「――っ…此処は………」

「――……あ……衛司!?!目が覚めたんだねっ!?!」

軽く感じた痛みにゆっくりと目を覚ましていくと、そこは意識を失う前のアルマナック遺跡ではなく、見慣れたバンエルティア号の医務室であり、目の前で安心した表情を浮かべるカノンノとメリアが居た。

「あれ……カノンノ……メリア……そうだ！ラザリスはっ！？暁の従者の人達はっ！？……っ！」

「……衛司、あんまり騒いだら……駄目……」

「そうだよ、落ち着いて……今からそれはゆっくり説明するから……」

カノンノとメリアの言葉に、痛む身体を抑えながら、あの子の話聞いた。

結局、あの後ラザリスは行方不明。完全に行方をくらましたらしい。

暁の従者はまたジョアンさん達の時と同じように、メリアの謎の力によって元の体に戻ったが、その後は分からない。ただ、自分達の信じた『ディセンドー』は『ディセンドー』ではなかったと、呆然として、去っていったらしい。

「……生まれる筈だった『世界』……か……」

ラザリスが言っていた自分の正体。その言葉は深く耳に残っていた。

「…あ、それと…衛司、しばらくは絶対安静だって。なんでも、体力消費が激しいとかで…」

「う……まあ、そうですね…」

カノンノの言葉に思わず苦笑いしてしまう。うん、今回は大分無理したもんな…。

「一応、またお見舞い来てあげるから…しばらくは医務室で安静に、だよ？」

「……また、来る……」

カノンノとメリアはそう言葉を残すと医務室を出て行った。

僕はそれを確認すると、ゆっくりと医務室のベッドに寝転んだ。

「……『イレギュラー』…か」



意識を失う直前に聞こえたその言葉。その言葉の意味からすると……ラザリスには僕のドキュメントが見えたんだろうか……？

「……分からずじまい、か……」

思わず漏れてしまうそんな言葉。結局、僕はこの数分後、また睡眠的な意味で意識を失う事となった。

## 第十八話（後書き）

ぐっだぐだだぜ↑↑

今話、一番文が長く、一番不安度大な話です↑↑

ヤバイ、泣ける↑↑

衛司君のキャラも見失ってきた今日この頃……泣くわあ↑↑

次話は……どうなるだろ↑

とりあえず、早く更新出きるよう頑張ります；；

## 報告及びご意見を宜しければ…

皆様、どうも、この作品が皆様に楽しく読んでもらえているか毎回不安いっぱいに執筆、投稿している夕影です↑

今回、皆様にご報告…と、いうかご意見いただきたいのは…この作品の今後についてです。

どういう事か、というと…感想の方にて『主人公が簡単に女性キャラにフラグを建てすぎではないか』、『これはよくある女性キャラを低能化させてそれで終わりではないのか』、『都合のいいように改変されている感がある』という意見を頂き、正直、自分じゃ気付かなかったかなり痛い所つかれまくって何とも言えない状態になりました。

今回のご意見を参考に、衛司のフラグ無双の自重等々を考え、この作品を第四話辺りから書き直すべきか、考えています。

ですが、今、自分自身、現在ラザリス登場までストーリーを書いたので、このまま最終回まで続けたい、という気持ちもあります。

それで、この作品を見ていただいている皆様からご意見を頂きたいのは、『この作品を第四話まで初期化して修正しながら連載するか、『これからフラグ無双を自重してこのままストーリーを進めるか、という事です。

本編続行の票が多かった場合、衛司のフラグ無双を自重し、正ヒロインであるメリア、カノンノを中心に書いていこうと考えてます。

初期化の票が多かった場合、第四話程まで削除、衛司のフラグ無双は勿論、今まで投稿した話の分も含め修正しながら再び第五話から書き直していこう、と考えてます。

一応、期間としては6月26日の午後12時までにして、それまでに集まった票数とご意見によってこの作品の今後を考えていこうと思います。

こんな事を自分で判断出来ず、皆様にご意見を頂くような形になり本当に申し訳ありません；；

それでは、皆様、宜しければご意見及び、投票を宜しく願います；；

## 結果報告

まずは投票とご意見の事、皆様誠にありがとうございました+

今回、予想外のご意見、及び投票数に驚きと、改めて自分の作品がどれだけの方々に見ていただき、支えてもらっているかが分かりました：+

アンケートの結果ですが……『フラグを自重して本編続行』の方に多くの票を頂き、フラグを自重して本編続行する事を決定いたしました：+

これからは本編続行、考えていたフラグの自重、修正とありますが：皆様から頂いた意見を参考にこれからも無事、本編完結出きるよう頑張っていこうと思います：+

改めて：再度、多くの投票やご意見、誠にありがとうございました+

これからもこの作品を皆様、宜しくお願い致します：+

## 第十九話（前書き）

何とか書き上げたので投稿↑↑

自分なり色々と修正はした。当初はこの第十九話は本当に無双だった↑↑

ただやっぱり……文荒いわぁ……↑↑

※文が荒い↑↑

※後半はやや適当に……↑↑

※うん、衛司俺と代わ r（r y↑↑

## 第十九話

——あのアルマナック遺跡の事から数日が経った。

あのラザリスという少女が出て、何か起こるんではないのか、と思われていたけど、今の所、特に大きな事件等は起こってないらしい。

因みに、数日経っても僕は現在進行形で、バンエルティア号の医務室で絶対安静という状態でベッドに寝かされていた。

なんでも思っていた以上に僕の身体の体力消費が激しいとかなのか……。多分、というか確実にユーリ達の忠告を気にせず一日中鍛錬or依頼の日々が多かったのが理由だったりするだろう。

でも正直、寝てばかりじゃ身体も鈍るだろうし、何より暇だから、医務室を管理してるアニーが居ない間に目を盗んで木刀で素振りでもしよう、と思っていたんだけど……クラトス師匠が『調べたいことがある』って言って木刀を持っていかれた。木刀で調べたい事って何なんだろう……？

ただ暇で本当に……泣きたい。

そういえば、例の精霊の場所の暗号が解けたらしい。後はその場所を照らし合わせて向かうだけ、らしい。

それまでに身体も治ってるといいんだけどな……。――

——と、綺麗に現状報告兼現実逃避を試みたんだけど……——

「……………あーん……………」

「……………」

——どうしてこうなった。

よし、まずは落ち着け。落ち着いてこうなるまでの経緯を思い出せば、こうなった原因が分かるはずだっ！

僕、とりあえず医務室で横になりながら暇なので、アニーから借りた本を読んだ ↓ 気付けばお昼になって、お腹が減ってきた ↓ と、いうタイミングでメリアが昼食を持って来てくれた ↓ 僕が喜んで、メリアにお礼を言って持ってきてくれた昼食を食べようとお箸に手を伸ばすと、メリアにお箸を取られた ↓ よく分からず首を傾げていると、メリアがお箸を使って昼食のおかずを挟んで僕に向けてきた ↓ こうなった。

——駄目だ、全っ然分からない。

しかも、何故に『あーん』！？



これは、しかもかなりキツイ。

この状況、他者から見たら『チツ、リア充しねよ』って思われて当然だと思うけど、代わりたいたい人いるなら是非とも代わってもらいたいよ！

これキツイんだよ！？やられている側、スッゴい恥ずかしくて死にたくなるんだよっ！？

いや……まだだ、まだやられんよっ！

この状況を回避する方法はまだあるんだっ！

「――えつとメリア……僕は決して腕を負傷している訳じゃないからそんな必要は……」

「……あーん……」

「ほら、メリア！僕スッゴい元気だからさ、お箸を渡して欲しいんだけど……」

「……あーん……」

「……あ、あれを見てメリア！あんな所にUFOがっ！」

「……あーん……」

「……メリア…僕、実はまだお腹がへってなくて…」

「……あーん……（涙目＋上目遣い）」

「……あーん」

……負けたよ、完敗だよ。

勝てるわけ……ないじゃないか。メリアはそれが嬉しいのか満面の笑みを浮かべる。メリア、君は悪魔か……？

仕方無く、メリアがこちらに向けるおかずをゆつくりと口に含む。正直言おう。恥ずかしすぎて全っ然、味が分からない。

メリアはそんな事お構いなしにお箸でおかずやご飯をつかんで僕に向ける。

はぁ……こんな所もし誰かに見られたら僕は……――

「おーい、兄弟！<sup>ブラザー</sup>見舞いにきてやった……ぞ……」

「はいはい、寝たきりには甘い物がつき物って事でケーキ持ってき

てあげたわ……よ…」

——そんな時、素晴らしいくらいのタイミングでヴォイトとロッタが入ってきて、静止した。

さて、問題だ。

今、二人には僕達がどう見えるだろう…？

正解…？ うん、それはね……

「——私には衛司の事が分からないっ！」

「えっ、ちょ、ロッタさん！？ どういう事っ！？ かなり勘違いしてませんっ！？ お願いだから走り去らないでっ！！！」

「——あー……すまん、ブラザー……邪魔したな…」

「待つてヴォイトっ！ そんな顔しながら出てかないでよっ！ お願いだから助けてよっ！ 勘違いだから助けてよおおっ！！！」

——こうなるのさ。

この後、なんとか二人の誤解を解くことが出来ました。  
もうさ……早く医務室から出たいよ。

「――そ、そんな事があつたんだ……」

「……うん…泣きたくなつたよ」

医務室に入ってからのお出来事がある程度話すと、それに対してカノンは苦笑いを浮かべていた。

「それにしても……メリア、そんな事したんだ……（羨ましいなー…）」

「うん…そうなんだけど……どうかした…?」

「あ、ううん、何でもないよっ!」

僕が話した後、ボーっと僕の顔を見ていたカノンに小さく首を傾げると慌てた素振りを見せる。

「そ、それよりどうかな？ 今回の風景は……？」

そう言って、医務室に来たときから僕に渡して見せてきたスケッチブックの方を見るカノンノ。

「うん……ごめん、やっぱり分からないや」

「そっかぁ……力になれると思ってたけど……ごめん。何も出来なかったね……」

スケッチブックに描かれた風景に首を振って応えたとそう言って俯いてしまうカノンノ。

確かにこの風景は分からないけど……『記憶がない』って嘘を付き続けるのって、やっぱり罪悪感が出る。

そう思うと、俯いているカノンノの頭をそっと撫でる。

「別に気にしないでいいよ。こっちこそ、風景の手掛かりになれずにごめん。だけど、きっと次もある。だから、一緒に頑張ろ？」

「あ、ありがとう……」

僕が頭を撫でながらそう言って微笑んで見せると、カノンノは頷いた後、顔を赤くして僕の顔を見た。

「……?…どうかした…?」

「うん…何だか今の顔…。お父さんとお母さんみたいだった…」

「えっ……?」

カノンノの唐突なその言葉に思わず驚いてしまう。いや、そりゃいきなりそんな事言われたら驚くけど、それよりも……確かカノンノの両親は……―

「…でも、実際は、お父さんやお母さんの事なんて、何一つ覚えてないんだけどね…。お父さんもお母さんも、立派な医者で…でも、私が生まれてすぐに、戦争で死んでしまったって。ロックスに、そう聞いたんだ」

そう、僕もその事はロックスさんから聞いてしまった。

彼女の両親は、前作のように…亡くなっているんだ。両親の顔を見て、覚える前に…。

「……なんか……ごめん…」

「ううん、いいの。お父さんの事もお母さんの事も何も知らないけれど、衛司のさっきの顔を見たら、こんな風に笑ってくれてたのになって思ったの」

「そう……寂しくはない……？」

「大丈夫だよ。寂しい時もあったけどロックスが居てくれたし、それに、今は皆や衛司がいるから平気だよ」

「……そっか」

そう言って微笑むカノンノに、僕は一言そう言うと、再びカノンノの頭を撫でた。何故だか彼女の笑った表情を見ると、どこか安心出来るから。

「ん……ありがとう。また、何か描けたら見せて上げるから、絶対に見てね」

「……うん、分かった。約束するよ」

カノンノの言葉に頷いて応えようと、僕達は指切りで、約束をしたのだった。

「――…体調は大丈夫そうか？」

それから暫くして、医務室に僕以外が居なくなった頃、僕の木刀を持ってクラトス師匠が帰ってきた。

「はい……色々あったけど、至って元気です」

「そうか…。…お前の木刀について調べさせてもらったが…色々に分かった事がある」

僕の言葉に、クラトス師匠は小さく笑った後、真剣な表情になりそう言った。

僕の木刀について……？

「この木刀だが……恐らくこれは『世界樹』から創られている」



「『世界樹』から…っ!？」

クラトス師匠の言葉に、思わず驚いてしまう。世界樹から創られた木刀って……。

「始めはお前が此処に来てから今まで使って、どうして折れないどころか輝すら入らないのか気になって調べてみたんだが…納得出来た。いくら他の木刀より強度が高いとはいえ、今のお前の技や動きの負荷には耐えられんだろう。だが、世界樹から創られているのなら、それ程の強度があってもおかしくはないだろう」

「…そうだったんだ…」

クラトス師匠の説明を聞いてその木刀を見る。確かに『これ結構使ってるけどどうして折れないんだろ』とか気になってたけど……世界樹から創られてたのか……。

…何でそんなの、僕持ってたんだろ…？

「……衛司」

そう考え込んでいると、クラトス師匠に名前を呼ばれ見ると、クラトス師匠はいまだ真剣な表情で此方を見ていた。

「…今回の事に関して、私はお前の事は深くは聞かん。だが…困った時や、一人で考え込みそうになった時は相談くらい聞いてやろう。あまり、一人で考え込むな」

「…はい。ありがとうございます」

言った後、小さく笑って見せたクラトス師匠に、僕は小さく頷いて礼を言った。

一人で考え込むな…か……。そう…だよ。僕は…一人じゃないだ。

クラトス師匠の言葉で、改めて…僕は仲間がいる有り難みを知った。

## 第十九話（後書き）

見ろよ、ぐっだぐだだぜ↑↑

……orz↑↑

ヤバいわぁ、自信ないわぁ↑↑

今話の木刀の件、正直後から足したような設定です↑

世界樹産木刀（↑）は、多分そんじょそこの木刀よりは遥かに強度が高いと自分は考えてます↑

うん、自信ないけど↑↑

まぁ、とりあえず一言だけ言っておけば……衛司君の木刀はもう『しばらく』は折れませんかし輝も入りません。

さて次話は……どうなるかな↑↑↑

なるべく早く投稿出来るよう頑張ります+

## 第二十話（前書き）

一応完成したので投稿＋

ただ、普通に原作通りなので原作知ってる人は面白みなんてないさ↑  
ああ、俺の作品だと面白みないのは何時ものことか↑↑

※絵にかいたような原作通り↑

※カイウスエ：↑↑↑

※ヴァン師匠チート説↑↑↑↑

## 第二十話

——場所はバンエルティア号の甲板。そこで僕は、今木刀を構え、目前に立っている相手に踏み込む瞬間を待っていた。

「——……どうした？ 打ち込んでこないのか……？」

「——……ッ」

いや、訂正しよう。打ち込めずにいた。正直、今までよくクラトス師匠に打ち込みにいったな、と言いたいくらい、今目前に立つ人は凄まじい威圧を放っていた。  
改めて……クラトス師匠達がいまだ本気でないのを再確認と、自分より遥か上に立つ人の実力差が分かった。

「来ないなら……此方から行くぞ」

「——く……ッ」

そう言って構えたと同時に更に相手から吹き上がるように出る威圧。  
くっ……兎に角対応しないと……!

「――光龍槍っ!」

「っ……魔神剣・双牙アッ!!」

相手の剣から真っ直ぐとこちらに向け放たれた光の矢をなんとか避け、そのまま斬撃を放つ。

「――ふんっ!」

だが、相手はその二つの斬撃をいとも簡単に……剣一振りで相殺した。  
何あれ、チートっ!?

――だけどそれは少なくとも予想の内だ。

「――ハアアアアッ!!」

先程の魔神剣・双牙はあくまで相手に接近する為に先行させた囷。

魔神剣が相殺される瞬間まである程度近付き、相殺された瞬間、一気に接近して木刀を力の限り奮う。

——だが…

「——…ほう……中々考えた物だ」

「——……な…っ!？」

振った木刀は相手に当たる前に、いつの間にか体勢を戻した剣で防がれる。

「くっ……ハアアアッ!!」

防がれたと分かった瞬間、今動ける限りで木刀を振るい、連撃として相手に打ち込もうとする。

この距離で防がれた以上、攻めるしかない。後退の隙を見せた瞬間にやられてしまう。

だが、その連撃も、相手はいとも簡単に防いでいく。

「——ふむ……私のこの距離から即座に後退という判断を選ばなかったのはよし。打ち込みの箇所も、大ざっぱに見え、的確に相手の

急所になりかねん場所を選んでいる。中々、いい判断だ。だが――」

相手がそう言った直後、防ぎに回っていた剣が大きく振るわれたと思っただ瞬間、大きな風圧を感じ、その勢いで木刀が手から離れてしまう。

ッ……しまった！

「――まだまだ、あまいっ！！」

「――がアッ！？」

相手のその声が聞こえた直後、腹部に何かが触れた感覚と強い衝撃を感じ、僕の身体は勢いよく吹き飛び、甲板の地面へと打ちつけられた。

「――ふむ。戦ってみて分かったが、君はまだまだ強くなれる。中々、楽しみだ」

「――…はい。ありがとうございました」



僕は改めて、先程まで模擬戦の相手をしてくれていた、新しくアドリビトムに入った、『ジアビス』のヴァン・グランツさんに礼をする。

正直、この人が来たときは本当に驚いた。

それで、僕はヴァンさんに模擬戦を頼んだのだ。結果は惨敗。文字通り手も足も出なかった。

しかも多分……ヴァンさんはまだ本気じゃないだろう。

本当にチートじゃない、この人？

「君の戦い方は中々だと、私は思っている。それこそ来て数日だが、このギルドの皆が君の事をよく話す訳が分かった。……良ければ、ルークやアッシュとも戦ってやってくれ」

「はい……。あの……手も足も出せなかったのにこんな事言うのはアレですけど……良かったらまた、模擬戦お願いしてもいい……ですか？」

僕の言葉に、ヴァンさんは小さく笑みを見せた後頷いた。

正直、確かに手も足も出せないくらいの惨敗だったけど……これから闘っていくにはきつとこのくらいの強さが必要……なんだろう。

今はまだ自分にとっては遥か遠く、高い相手だけど……超えたいと思った目標がもう一つ、増えた。

「霊峰アブソール……?」

「ん……そこに精霊が居る……みたい」

僕の問うような言葉に、メリアは小さく頷いてそう応えた。  
なんでも精霊が『霊峰アブソール』という場所にいる事が分かったらしく、今メリアが向かうメンバーに僕を入れようとしている所であつた。

精霊、か……。と、言うときっぱり氷のセルシウスだろうか……。もし、そうだとしたら……。前作のように、彼女の……。メリアの正体がデイスエンダーだと、分かれてしまう場面だろうか。

「……分かった。じゃ、一緒に行くよ」

僕の言葉を聞くとメリアは嬉しそうに一度頷いた後、アンジュにメンバーが決まった事を伝えに行った。

もし、メリアの正体が精霊に分かってしまうなら、僕の事ももしかしたら……。分かれてしまうかもしれない。

もし、分かれてしまったのなら……。その時はきつと……。皆に話さないといけないのだろう。

――靈峰アブソール…。

うん……精霊でセルシウスまで思い出せてたんなら、何故僕は肝心な事を忘れてたんだろう……。

「――……寒っ」

「……うん……寒いね」

靈峰アブソールは絶賛、辺り一面が雪景色でした。  
あまりの寒さにそうばやいてしまう僕とエミル。

「…そうか？そこまでひどい寒さじゃないと思うけど」

「……別に…寒く…ない……」

それに対して寒さなど特に気にしてない表情で僕達の前を歩くカイウスとメリア。

うん……メリアはともかくカイウス、君はその服装で何で寒くないのさ……？

「ふ、二人とも寒いね……」

「そうか？まあ、俺の場合はいざとなったら獣人化して毛皮まとうるしな」

「そう言えば、カイウスは獣人に変身出来るリカンツだったね……それもあるのかな？それにしても、初めて変身した姿を見た時はびっくりしたな」

「俺は、エミルが闘う時に出る妙な人格の方がびっくりしたけどな」

「ああ、それは僕も同意出きるかも……」

「うう……ごめん……」

カイウスの言葉に思わず同意して言うてしまうと、エミルが申し訳無さそうにそう言って俯いた。

「いや、もう俺達は付き合い長いから慣れたけどさ。それに、アド

リビトムには人間だけじゃなくて、色んな種族がいるから、誰が珍しいっていうのはないよな」

「…そうだね。それに、種族の差を感じないし。……精霊も、そうかな？ ヒトとあまり変わらないのかな」

「どう、だろうね……。僕のイメージ的にはヒトに似てそんな気がするけど」

エミルの言葉に僕は少し考える仕草を見せてそう応えた。因みに僕のイメージしたのは言わずもがな、セルシウスである。

「ヒトと心を通わせてくれるのかな…。僕は…、不安だな。何かありそうな気がするし…」

「エミル……何か不吉な事を言うのは止めとこう。色々、不安になる」

「あ、ごめん……」

僕の言葉にエミルは再び申し訳無さそうにそう言って、僕達は再び歩き出した。

そして、エミルのこの発言が見事に的中する事を、この時はまだ知らなかった。

寒さと降り積もった雪と現れる魔物を抜けて、漸く山頂につくと、そこには上手くは見えないが、確かに人影があった。

「だ、誰かいるよ…」

「精霊……じゃ、無い……」

「でも、アンジュさんの指示じゃ目的地はここなんだけどな。あの  
人に聞いてみるか」

カイウスの言葉に全員が頷くと、その人影に歩み寄っていく。  
近付いていく毎に徐々に見えてきたのは、その人影の後ろ姿と長い、  
赤の髪。あれ……でもあの服装……何かで見たことあるような……。

「あ、あの……すみません……。…精霊を探しているんですけど……」

「――精霊を探している、だと？」

エミルの言葉に反応し、振り返った姿に、思わず僕は少し驚いてしまう。

そうだ、この人は確か『ラタトスク』の……リヒター・アーベントだ。

「…あ……、…その、僕達は…ギルドの者で…精霊を……探している………」

「精霊に会わせる事は出来ない。早々に立ち去れ」

リヒターさんの剣幕に、エミルは恐る恐ると要件を述べるが、リヒターさんはそれを直ぐ様その、応えた。

「でも、俺達は精霊に聞かなきゃいけない事があるんだよ。話がしたいだけなんだ」

「話だと？――そんな嘘は、今まで訪れた者は皆言っていた」

カイウスの言葉に呆れたような溜め息を吐いた後そう言葉を出すリヒターさん。

嘘って………どういう事…？

「あの、すみません。……嘘って…一体…」

「惚ける気か？お前達の目的は、精霊を捕らえ星晶がある場所を探知させる為に利用したいだけなのだろう？」

……まさか……盛大、疑われて勘違いされて………ます？

「い、いいえ………そんな事は…、絶対に………」

「精霊を知ってるんだな？あんたこそ、何者なんだよ！」

リヒターさんの威圧に、恐る恐るながらエミルが弁解しようとした所で、カイウスがそう言って前に出た。

ちよ、カイウス！その言い方じゃ更に勘違いされて……

「俺は、リヒター・アーベント。ここにいる精霊と契約し、この地と精霊を守る者だ。精霊に会いたくば、俺に勝ってみせろ」

そう言ったと同時に、武器であろう斧と剣を構え、此方を睨んでき



たりヒターさん。

うわぁ……やっぱり、こうなるのか…。

「そういう事か。よし、行くぜ！みんな！」

そして、更に勘違いさせてしまった原因の彼は、俄然やる気で武器を既に構えてた。

「あ、え、あの……」

「エミル……諦めて戦おう。カイウスの事は…後でルビア辺りに言  
つてたっぷり痴話喧嘩してもらおう」

「……とにかく……戦う…」

いまだ上手く状況を理解出来ないエミルにそう言うと、僕達は武器を構える。

うん、カイウスには絶対、後でルビアと痴話喧嘩してもらおう。

ただ今から闘うのは……確実に気を抜けない相手だという事だ。

——こうして、精霊を巡る戦いは始まった――



## 第二十話（後書き）

ぐっだぐだだぜ↑↑

うん、そうさ。ネタが尽きたさ↑↑

とりあえず…うん、多分自分なりにヴァン師匠はチート人間だと思う↑

いや、だってラスボスだし、漫画版のアッシュストーリーじゃ、アッシュの秘奥義に一瞬で懐入って『フツ、遅い』とかいいながら一撃でアッシュ沈めたし↑↑

次話は勿論、コーラス…じゃなくて炭酸…でもなくて、不死身のアーベント戦の予定です↑↑

果たして、衛司達は、リヒターさんを『俺は！スペシャルでっ！二千回でっ！！模擬戦なんだよーっ！！！！』に出来るのでしょうか（ry↑↑

では、また次回、早く更新出来るよう頑張りますね+

## 第二十一話（前書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした。；；

なんとか完成したので投稿です+

自信ないけどね…☆↑

※相変わらず荒い戦闘描写あり↑

※やや中途半端な切り↑↑

## 第二十一話

「――ウオオオオオツ!!」

「――オラアアアアツ!!」

――戦闘に入ったと同時に、武器を手にはリヒターさんに向け走り出すカイウスと、ラタモードに入ったエミル。

二手に別れカイウスは右から、エミルは左からリヒターさんに斬りかかる。

だが、リヒターさんはそれを、カイウスの攻撃を剣で、エミルの攻撃を斧で防ぐ。

「フツ………陽流・壬ツ!!」

「ぐっ!?!」

「うわあっ!?!」

直後、リヒターさんが叫ぶと同時に、リヒターさんの周りから水柱

が現れ、攻撃を防がれ近距離にいたカイウスとエミルに水柱が直撃する。

「エミル、カイウス！退けっ！——……魔神剣・双牙アッ！！」

エミルとカイウスに向けられる更なる攻撃を避けるため、エミル達を退かせる隙を作ろうと斬撃を二つ飛ばす。

「甘いな……陰流・丁ッ！」

飛ばした斬撃を、リヒターさんは迷うことなく剣と斧を震った瞬間、大きな爆炎が上がり、斬撃を消し飛ばした。

そう、わかった刹那——

「陰流・葵ッ！！」

「な……っ！？」

爆炎が晴れたと同時に、突如、一瞬で目の前へと現れたリヒターさんに驚き、反応が遅れる。

ッ……ヤバ……ッ！

「フンッ……陰流——……苦無閃……」——チィッ」

リヒターさんの攻撃が来る、と思った瞬間、僕とリヒターさんの間にクナイが飛び、リヒターさんが後退した。

「…ハア…ありがとう、メリア…」

「……ん……」

リヒターさんが距離を置いたのを見てなんとか呼吸を整え、リヒターさんの攻撃を妨害したメリアに礼を言う。

それにしても……

「くっ……流石に強い……」

「ああ…攻撃の一つ一つが重いし……中々攻撃を通させてはくれねえな…」

体勢を戻したカイウスとエミルが、構えを崩さないリヒターさんを見ながらそうぼやく。

二人の言うとおりに、リヒターさんの攻撃は一つ一つが強力で、変則的過ぎる。

「フン……こんな腕で俺と闘おうとは……俺も甘く見られたものだな」

「ッ……なんだと……っ!？」

「カイウス、落ち着いてっ!」

そんな僕達に、リヒターさんは挑発するようにそう言って、鼻で笑うような仕草を見せると、カイウスがリヒターさんに向け今にも飛びかかるばかりの勢いを見せるが、慌ててカイウスを静止する。駄目だ……このままだと、リヒターさんのペースに飲まれて本当に、リヒターさんに手も足も出せずに終わってしまう。

「……再度、言うておく。俺はお前達を精霊に会わせるつもりはない。……無駄な怪我を負いたくなければ、早々に此処から立ち去れ」

「……嫌です」



僕の返答に、リヒターさんの眉が僅かに動く。

「……ほう。俺との力量差が分かっていながら……まだ俺に勝てる、  
とでも思っているのか？」

「いえ、正直、勝てる自信なんてないですよ。もし、僕がギルドにも何も属してない、あなたの言うような精霊を利用するような人間なら、今すぐ逃げ出すくらいの力量差ですから」

「……そこまで分かっている、ならば何故、逃げようとしらない？」

僕の言葉に、リヒターさんは武器の切っ先を此方に向け、威圧を掛けるようにそう、言ってくる。

正直、本当にこの力量差は怖い。エミルやカイウス、メリアは大丈夫そうだけど、正直な話、僕は恐怖負けて今すぐ逃げ出したい気持ちだ。

だけど………

「……信じてもらえなくても構いません。ただ、僕達には、精霊を守るアナタを倒してでも精霊に聞きたい事がある。ただ……それだけです」

真っ直ぐと、リヒターさんに向けそう言って、僕は木刀を構え直す。カイウス達も、それに頷き、揃えるように武器を構えた。

「……そうか。ならば……」

僕達を見て、リヒターさんはフツ、と口元で笑って見せ……

「——その言葉……俺を倒して証明してみせろっ!」

そう言って、武器を構え一気に威圧を跳ね上げた。

見ていて分かる。アレは今度は一撃でももらおうもんなら確実に沈められる。

「……エミル。あの人に強力な攻撃を与えるぐらいの余力は残ってる?」

「ん……ああ、まあ残ってるが……それならオレよりもカイウスやメリアの方がいいんじゃないか?」

僕の言葉にエミルは一度頷いた後、少し間を開けそう聞いてきた。

「うん……本当ならそれがいいんだろうけど……メリアとカイウスにもちゃんと役目があるから、最後はエミルに決めて欲しいんだ」

「……まあ、分かった」

「それで、俺達は……？」

「ん……カイウスとメリアは……——」

カイウス達にある程度、僕の考えを伝えたと、二人は小さく頷いて答えた。

問題はリヒターさんに上手くいくかどうかだけど……今はするしかない。

「——作戦は決まったか……？」

「はい。待っててくれてありがとうございます」

「そうか……。ならば……行くぞっ！」

リヒターさんの声を同時に、再び戦闘は始まる。  
リヒターさんは武器を構え、此方に向け走り出す。

「カイウスっ!!」

「ああ、任せろっ!」

それに対し、先にカイウスを先行させ、僕達は散り散りに走り出す。

「フン……何を考えているかは分らんが……纏めて叩き潰してやろうっ!」

「そうはさせるかっ!——目覚めろ、俺の野生の中の魂っ!!」

カイウスがそう叫んだ直後、カイウスの体が獣に変わっていく。そう、『獣人化』だ。

「ほう……。お前はリカンツだったか……。成る程、厄介だなっ!」

「うおおおおっ! 皆をやらせてたまるかあああっ!!」

声と同時に交わる拳撃と剣撃の音が響く。

『——カイウスには一番危険だけど、リヒターさんを誘導する罠になって欲しいんだ。それこそ、今のリヒターさんのあの状態ならキツいだろうけど、獣人化しないと上手く対応出来ないかもしれない。もし誘導が上手く言ったら僕が合図を出すから、その時は——』

「——カイウスっ!!」

「っ……おうっ!!」

「ぬう……っ!?!」

僕の声に反応し、カイウスがリヒターさんから後退する。今リヒターさんがいる位置は、大分距離を置いているが丁度僕とメリアの間位置にいる。  
よし、いけるっ!!

「ハアアアッ! 裂・空・刃ッ!!」

「……風刃縛封……」

同時に放たれる真空波の多段の居合い斬りと鎌鼬のような風の檻。両方からの広範囲の攻撃に、リヒターさんも思わず防戦に入る。

「ぐうっ!?っ……だが、この程度の攻撃などっ!!」

「今だっ! エミルっ!!」

「うおおおおおっ!」

防戦のまま、リヒターさんが言う中、僕は最後にエミルに合図し、僕の隣を、光の輪を周りに出現させた、オーバーリミッツ限界突破したエミルが駆け抜け、リヒターさんに向かう。

そう、僕とメリアはあくまでリヒターさんに一瞬でも隙を作る役だ。後は……エミルが決めてくれるっ!

「なん……だとおおおっ!？」

「これで……沈めえええっ!!」

オーバーリミッツの効果により、急接近してきたエミルに、先程まで僕の『裂空刃』とメリアの『風刃縛封』を防いでいたリヒターさんはその対応に遅れ、エミルから放たれる無数の斬撃に直撃する。

「がっ……ああああっ!!」

そして斬撃の最後に放たれる衝撃波を受け、リヒターさんは音と共に、後方の氷の壁まで吹き飛んだ。

「――ハア……ハア……っ!」

「エミルっ!……大丈夫……?」

「……あ、う、うん……大丈夫だよ……」

氷の壁まで吹き飛んだリヒターさんの姿を確認し、限界が来たのか、片膝をついたエミルに駆け寄ると、通常時のエミルに戻っていた。多分、リヒターさんのあの様子戦闘が終わった、と認識したんだろう。

そう思って再びリヒターさんの方を見てみると……――

「――ハア……ハア……くっ……!」

「ま……マジ……かよ……っ!?」

多少の傷は見えるがリヒターさんは、再び立ち上がり、武器を手にとって持っていた。

決めた、と思っていたカイウスも思わず驚きの声を出した。

「ぐっ……中々効いたぞ……だが……まだまだ……っ」

「っ……くそ……っ」

リヒターさんの様子に思わずそんな声が漏れる。

正直形勢はヤバイ。リヒターさんは多少ダメージはあるけど、俄然闘えそうだが…此方側は、僕とメリアは多少ながら健在、カイウスも一見大丈夫そうに見えるけど……『獣人化』で体力の消耗が見られる。エミルはエミルで体力は勿論だけど…ラタモードから解放されてるから確実に戦えそうにない。

くそっ……どうするっ!?

そう、思った時であった…。

「そこまでよ。闘気を収めて、リヒター」

「なっ……しかし……」

「大丈夫よ。そのヒト達は、敵ではないわ」



そう、女性の声が聞こえた後、何もなかった筈の場所から、一見、武道家にも見える服装の青の髪的女性が現れた。  
あれは……やっぱり……

「はじめまして。私は、氷の精霊セルシウス。あなた達が知りたいことに答えるわ」

そう、『氷の精霊』セルシウスが、そこにはいたのだ。

「それじゃ……まず世界の始まり、創世の時について知りたいんです……」

それから暫く、リヒターさんやエミル、カイウスの体力回復をして落ち着いた後、僕はセルシウスにそう言葉を出した。

「創世の時……ごめんなさい。それについては答えられないわ」

「ええっ!?!? そんなあ……」

セルシウスからのまさかの返答に、後ろにいたエミルから思わずそんな声が聞こえた。

「だって、精霊にも世界の始まりの事はわからないんだもの。精霊という存在は、世界が創られた後に生まれた者。わたし達は、マナを自然界の現象に作用させる為に生まれたのよ。そして、星晶により封じられていた『あの存在』の事しか知らないわ」

「『あの存在』……?」

セルシウスの説明を聞きながら、その途中に出た単語に思わずそう聞き返してしまう。

「……わたし達、精霊にもわからないの。ただ、精霊が生まれる以前に、既にこの世界にいたものの様よ。精霊ですら届かない次元にいる、何か歪んだ力…そして、それが大きな災厄となる事を、本能的に察知しているだけなのよ」

「大きな災厄になる、歪んだ力…。それを、星晶が封じていたの?」

エミルの質問に、セルシウスは小さく頷いてみせる。

「ええ。けれど、その封印は解かれてしまったわ。星晶を人々が採

り尽くした事で…。だから、世界樹は『あなた』を遣わせ……。そして、『あなた』を呼び込んだのかしら？」

そうセルシウスは言った後、一度メリアを見た後……。僕の方を見た。  
……。それって……。一体……？

「あなたはまだ気付いてないのかしら……。『ディセンダー』に……『イレギュラー』さん？」

——その言葉は自然に、周りに響いた気がした——

## 第二十一話（後書き）

相変わらずぐっだぐだですぜ☆↑↑

まずは更新遅れて申し訳ありませんでした；；

いや、あれなんですよ……3DSのジアビスの発売が悪いんですよ  
↑↑

そして思ってた以上にリヒターさん戦が難しかった↑

リヒターさん、戦闘スタイルが二刀流の斧と剣っていう珍しいスタイルだし、技の漢字が一々分かりにくく技の区別がつかずにWi k i 頼りになったし↑

その割にこの戦闘描写……もう俺にどうしろと……↑↑

次話は……どうなるだろ……↑

出来るだけ早く更新できるよう頑張りたいです；；

## if 閑話―『予告』という名の何か―(前書き)

ヒヤッハーツ!!↑↑

現在、諸事情により次話執筆が難しい状況なので間を開けすぎるのもアレなので、今回はif 閑話という名の予告です↑↑

決してネタに詰まったわけではn(r y↑↑

ぶっちゃけネタバレ含みですが、本当にこの通りに進むか不安なので、あくまでif 閑話扱いです↑↑

今回のこれを見て、ニュータイプの閃きを感じた方は、ちょっくらネタバレについて語ろうじゃn(r y↑↑

※ネタバレ(?) 成分あり↑

※あくまでif 閑話↑↑

**if 閑話**—『予告』という名の何か—

——遂に明かされる、衛司の正体——

「……『別世界』の人間……？」

「うん…信じてもらえないと思うけど…話すよ」

——徐々に迫り来る、『世界の危機』と『強敵との闘い』——

「——『キバ』……？」

「——『キバ』以外なんというのかしら……？」

「くは、くははははっ！面白い、面白いぞ貴様アアツ！！」

「……ッ……くそ……があああッ！！」

——すれ違う想い——

「お前に……僕の何が分かるって言うんだっ！！」

「ッ……それは……」

——気付かれていく、『真実』——

「——……さて、果たしてアナタは——」

「——ねえ、衛司。アンタってさ……—」

「——……衛司……あなたは……『生きてる』の……？」

——そして……—

「——あ……があッ……みんな……僕……を……—」

「——……えい……じ………？」

「——テメエエエエッ！—」

「——ハハッ、最高の展開じゃないかつ！！—」

「——……コロ……ス……ミンナ………コロシテヤルウウウウッ！！—」



「……そんなの嫌だ。嫌だよ……衛司iiiiiiiiっ……!」

——物語は、『終わり』へと近付いていく——

## ―第二回キャラクター人気投票―

どうも、最近諸事情で殆ど執筆が上手くいかない夕影です↑↑

――そんなこんなで、気付けばこの作品もユニークは30000突破、お気に入りには250突破、PVはもうすぐ250000を突破寸前の状態で御座います。

皆様、本当にありがとうございます…+

てなわけで……今回は、タイトル通り、第一回キャラクター人気投票をしたと思います+

ん……？マイソロ3はキャラクターが多い……？知ったことかそんな(rv↑↑

とりあえず……投票説明をば…

・投票キャラクターはこの作品で現在投稿されている話まで登場したオリジナルキャラクター及びテイルズキャラクターです。

・一人の投票キャラクター数は三人までです。勿論、一人、二人でも可。

・投票際に良ければ、キャラクターに対してのコメントもあれば嬉しいです+

まあ、こんな感じですね↑↑↑

期限はとりあえず……八月三十一日までにしておきます+

投票数や、コメント数が多かったキャラクターは、出来れば、ほのぼのや友情物の閑話でも書こうと思っています+

……あくまで出来ればですが……↑↑↑↑

では……皆様良ければ投票及びこれからもこの作品をよろしく  
お願いします+

## 第二十二話（前書き）

長らくお待たせしました、第二十二話、よ・う・や・くッ！投稿です↑

ただねえ…大分空いたのもあってかなり無理やり感がある気が…  
…大丈夫かな…↑

第一回キャラクター人気投票も皆様良ければ、宜しく願います  
ね↑

※かなりぐだぐだ…？↑↑

## 第二十二話

「――まさか、あなたがディセンダーだったなんて…」

――前回のセルシウスの言葉から、僕達は取り敢えず、仲間になる事になったセルシウスとリヒターさんを連れ、バンエルティア号に戻ってきた。

今日の前には、話を聞いたアンジュが驚いた表情でメリアを見ていた。

まあ、それはそうか……今まで『伝説』と言われてた存在のディセンダーが、今まで自分達と一緒にいたのだから。

「……どうか……した……？」

「ご、ごめんなさい、何というか…、あまりにも驚いてしまって上手く言葉が出て来ないの…」

「……ですが、今思い返せば、彼女がディセンダーだと考えられる点は確かにありましたね。あなた方に聞いた民間人の生物変化、そして私達が見た暁の従者の生物変化…。そのどちらも、元に戻したのは確かに彼女でしたからね」

驚いたままのアンジュに、少し考えるような仕草をした後、そうジエイドが口を開いた。

因みに今居るのはホールの方で現在、彼女がディセンダーだと聞いて殆どのメンバーが此処に集まっている。

「彼女がディセンダーである事は分かりましたが……しかし、問題は彼の方ですね」

ジエイドのその一言で、周りから一斉に視線が僕に移った。

「『イレギュラー』……ディセンダーのような伝説や、ただの噂にしても、聞いた事が無いわ」

「私のはっきり言えば、『イレギュラー』については詳しくは知らないの。……ただ、何らかの原因によって、このルミナシアとは全く別の世界から呼び込まれた存在……と、私は世界樹から聞いているわ」

セルシウスの言葉に、その場にいる全員が、驚いたり、考える仕草を見せたりと様々な反応を見せた。

「『このルミナシアとは全く別の世界』……？それって一体……」

「そうね……。……それは、彼から直に聞いた方が早いんじゃないかしら？」

そう言って、視線をアンジュから僕へと移すセルシウス。流石は世界樹にまつわる精霊。案の定、気付かれてるようだった。

このバンエルティア号で一応、僕の正体の事を知っているハロルドとリタの方に視線を向けると、『頑張ってね』と言わんばかりの表情である。

うん、心折れそう。

「……あの、さ……。信じてもらえるとは思ってないけど……。今から話すことは、実際僕に起こった事だから……。聞いて欲しいんだ」

僕は小さく一度深呼吸すると、皆の方を向いてそう、口を開いた。

「――……そう、だったの……」

僕が以前、ハロルドとリタに説明したように、僕には元々記憶があった事、何らかの原因でこの世界に来てしまった事等、自分が事故にあった事以外や元の世界のこの世界と特に差し障りの無い部分を話した後、暫く沈黙が続き、アンジュがそう口を開いた。

「…しかし…『別世界』か…。俄には信じられないな」

「ま、普通ならそうでしょうね。でも、衛司が言ってる事は確かに事実よ。私とリタは一度、衛司のドキュメントを見せてもらってるからね――」

徐々に皆が口を開いていくなか、キールの言葉にハロルドがそう言っ  
て、僕のドキュメントの事を説明していく。

一応、話していく中で僕のドキュメントの状態等については誤魔化してくれたようだが。

「――……なる程、ね……改めてドキュメントって凄いわね…」

「――ですが、それが本当なら、衛司様が海で見つけた訳も分かりますね」

「うん……今まで皆を騙して……本当にごめん……っ！！」



ハロルド達の説明を聞いて、皆が納得したのを見ると僕は皆に向かい深々と頭を下げてそう言う。

何はどうあれ、僕が皆に記憶の有無について騙していたのは変わらない。

……ただ、このまま頭を上げるのが怖い。

別に嘘をついていた事については怒られても仕方ないと思っている。だけど僕にとって怖い事は……『皆から拒絶される事』。

『ディセNDER』として知られているメリアは確かに、少しぐらいは皆からの見方は変わると思うけど……果たして、『イレギュラー』と呼ばれる僕はだろうか……？

『世界樹を守護する存在』として知られる『ディセNDER』と違い……僕は言わば『異物』、『正体不明』の『イレギュラー』と呼ばれる存在だ。

『異物』である僕は、一体皆にどう見られてしまうのか……。

そして、それを今まで一緒に戦ったり、過ごしてきた人達から見られ、拒絶される恐怖。

——怖い。怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い——……。

自分が生み出した『負』の感情に、ただ追い込まれ、頭を上げられ

ずにいる……—その時だった。

——ガツンッ!!

「——ぬごうっ!!?」

——突如、下げたままの後頭部に何かが当たった音と強力な激痛が入り思わずそんな声を上げて後頭部を抑えて転げ回る。

痛みが走る頭を抑えながら見ると、そこには先程の激痛の正体であろうロッドを手持って僕を睨むように見るロッドが立っていた。

「ロツタ…? 一体なにを……—」

「——アンタ、バツカじゃないのっ!?!」

僕が口を開くと、ロツタはキツと目を変えそう、声を上げた。その勢いに、思わず僕は言葉が止まる。

「アンタ……どうせ自分は『居たらいけない存在』だから居たらいけないとか、皆から拒絶される、とか思ってたんでしょ……?」

「ッ……それは……」

「ふざけてんじゃないわよっ!!この船の、誰が、アンタを『いらない』なんて思うのよっ!?!」

「――その通りだよ、衛司」

……ロッタの言葉に続いて、その近くいたクレス師匠が口を開く。

「…ロッタの言うとおり、僕達は衛司を――『拒絶』なんかしない」

「――話はよく分かんないけど…衛司には無かった記憶があったって事だろ?なら、いいじゃないか!嬉しい事なんだろ?」

「――アンタ……本当に話分かってないのね…」

そしてクレス師匠を皮切り、それに続いて今度はスタン師匠とルーティが……

「まあ、ロッタやクレスの言うとおりだ。どうして、『仲間』のお前を俺達が拒絶なんてすんだよ?」

——ユーリが……

「僕もよく分からないけど……衛司がいなくなったりしたら、寂しいよ」

——エミルが……

「そうそう……それに、今までの船の宿賃、まだまだ払ってもらわないと足りてないのよ？」

——アンジュが……

「よくわからねえが……兄弟は俺のブラザーだ。変わりはしねえよ！」

——ヴォイトが……

「……衛司……居なくなったりしたら……嫌……」

——メリアが……

「そうだよ、衛司……。衛司は確かに、『イレギュラー』……此処に居

ない筈の存在かもしれないけど……衛司は衛司だよ！私達が今まで一緒に過ごして、一緒に依頼をこなしてきた『仲間』の衛司だよ！だから……衛司が居なくなるのも嫌だし……私達は絶対に衛司を嫌いになんかならないよっ！！」

——そしてカノンノが……皆が……。

そう言って、僕を引き止めてくれた。

「ッ……皆……どう、して……ッ……」

皆の言葉に、少しずつ自分の声が震えているのを感じながら、そう、言葉を出す。

どうして皆……僕を拒絶しないのか……嬉しい……だけど不安で、そう言ってしまった。

そんな僕に対し、皆を代表するようにカノンノが僕の前に出る。

「——そんなの決まってるよ。衛司はちゃんとした一人の人間で、私達の大事な一人の『仲間』で……私達の大切な『存在』だから……私達は絶対に、拒絶なんてしないもの」

「——……ッ……みんな……っ……！！」

そう、カノンノの言葉に…皆の笑顔に…僕は壊れたように、涙が  
零れ出す。

そうなんだ…僕は…『此処』に居て…いいんだ…っ！

「…う…っ…みんな、な…あり、がとう…っ！！」

皆の優しさや言葉にただ僕は…泣くことと、そう言葉を出す事しか  
出来なかった。

## 第二十二話（後書き）

久しぶりに……ぐっだぐだだぜ☆↑↑

ようやく投稿出来てこの内容とか……大丈夫か、俺エ……↑↑

自信ねえよ、うん↑↑

はてさて次回は……なんだろね☆↑↑

第一回キャラクター人気投票の方も良ければ皆様、宜しく願いますね+

## 第二十三話（前書き）

更新が大変遅くなってしまい本当に申し訳ありませんでしたっ！！！；

久しぶり過ぎて中々文が上手くも出来てないし……色々不安です；；

こんなもので良ければ是非とも、お目にかかって下さい……；↑

※かなりぐだぐだ感あり

※文才とアイデアを下さい↑↑↑↑

※あまりの自分の更新の無さとアイデアの無さにむしゃくしゃして  
やった、今は反省しているが後悔はない↑



## 第二十三話

——あの後、僕達はセルシウスから、彼女が知っている限りの話を聞いた。

あの暁の従者の時に現れたラザリスが、セルシウスが言っていた『災厄』と呼ばれる存在の事。

ただ、この事に関して、ラザリス自身が言っていた『誕生する筈だった世界』。それが何故、この世界『ルミナシア』に封じられていたのかはセルシウスにも分からないらしい。

だが、それと同時に新しい情報が彼女から入った。

それは、『この世の創世に立ち会ったヒトでも、精霊でもない者』、そして、その存在から創世の時について聞いた『ヒトの祖』。

……詳しい事は結局分らず終いで、現在はこの『ヒトの祖』の事について、リタがセルシウスから詳しく話を聞いている。

そしてそれを待つ今現状、僕はと言えば……——

「――九百七十八、九百七十九……ッ……九百八十っ！」

――現在、素振り中であつた。  
要するに詰まるところ暇なのである。

現在、クラトス師匠等、僕にとっての師匠メンバー達は皆依頼に行つており、鍛錬と言つてもこうして甲板で素振りをするしかないのだ。

え？エミルやカイウス？…エミルはマルタとイチャついてて、カイウスはルビアといつもの痴話喧嘩してるよ（チッ……リア充暴発しちゃえよ）。

「――九百九十八、九百九十九……ッ……千ッ！！……ふう……」

――暫くして、目安にしていた素振り千本を終わらせると木刀をゆつくりと下ろして息を整える。

「――あ。やっぱり此処に居たんだ、衛司」

ふと後ろからそんな声が聞こえて振り返ると、僕を見て小さく微笑んでいるカノンノがいた。よく見るとその両手には飲み物が入っているコップが二つあった。

「……カノンノ？ どうして此处に……というかそのコップは……？」

「ロックスから衛司が鍛錬してるって聞いたから何か飲み物いるかな、って思って持って来たんだけど……駄目だったかな？」

「全然。むしろナイスタイミングだよ。ありがとう、カノンノ」

カノンノの言葉にそう僕は答えカノンノから飲み物が入ったコップを受け取り、もたれ掛かれる所まで歩いてその場に腰掛けると、カノンノも僕の隣へと腰掛けた。

そのままカノンノから受け取った飲み物を飲んでると、不意に隣に座っているカノンノの顔が少し俯いていた。

「……？ どう……したの？」

「その、ね……衛司は私たちが今居るこの世界とは別の世界から来て……記憶が……あったんだよね……」

「…………うん。まあね…………」

「それじゃあ…………改めて聞いちゃうけど…衛司のいた世界には…………やっぱり私の書いた絵の風景は…なかったかな…?」

ゆっくりと俯いていた顔を上げ僕を見てそう聞いてきたカノンノ。彼女の書いた風景…………僕が居た世界では少なくとも…それを僕を見たことはない。

僕はカノンノのその問いに小さく首を横に振った。

「そっか…………少し残念だな…」

「ごめん…………力になれなくて」

僕の返答に落ち込んだ様子を見せるカノンノにそう頭を下げるとカノンノは『ううん』と首を横に振った。

「衛司のせいじゃないよ。…………ただ、これで衛司が私の絵を見なくなるって思うと…………ちよつと寂しくて…」

「そっか……ん……?」

僕が小さく頷いていると不意に、カノンノの言葉に引っかかった。

「…カノンノ、僕がカノンノの絵を見なくなるって……?」

「えっ……だって……私の絵はあくまで…衛司やメリアが見て、記憶の手掛かりになればってものだったから……別の世界から来てた衛司や、ディセンダーだったメリアは……もう見る必要がないんだなって思っ……それで……」

そう言いながら徐々に声が小さくなっていき再び俯いていくカノンノ。

その姿が、いつものよりどこか弱々しく見えた僕は一度溜め息を吐くと……

「——この…考えすぎっ子っ!」

「——あいたっ!!?」

俯いたままの彼女の額やや上に向けデコピン（ちょっと強め）を放った。

突然の事に僕の指が直撃した額を抑え、カノンノも流石に驚いた表

情で顔を上げた。

「……僕に記憶があつて、別の世界から来たからって、メリアがデイスエンダーだったからって……僕達がカノンノの絵を見なくなる理由にはならないよ」

「え……でも……もしかしたら……本当に無い風景かもしれないんだよ……?」

僕の言葉に驚いたままの表情でいるカノンノ。だが、それは徐々に寂しげな表情となっていく、そう言葉を出す。

今まで彼女自身があると信じ続け、『この風景は無い』と一言も言った事がない彼女から出た言葉。

……それは、多分、今までこれだけ様々な場所を見て回って、その風景がいまだに一つも見つからない現実から出た彼女の不安の言葉なのだろう。

「……絶対ある」

「え……?」

「初めて絵を見せてくれた時にも僕は言った筈だよ。カノンノがあ

んなに綺麗に、鮮明に描けてる風景を『嘘』だとか『有り得ない』だとか言わないって。だから、僕は絶対にあるって信じてるし……見つかるまで僕も一緒に手伝うって。……だから例え、言い出したカノンノが途中で諦めそうになったって、僕が絶対に諦めずに一つでも見つけて、カノンノの手を無理やりにでも引っ張ってみせるよ」

弱々しく見える彼女に、僕はそう思った言葉をそのまま出し、言い終わると笑って見せる。

それが僕なりに出来る、彼女を安心させるものだと思って。そう思いながらカノンノを見ていると……

「……え……っ？」

突然の事に僕はそんな言葉が出た。カノンノが不意に顔を戻したと思うと、そのまま僕の胸元に顔を埋めるように抱きついてきたからだ。

え………何事っ!？

「……ッ……」

「えっと……カノンノ……泣いて……る……?まさかデコピン痛かった!？それなら今すぐ謝るけど——」

「――違うのっ！……衛司は…本当に…良い人過ぎるから…嬉しくて…私の不安だって飛ばしてくれて……」

「…………カノンノ……」

「――だけど……もう少しだけ不安だから……こうしてて……」

僕から顔を隠すように埋めてそう途切れながらも言葉を繋げていくカノンノ。

そんな彼女に、僕は左手で抱きしめ返して、右手でそつと頭を撫でた。

「…………僕で良ければ……」

例えなんだろうと……彼女の力になれるのなら、僕はなんだって良かった。



——『オマケその1（その後の甲板の衛司とカノン）』

「……………」

「……………」

「……………／＼（どうしよう）」

「……………／＼（離れ…ずらい）」

——そのまま約数十分、彼等がこのままで居たことは、言うまでもない。

——

——『オマケその2（ホール側のその他、甲板への扉の隙間から）』

「――……うわー、甲板に出づらい」

「…良い雰囲気そうねー、二人とも♪」

「…お、お、おとお嬢様ああああーっ！」

「いやいやー、青春ですねー♪」

「全くね〜♪グフフフ〜♪」

――この数十分後、甲板から戻った二人に向け彼等の視線が温かったのは言うまでもない。

## 第二十三話（後書き）

本当に、更新が遅くなってしまい申し訳ありませんでした…；；

如何せん話は思い付かないわ、エクシリアは出るわ…↑↑

しかも漸く完成したけど久々過ぎてこのぐだぐだ感…；；投稿すべきかどうかで約四時間悩んだ↑

ヤバイ、泣きたくなってる↑

次回は出来る限り早くできるように頑張りたいです…；；

後アンケートの方は無事締め切りました＋  
結果は完成次第、投稿致します＋

ではでは…；；こんなんでも良ければこれからも宜しくお願いします＋  
良ければ感想等、宜しくお願いします＋

いや、今回は色々不安なんで、マジで↑↑



## 第二十四話（前書き）

なんとか早く書き上げたので投稿です+

まあ、いつも通り、ぐだぐだですが、ね……↑↑

※文が荒い↑

※やや特殊設定あり↑

※原作未参戦キャラ登場↑↑

※無理やり感あり↑↑

## 第二十四話

「――：おーい、まだつかねえのか…？」

「……うっさいヴォイト。聞く体力があるならさっさと歩く」

「……ははっ…」

――コンフェイト大森林のとある道を歩きながらそう言葉を出したヴォイトに、僕の隣を歩くロツタは溜め息を一つ吐いてそう返すのを見て、僕は思わず苦笑いを浮かべた。

まあ、ヴォイトがそう聞いてくるのはしょうがないか……かれこれ二時間は歩いてんだし。

何故、今僕達がそれ程時間を掛けてまで歩いているかは、この先にあるとある村から依頼が来たからだ。

普通ならバンエルティア号でその村まで送ってくれるんだけど……どうもその村は周りを木々に囲まれてるらしく、バンエルティア号での着陸が無理らしく、コンフェイト大森林の入り口から入っていないと行けないらしい。

そして、アンジュから渡された地図通り道を歩いて約二時間、現れ

た魔物との戦闘以外はずっと歩きっぱなしなのでそろそろ本気で足がきつい状態なのだ。

……早くついてくれないかなー…。

「――あー……？おい、アレじゃねえのか…？」

「ん……あ、多分そうだよ」

ヴォイトの声に、ヴォイトが指差した先を見ると先に村のようなのが見え、手に持っていた地図を確認すると僕は頷いた。

「――あそこが、……『リーゼ村』か」

「――いやいや…わざわざ忙しい中、こんな所にまで申し訳ありません」

「——いえいえ、僕達も依頼を受けた以上、ちゃんとなすのが仕事ですし。それが売りのアドリビトムですから」

「……アンジュ譲りの営業スマイルかつ、売り台詞ね（ヒソヒソ）」

「……ブラザーの将来が気になるぜ（ヒソヒソ）」

外野五月蠅い。

——あの後、僕達がリーゼ村に着くと、リーゼ村の村長が出てきて話を聞かため村長の家で今話をしている。

「……えっと、それで依頼とは……？」

「はい……。実はこの村の先にとある洞窟があるのですが……近頃のその洞窟の様子がおかしくて……」

「洞窟の様子が……？」

「はい……元々は魔物もすんでいない筈だった洞窟だったのですが……最近では魔物も出始めて……この村にいる手練れの者や、村で雇っている傭兵で対処しているのですが流石に洞窟の奥まで様子を見に行った事はなくて……」



「洞窟で突然、魔物が……」

村長の話を聞いていく中、僕はそう呟いて考える。今まで何にもなかった洞窟から魔物が突然現れた……正直、異例すぎる。

「……ねえ、まさかとは思うけど……これも赤い煙が関係してたりするんじゃないかしら……?」

「……有り得ない、とは言い切れないね……」

考えていると、不意にそうロツタがヒソヒソ声で話しかけてきた。確かに、考え得る中ではそれが今では一番思い当たるだろう。

「――……分かりました。その洞窟の調査と、出来る限りの魔物の討伐、引き受けました」

「……あ、ありがとうございます! 此方もある程度の人員を準備しますので、宜しく願いますっ!!」

「いえいえ、これもこの村の為ですから。受けた以上は、ちゃんと成果を出しますよ」

僕の言葉に、村長さんはどこか嬉しげにそう言って頭を下げてきたので、僕はそう答え小さく笑ってみせた。

「……衛司のあの受け答え方に、終わりの営業スマイル……絶対にアンジュから教わってるわね（ヒソヒソ）」

「……やっぱりブラザーの行き先が怖いぜ（ヒソヒソ）」

——だから外野、五月蠅い。

——村長さんに教えられた通りに村の奥に抜け道を歩くと、しばらくして先に洞窟が見え、その入り口の前に男性が二人、女性が一人の三人程の姿が見えた。

あの人達が村長さんが言っていた回せる人員だろうか…？

男性の内一人は、僕と同じか少し下程の背の少年。もう一人はその

少年よりも背は高く、なんとも大人っぽい感じの人。

そして女性の方は、少し高めでなんというか：凜とした感じで、背の高い方の男性とはまた別の感じの大人っぽさが感じられた。

向こうも此方に気付いたのか、少年が此方に頭を下げてきた。

「アドリビトムの方達です：よね？村長から話は聞いています。僕はジュード、ジュード・マティスです」

「――私はミラ。ミラ＝マクスウェルだ。訳あってジュードの世話になっている。自分で言うのはなんだが、腕には自信があるぞ」

「――俺はアルヴィンだ。この村で雇われてる、一応フリーの傭兵だ。ま、宜しく頼むぜ」

そう少年、ジュードから順に、女性のミラ、もう片方の男性のアルヴィンが自己紹介をしてきた。

「ジュードさんにミラさんにアルヴィンさん：ですね。僕はアドリビトムから来た乾衛司です。姓が乾で、名前の方が衛司。それでこっちはロツタとヴォイトです」

「……自己紹介くらい自分でできるわよ」

僕が三人にそう自己紹介していきロッタとヴォイトの方を見ると、ロッタは呆れたような様子でそう呟き、ヴォイトは特に気にする事無く笑ってた。

―その後、結局皆、『さん』付け呼びは無しにして洞窟に入る事になった。

「――それでも改めて言うけど、ジュード達って強いね…」

「そ、そうかな……？」

洞窟の魔物と戦いながら奥へと進むと中、僕は隣を歩くジュードにそう言うと、ジュードは少し頬を掻いてそう答えた。

この三人、正直かなり強い。

ジュードは拳を主とした戦い方でセネルとは違い、どちらかと言うとフアラ寄りな戦い方をする。また、見た目とは裏腹に拳の一撃一撃が重いのか、魔物をダウンさせる事が多い。

ミラはと言うと、また珍しい戦い方を見せてくれた。武器である剣の腕もさながら、魔法を詠唱無しで剣技として利用して戦う。一体どうやってんだろう…。

アルヴィンはフリーの傭兵というだけあってやはり強い。戦い方は剣と銃を交互に使う『海賊』のような戦い方だが、違うのは剣の大きさ。大剣と言うようなサイズの剣を片手で軽々と奮い、銃を扱うかなりパワータイプ+テクニクタイプな戦い方である。

「――それで、今大分進んだ訳だが：アドリビトムの方々はこの洞窟の魔物についてなんか分かった？」

三人の様々な戦い方等の話をしながら歩いていると不意に、アルヴィンが周りを少し見回しながらそう聞いてきた。

この洞窟の魔物……そう言えばさっきから戦ってた魔物って『ウィンドスピリット』や『アーススピリット』と言った小さな精霊が何かの干渉を受けて変化した魔物ばかりだったわけ。……もし僕の考えがあっているなら……

「……一応、あくまで僕の考えだけど……少し分かってきた」

「ほう……。それは気になるな」

僕の返答に周りの皆が少し驚いた様子を見せ、その中で最初に表情を戻したミラがそう、興味深そうに言葉を出した。

「うん……。まあ、うちのギルド関係の事もあるから詳しくは話せないんだけど……。多分此処に最初、魔物が居なかったのは小さな精霊達が過ごしていてそれこそ、村の人達は気付かなかった程神聖に近い領域だったんだと思う。……だけど今、この『ルミナシア』でちょっとした変化が始まって、それに小さな精霊達が干渉して、魔物に変わったんだと……。僕は思う」

「……。へえー……。優等生君はさっきの説明、どう思う？」

「……もし衛司の言ってる変化っていうのが本当なら……有り得ない訳じゃないかも」

僕の説明を聞いてアルヴィンはそう、ジュードに再確認するように聞くとジュードは僕の説明の事を考え、そう答えた。ミラは少し首を傾げていたが、ロツタとヴォイトは『この変化Ⅱ赤い煙ラザリス関係』と知っているので、理解したのか小さく頷いていた。

「まあ、まだ深くは分からないから……とりあえず奥に進んでみよう」

僕の言葉に皆は頷くと更に奥へと向け、歩き出した。

――

「――……此処が奥、か……あれ……？」

しばらく歩いた後、漸く最奥部であろう広い場所に着き僕はゆっくりと周りを見回すと、ふと視線が止まった。

「……？どうした、ブラザー……？」

「……人……しかも、女の子が居る」

「……え……？」

僕の返答に周りが驚き、僕の視線の先を見た。

そこには、黒の髪をした見た目九歳程の小さな少女が此方を見るように立っていた。少女の頬には小さな、雷を模したような模様がしてあるのが特徴的である。

「……あんな子…僕の記憶では村では見たことないよ…?」

「……いずれにしても、此処にいるのは危険だし…声を掛けてみる」

僕は少女に向けて歩き出すと、念の為警戒しながら少女と少し間を開けて前へと立つ。

「……えっと……どうしたの……? 此処は——『どうして——』…え?」

「——どうして皆、私の場所を荒らすの。私は……私は…っ!」

「——ッ!! 衛司、離れろっ!!」

僕が声を掛けたと同時に、少女はどこか荒く声を上げ出し、後ろから聞こえたミラの言葉にすぐさまその場を後退すると、先程まで僕が立っていた場所に雷撃が落ちた。

これは……っ!?



「あの子は一体……？」

「恐らく……精霊だろう」

「分かるの、ミラっ!？」

「…いや…詳しくは分からないが…何故か私の意志がそう言っている気がする」

「んな事言ってる場合じゃねえ……なんか来るぞっ!!」

ミラの言葉に、ジュードは驚いた様子でそう問うが、ミラはそう曖昧に答えると、アルヴィンが声を上げた。

「――私は……私はアアア……ッ!!」

「……やっぱり…そう言うことか…っ!」

少女が声高くそう言うと、大きな雷撃が少女に落ち、次に少女の姿が見えると、僕はそう声を出した。

周りを紫色の円のようなもので包まれた少女——精霊『ヴォルト』の周りに、『赤い煙』が纏われていた——。

## 第二十四話（後書き）

相変わらず、ぐっだぐだだぜっ!!↑↑

……………orz↑↑↑

今回はオリジナル回、しかもやや精霊モンスター出現の特殊設定も書いたり、雷精霊のヴォルトが幼女だったり……………もう俺、心折れそう…………↑

そして登場のエクシリアメンバーっ!!

無論、原作にはエクシリアメンバーは一切出ませんっ!!↑↑↑↑

……………orz↑↑↑↑

ふう…………感想が怖いけど、感想が欲しい複雑な気持ち↑

もう、どうなっちまうんだろ…………↑

今回はヴォルト戦、早く投稿出来るよう頑張ります+

では最後に……………幼女ヴォルトは作者の趣味でs（ry↑↑↑



## 第二十五話（前書き）

自分なりに早く書き終えたので投稿＋

ただ、後半大分無理やり感あったり、ぐだぐだ感あったりしたりする；；

文が長くなってくるとやっぱり難しいなあ……；

※ぐだぐだ感、無理やり感あり↑

※オリジナル技あり↑↑

※荒い戦闘描写あり↑↑

## 第二十五話

「――アアアアアアアーツ!!」

「――散れっ!!」

――ヴォルトの叫びと同時にミラの声上がり、全員がその場を下がると、先程までいた場所に雷撃が落ちる。

雷撃が落ちた場所を確認すると、その威力の為か地面が削れ、雷撃が直に落ちたであろう位置から未だ、バチバチと音を立て小さな電撃が走っていた。

「――オイオイ、精霊ってのはこんなに気性が荒いものなのかよ？」

「ううん、違う。……多分、暴走か何かだと思う」

苦笑を浮かべながらそうばやきつつ武器である大剣と銃を構えるアルヴィンに、ヴォルトの様子を確認しながら拳を構えるジュードが

そう答える。

まさか、あの赤い煙が何なのか情報が少ないのにそこまで絞り込むなんて……ジュードって頭良いのかな……？

「とにかく……今は彼女を倒すしかない。皆……行こうっ！」

僕の声に皆が頷くと、それぞれが武器を構え、僕、ジュード、ヴォイト、アルヴィンがヴォルトに向け走り出し、ミラとロッタが詠唱を開始する。

「ハアアアアッ！ 双・牙・斬ッ！！」

「うおらあっ！ 虎牙破斬ッ！！」

先に僕とヴォイトがヴォルトに向けて、斬り下ろしから斬り上げの『双牙斬』、斬り上げから斬り下ろしの『虎牙破斬』を放つ。

「——アアアアアッ！！」

「くっ！？ ああっ！！」

「ん…だとおっ!？」

——だが、それはヴォルトの周りに張られた紫色の球体状の膜に防がると、同時にヴォルトの周りから電撃が出され僕とヴォイトは弾き飛ばされる。

「それなら…：優等生っ!!！」

「分かったよ、アルヴィンっ!!！」

「「魔神連牙斬ッ!!！」」

僕とヴォイトが弾かれたのを見てアルヴィンとジュードが目を合わせ合図をすると、二人が斬撃と拳撃を同時に放つ。

「——アアアアッ!!！」

「…マジかよッ!？」

「うわぁっ!？」



二人が放ったソレをヴォルトは確認すると、自分の球体状の膜を利用し、高速回転を始め、ソレを避けると同時にそのまま二人に向け電撃を放ちながら走り出し、二人はなんとか避ける。

「なら……これでどう？——レイッ！！」

「大地よ——ロックトライッ！！」

「——ッ！！？」

ロッタとミラがヴォルトの動きと僕達の位置に合わせ、ヴォルトに向け上空から数本の光の柱と、地面から数本の土の槍を出現させる。ヴォルトはそれに対応出来なかったのか直撃する。

「——…しゃあっ！！これなら……っ！」

「…っ！待って、ヴォイト……まだだっ！！」

「——…『ライトニング・シエル』」

ロッタとミラの魔法で僅かに膜が割れたのを見てヴォイトが再び攻

撃を始めようとするが、僕がヴォイトを止めると同時に、ヴォルトの眩きと共に再び膜が再構築された。

「くそ…笑えねえっつのっ!!」

「——アアアアアアッ!!」

「ッ!!皆、急いで奴の周りから離れろっ!!」

再構築されたヴォルトの膜に、アルヴィンが思わず舌打ちと共に言葉を出すも、ヴォルトのより一層高い叫びに、ミラがそう言うのと、ヴォルトが上空へと飛び上がる。

「……ロツタッ!!回復の準備をっ!!」

「え、ええっ!!」

「——来るぞっ!!」

「——アアアアアアアアッ!!」

ヴォルトの行動が分かり、僕はロッタの前に盾になるように立ち、ロッタに指示して退かせると、ミラの声に皆が防御に入る。上空へと上がっていたヴォルトは急速で落ち、そのヴォルトが落ちた位置から無数の雷撃が放たれた。

「ぐ……っ……ううっ！」

「ちいっ……コイツは……痺れるぜ……っ！」

「皆ッ！——回復の光よ、集え！リザレクションッ！！」

ヴォルトから放たれた雷撃をなんとか皆防ぎきったが、やはりそれなりにダメージはもらってしまった。退いていたロッタが駆けつけ、皆の周りに回復陣を張り、ダメージを回復させてくれる。

「……なんとか防ぎきれたか……。礼を言う、ロッタ」

「どういたしまして……って言いたいけど、アレの攻撃に気付けたのはアナタのおかげだから此方こそ礼を言うわ。……それにしても——」

ミラの言葉に苦笑を浮かべてそうロツタは返しながら視線を前方のヴォルトに向ける。それに合わせ僕もヴォルトを見ると、ヴォルトは此方を睨むように見て待ち構えていた。

「……ったく。流石精霊様ってか。…この人数で俺達が劣勢だからな」

「あの膜をなんとか出来りゃいいんだが……再構築が早えからな…」

「……それなら再構築が間に合わない程に攻撃すれば——」

「……どういう事、ジュード？」

アルヴィンとヴォイトの言葉に、ジュードは少し考えるような仕草をするとそう言葉を出し、僕はそれを問い掛けた。

ジュードは皆を見て小さく頷くと手早く説明を始める。

「——至ってシンプルな事だよ。再構築が早いなら、膜を壊す強力な攻撃を連続で出して、再構築のスピードを上回ればいい。ただそれだけだよ」

「成る程、ね……。でもあの膜、それなりに堅いし…ミラとロツタの魔法だけじゃ足りないんじゃない？」

「――なら、俺の出番だな」

ジュードの説明を聞いて僕は納得するも、そう言葉を続け掛けると、ヴォイトとアルヴィンが名乗りを上げた。

「ヴォイト……それにアルヴィン……」

「力技なら俺に任せろ。それでも、とっておきの隠し玉があるんだぜ？」

「俺も同じく、てな。先方はミラとロッタ、中堅に俺とヴォイト……締めはお前等に任せろぜ」

そう言ってニツと笑うヴォイトとアルヴィンに、僕とジュードはミラとロッタを見るも、女子二人も賛成らしく頷いた。

僕とジュードは顔を見合わせお互いに再確認したように頷くと再びヴォルトに向け構え直した。

――さあ、行こうっ!!

「いくぞ、ロッタっ!!」

「任せなさい、ミラっ!!」

「「光の雨よ、ジャツジメントっ!!」」

「——ッ!!!? 『ライトニング・シエル』」

戦闘再開を告げるかの如く、ミラとロッタの両者の魔力を合わせ声と共に『レイ』とはまた違った無数の光の柱をヴォルトへと落とす！  
ヴォルトは攻撃に当たり膜にヒビが入るも、再構築させる。  
だが——

「一気にいくぜっ！目エかっぽじってよく見てな！おたくの最後の光景だっ!!——エクスペンダブルプライドッ!!」

アルヴィンが上空に飛び上がり、再構築されたばかりの膜に銃を連射しヒビを入れそのまま上空で大剣を構えると、自分の周りに炎を纏い、ヴォルトの膜に特攻する！  
再構築されたばかりの膜に再びヒビが入り、それは先程のジャツジメントの際のヒビよりも遥かに大きなものだった。

「——ッ!!!? ラ、『ライトニング・シエル』ッ!!」

「――まだまだいくぜえっ!! うおらあっ!!」

ヴォルトは若干焦りを見せ、再び膜を再構築させるも、それに合わせヴォイトは剣を力一杯投げると、それは勢いが入り膜に突き刺さる。そして――

「――うおおオラオラオラオラオラオラアアッ!!」

――膜に突き刺さったまま剣の柄部に拳の乱打を叩き込む!

そして剣は徐々に膜の奥へと入っていき、剣が突き刺さった箇所のヒビが大きくなる。

「――こいつでえ…決まりだあっ! 剣打・粉碎ッ撃イイイイツ!!」

「――!!!!!!?」

――ヴォイトが最後、突き刺さったままの剣を掴み、そのまま力尽くで振り上げ跳ぶと、膜は音を立てて崩壊した。

膜が破壊された事に驚愕したヴォルトの不意をつき、僕とジュードは一気に距離を詰める!!

「行くよ、ジュードっ!!」

「うん、力はあるべくセーブして……!!」

「双狼砲虎ッ!!」

「——ア、アアアアッ!？」

膜が剥がれ、無防備となったヴォルトの小さな腹部に、二人の両掌から放たれた狼と虎の頭を模した波動が直撃する。

見た目が少女の為つい力のセーブはしてしまうが、直撃位置は腹部。精霊ながらもこれは効いたのか叫びと共に、ヴォルトは吹き飛んだ。

「——…ハア……ハア…これ以上はマジでキツイぞ」

「——…ハア…だな。……もしこれで立ち上がったら…」

「……残念ながら、まだのようだ」



全員が流石にダメージを受けた上、大技の発動で限界が近く息切れをしながらそう言葉を漏らすも、ミラがヴォルトが吹き飛んだ方を見てそう告げた。

僕達が視線をそちらへ向けると――

「――ア…アアアア…！」

――多少のダメージを見せながらも、周りに原因である赤い煙を纏わせながら立ち上がるヴォルトの姿があった。

「……オイオイ…まだやれるのかよ…」

「……衛司、ヴォイト…まさかだけど…アレってあの赤い煙が出ている以上、何度も立ち上がるんじゃないかしら…」

「…マジかよ！？おい、ブラザー…もしそうならあの赤い煙はメリアにしか消せねえ…此処は皆の事も考えて一旦退いた方がいいんじゃないか…？」

ロツタが僕とヴォイトにしか聞こえないようにそう言うと、ヴォイトは小さく舌打ちし、僕にそう言ってきた。  
確かに…僕もそれは考えたけど……。

「――ア……アアアアアアアッ!!」

目前で叫ぶそれを見てその考えは止まる。僕達が此処で退けば、彼女……ヴォルトは赤い煙の呪縛に取り憑かれたままなのだ。だけど……退かなければ方法は何もない。

「……………くそうっ!!」

自分が何もできない不甲斐なさに思わず、木刀を強く握りしめた時だった。

――突然、木刀が光り出した。

「ッ!?!……………これは……………」

「……?……………どうしたの衛司……?」

僕の反応に、小さく首を傾げる皆。まさか……この光が見えていないんだろうか……?

これって一体……………?……………でも……………――

「――いける気がする」

「…衛司…？…ッ！…オイ、衛司…！」

僕の言葉に皆が首を傾げたままだが、僕がゆっくりとヴォルトの方に向けて歩き出すとその表情が変わり出す。

皆が静止をするような声が聞こえるが、僕はそれを聞かず、ヴォルトに向け歩き続け…ヴォルトのほぼ真正面まで歩み寄った。

「…ア…アアアアッ…！」

「…大丈夫…今、助けるっ…！」

未だ吠えるように声を出すヴォルト。僕はそれに向けゆっくりと木刀を振り上げ…ただ《助けたい》と感情を込めて…木刀をヴォルトに振り下ろした。

「…ッ…あれ…此処は…？」

…目が覚めていく感覚に、ゆっくりと目を開くと知らない天井だ

った。

……あれ……？

「――…あ、目が覚めたみたいね」

「――おそようさん、ブラザー」

周りを見回すと、どうやら僕はベッドに寝ているらしく近くの椅子に腰掛けたロットとヴォイトの姿があった。

…そうだ………っ！！

「僕は確かあの洞窟で……二人共、ジュード達は！？あの精霊は……！？」

「ちよっ、まずは落ち着きなさいバカッ！！」

勢いよくつい顔をそちらに近付けた僕に、ロットは何故か顔を赤くしてロットで頭を叩いてきた。うん、痛い。  
ヴォイトはそうのようにケラケラと笑ってた。

「まあ、落ち着いたみてえだな。とりあえず説明だが……まず皆無事だ、安心しろ」

「――…そっか、良かった。……それであの精霊は…？」

「……はつきり言うとはよく分からないわ。…アンタがああ精霊に木刀を『精霊に当たらないように』振り下ろした後、いきなりアンタが倒れて……それでその精霊が少しアンタの事見てたけどいきなり消えたわ…。でも、赤い煙が消えてて正気に戻ってたわ」

「……そっか……」

ロッタの説明を聞いて僕は安心したように息を吐く。良かった……助けられたんだ。

「一応依頼の方は村長に上手く言つといたけど…アンタがぶっ倒れてたから一日村の宿屋の部屋借りる事になったんだけど――結局アンタ、あの赤い煙をどうやって消したのよ？」

「……自分でもよく分からないんだ。でも、木刀が光り出したて……それでなんか、行けるっ！って気がして…」

「…木刀が…？でも、俺達にはそれは見えなかったが……確かその木刀って世界樹から出来てんだっけ……？」

ロッタの質問に思い出しながらそう返すと、ヴォイトはそう言いながら合わせて聞いてきたので、僕は頷いて応える。

「……世界樹って言うてディセンダー…そしてその木刀は世界樹から出来たもの…まさかディセンダーと同じ力がある、とか……？」

「……分からない。詳しくは世界樹のみぞ知る、てことかな……？」

——結局、深く分からず仕舞いで話は終了し、僕達は宿屋で休んだ翌日、ジュード達に挨拶と礼をしてバンエルティア号へと戻る事になった。

……ただ…やけになんかが自分の体の中にある感じと、アルヴィンがよくバンエルティア号が停船している場所を聞いてきたのが気になっている。

## 第二十五話（後書き）

相変わらずぐっだぐだだぜ☆↑↑

……O R Z↑↑

本当……オリジナル話ってキツいなあ……↑↑

後、頑張ってオリジナル技を出してみました☆↑  
うん、技名が厨二チックなのは作者の所為です↑↑

一応、説明↑

※剣打・粉碎撃  
ケンダ・フンサイゲキ

ヴォイトの隠し秘奥義↑

主にガードが堅い相手などに使用。敵に対し、武器である剣をぶん投げ命中、突き刺した後、その突き刺さった剣の柄部に拳を乱打させ、最後に剣を力尽くで掴み飛び上がるといった荒技。技が技なので人間相手には使用しない↑

今回はヴォルトの膜なのでギリギリセーフ↑↑

※双狼砲虎  
ソウロウホウコ

ジュードと衛司の共鳴術技的な物↑

ジュードが狼のような波動、衛司が虎のような波動をほぼ同時に、相手の同じ部位に叩き込む。

ダウン判定ほぼ確実技↑↑

ヴォイトが荒いのは気にしたら負けです↑↑↑

さてさて次回は……深くは考えてませんが軽く暴走します、はい↑↑↑

ではでは、よければまた次回に+



## 第二十六話（前書き）

何とか完成したので投稿…+

ただ今回は…なんともいえない完成度….;;

うう….;文才が欲しい….;;

※展開が無理やり感あり↑

※相変わらず文が荒い↑↑

## 第二十六話

「——ん……ん——っ」

ゆっくりと重いまぶたを覚まししながら、上半身を起こし、伸びをする。

うーん……よく寝たあ。

如何せん疲れていたのか大分寝てしまっていたようだ。

なんでこんなに疲れていたのかというと……昨日、依頼から帰ってくると、そこにはこの『ルミナシア』とは別の世界からやってきたというカイル、ロニ、リアラ、ジューダスの『ディステイニー2』メンバーが居たからだ。なんでも……セルシウス話を聞き、整理したリタが、ハロルドと協力し、発明した『異次元チューニング装置』で、異次元にあるというヒトの祖の遺跡『ヴェラトローパ』を呼び込むもうとしたらしいのだが……それに失敗し、カイル達を呼び込んでしまったとか。

それで昨日はそのまま来たばかりで泊まれる場所がないカイル達のために、元の世界に戻るまでの間このアドリビトムの一員にしてバネルティア号の一室を使わせる事となり、その一室の掃除を手伝う事となったのだった。

「――…お腹減ったなあ――…ご飯食べにいかうか」

大分寝たいのか起きた時から来ている食欲に眩き、とりあえず立ち上がろうとして……気付いた。

「――……ん……？」

改めてベッドを見直すと……僕の隣の毛布がやけに『膨らんでいた』。

「……何だろう」

とりあえず、僕は恐る恐ると毛布を掴み、ゆっくりと持ち上げて――

「――すう……」

――ゆっくりと下ろした。

……よし、落ち着け、冷静になれ、クールなれ乾衛司。どうして、何故、僕のベッドの毛布の僕の隣で、幼女が、一糸纏わぬ状態で眠

っているんだ？あれか、僕は昨日のうちに、大人の階段を上ってしまったのか？いや、それにしても相手が幼女ってそれは絶対に上っちゃ不味い階段だろ、ノクターン送りだろ。いや、落ち着くんだ僕、乾衛司。今の僕に服の乱れ等は一切ないし、特有のそういう臭い等も一切ない。イコールあれだ、これは夢だ、幻覚だ、一般の思春期男子が共通して見てしまう一種の幻なんだ。そうだ、そうに違いない。その証拠に今度こそ毛布を捲れば何も――

「――ん……すう……すう……」

――――ゆっくりと捲った毛布を戻すことにする。

「……ふう……」

そしてゆっくりと二、三回程深呼吸すると――

「あばばばばばばΣ□@うっ◆っ!!!？」

――自分でもよくわからない奇声を発しながらベッドから飛び退いた。

うん、大混乱してます。

「——ん……んっ……?」

そんな僕の奇声に幼女（改めて今気付いたけど色々間違えてた）：  
…少女は目が覚めたのかゆっくりとベッドから体を起こした。お願いだから前を隠してください……って、あれ……?

「……もしかして…君は……あの時の……?」

やや混乱しながらも改めて少女を見直すと……一糸纏わぬ状態だから上手く分からなかったが、その頬にある雷を描いたような独特の模様を見て思い出した。

彼女はあのリーゼ村で対峙した……雷の精霊『ヴォルト』だ。

彼女…ヴォルトは此方を確認したのかベッドの上でゆっくりと正座をすると……何故か僕に向けて頭を下げてきた。

「——…おはよう御座います、主<sup>あるじ</sup>」

「……へ……? あの……主<sup>あるじ</sup>って——」

「——衛司ーっ!?! 大声が聞こえたんだけどなに……か……」

——この時ほど、僕は自分の部屋に鍵を閉めることをしない事を後悔する事はない。

さて……今僕を心配して来てくれたんであろうカノンノに僕達はどう見えるんだろう。

まあ……言わずとも分かるよね…？

「——あの、カノンノさん…これには色々訳がありました…」

「……うん……わかってるよ……」

「……ならせめてその膝から獅子を放ち掛けない闘気をおさめて下さい。と、とにかく話し合おう」

「……うん、そうだね、話し合いは大切だよ。だから——O☆H A  
☆N A ☆S I ☆しよう？」

——この日、彼女の膝は凶器だと、文字通り身を持って知りました。

「――えっと……つまり、どういうこと……?」

目の前にいる人物、アンジュは説明を聞くとそう口を開いた。

今彼女の目の前では……右目付近に青あざを作った状態で苦笑いをしている僕と、僕のその右隣で不機嫌そうな表情を浮かべているカノンと、僕の左隣で小さく小首を傾げる……ロックスさんが持ってきた俗に言うゴスロリ服を身に纏った雷精霊『ヴォルト』と、その隣で笑みを浮かべている氷精霊『セルシウス』が居た。  
うん、何だろうこのカオス。

とりあえず、苦笑を浮かべているアンジュに、再度説明しようとセルシウスが口を開いた。

「……とりあえず、この状況であるから私が変わりに簡単に説明すると……この少女、雷を司る精霊『ヴォルト』が衛司に助けられた時、どうにも彼女が衛司の事を気に入ったらしく……衛司の中に文字通り入って、今の今まで衛司の使役となる繋がり《リンク》を作っていて、それがちょうど昨日、衛司が眠っている間に終わり、今朝のような事になっていたらしい」

「……簡単に説明してくれてありがとう、セルシウス。とりあえず理解はしてきたけど……衛司はまたなのね……」

「…理由はよく分からないけどその呆れたような表情と溜め息は止めてください。…でも『使役』って事は…僕もリヒターさんみたいに、彼女…ヴォルトを呼び出したり、ヴォルトの力を使用出来たりするの…?」

アンジュの表情に思わずその言葉を出した後、『使役』という単語に、まず先に浮かんだりヒターさんとセルシウスの事を思い出して聞くとヴォルトは小さく頷いた。

「はい、主。…ですが、主の場合は多少、肉体の『情報』が他者とは『違う』為、色々と制限が掛かってしまいますが…」

ヴォルトの言葉に僕は小さく頷く。

肉体の情報…というのは『ドキュメント』の事だろう。つまり、ヴォルトも僕のドキュメントの状態の事を知っていて…わざわざ言葉を分かりにくく濁してくれたんだろう。

そう思うと僕はそっと、ヴォルトの頭を撫でた。

「ううん、それだけでも…僕に力を貸してくれてありがとう。これからよろしくね…?」

「――…主のお望みとならば」



僕に頭を撫でられ、ヴォルトは少し驚いたような様子を見せた後、どこか嬉しげな微笑を見せそう言うのと、突如小さな光へと変わり僕の胸元から体の中へと消えていった。

セルシウスはその一部始終に驚いたような表情をしていた。

「…これは珍しいな…使役された精霊が、自由である外よりも使役者の中にいる事を望むとは…どうやら、相当気に入られているようだな」

「そういうものなのかな…でも自分の中に別の誰かが居るって、不思議な感じだなあ……。…あとカノンノ…さん…誤解って分かったんですから、そろそろ機嫌を直して頂けませんか…？」

「…別に機嫌なんか悪くないもん」

セルシウスの言葉に苦笑を浮かべてそう言い、ヴォルトが入っていた自分の体を見ながらそう呟く。その後、いまだに機嫌が悪そうなカノンノの方を見て言葉を出す、カノンノは顔を逸らしてそう答えてきた。

うー…どうしよう…。

「……全く、衛司は相変わらずみたいね。……あ、そうそう、衛司にお客さんよ？」

「え……僕に……？」

しばらく呆れた様子のままでいたアンジュが思い出したように出した言葉に、僕は思わず首を傾げてしまう。

僕にお客って……依頼でなんか間違いでもしてしまっただろうか……？

そう考えていると扉が開く音が聞こえ、そちらを見てみると――

「――よう。久しぶりだなあ、優等生二号君」

「――アルヴィンっ!？」

――そう、扉から出て来たのは以前、リーゼ村でヴォルトと対峙した際に一緒に戦ってくれたメンバーの一人である、リーゼ村で雇われている傭兵のアルヴィンであった。

というか『優等生二号君』で……。

「どうしてアルヴィンが……」

「ん、まあ当然の反応だよな。話せば長くなるんだが……衛司達があの依頼を終わらせて帰って数日は洞窟は大人しくなったんだが……やっぱそこら辺、村長が不安だよ。んで、結局どうするかって話になった時、おたく等アドリビトムが『星晶』を消費せずに安心し

て暮らせる村を作ってるって噂を聞いた奴が居てな。それで…良けりやリーゼ村の村人達をその作ってる村に移住させてくれないかって話をしに来たわけ。勿論、村人達全員で出来る限りの手伝いもする事も前提だぜ？」

アルヴィンの話を聞き、その場の全員が驚いた。『星晶』を消費せずに安心して暮らせる村…『オルタ・ヴィレッジ』を確かに僕達は一つの可能性として作っている訳だが…まさかこんな展開で一気に手伝う人員が増えてくれる事は意外だった。

「ほ、本当なの…アルヴィン…？」

「おう。ちゃんと、村長達の話の結果でもあるんだぜ？…で、どうだ、リーダーさん？」

「…確かに私達としては嬉しい話だし、困ってる人達を放っておけないもの。分かりました、これからよろしくお願いしますね」

アンジュの言葉に、アルヴィンはニツと笑うと二人は手を出し、協力することを誓うように握手をした。

その様子に見ていたカノンやセルシウスは嬉しげに表情を浮かべる。多分、僕も同じようになってるだろう。

良かった…ただ、これからはあのリーゼ村からこの船に村人を誘導させるのが大変そうだけど。

「んじゃ……これからは俺や後でミラや優等生君も村の精鋭連れてこのギルドで働かさせてもらうことになるからな。改めてよろしく頼むぜ、優等生二号君？」

「うん。これから宜しくね、アルヴィンっ！」

僕とアルヴィンはそう言って笑い、誓うように握手をした。

-----

オマケ―フェイスチャット『リヒターの繋がり《リンク》』――  
出演者…衛司、エミル、リヒター、セルシウス

「……うーん」

「…どうしたの、衛司？」

「いや…今思えば僕とヴォルトの繋がりを作るのって、結構期間が掛かったけど…なんか他に時間を掛けずに効率良く精霊と繋がりを作る方法ってあったりするのかなー、って思ってる」

「あー…確かにちよつと気になるね」

「――衛司とヴォルトの方法以外でヒトと精霊が繋がりを作る方法か……色々あるぞ？」

「え……本当なの、セルシウス…？」

「ああ。主に衛司とヴォルトが行った繋がりには『情報使役』、特殊な儀式によって自ら精霊を呼び出し契約する『儀式使役』、使役者と精霊が同じような目的を果たす為にだけに契約する『利害使役』……後はその……言いにくいのだが……」

「「……？」」

「……『直接使役』というのがあって……別名は『――使役』……その内容が――」

「――うわぁ……／＼／＼」

「――僕……『情報使役』で良かった……。…因み、リヒターさんとセルシウスはどんな繋がりで使役を…？」

「……（ニヤッ）。…私とリヒターは『——使役』だ」

「「——えっ？」」

「……ああ、あの時のリヒターは思い出すだけで心地良い。なにせあのリヒターが——」

「——おい。何の話か気になって聞いていればいらん嘘を——」

「リヒターさん……以外です」

「——なっ！？待て、私は違っ！」

「リヒターさん……どん引きです」

「——ッ！？ち、違うっ！！私は違うんだアアアッ！！（ダッ）」

「——…全く、ヒトとは面白いものだ（ニヤニヤ）」



## 第二十六話（後書き）

はい、相変わらずぐっだぐだです↑↑

とりあえず今回はヴォルトの使役＋エクシリアメンバー参戦フラグでした＋

ただ無理やり感がハンパない…；  
やっぱオリジナル展開って難しいなあ…；；

とりあえず言い訳会↑

まず、衛司とヴォルトのベッドシーン（性的な意味では無い↑↑）  
ですが…：うん、色々と血迷った結果だと思って下さい↑↑

次にカノンノの膝凶器説↑

これはマイソロ3をプレイしてる人なら分かりそうですが…：まあ、  
カノンノの『獅子戦孔』の事です↑↑

良くイメージ出来ない方はそうですね…：華奢な少女が、身の丈三  
倍以上はあるデカブツを跳び膝蹴りでぶっ飛ばしてる、とイメージ  
してください↑↑

次にアルヴィン達とリーゼ村の事です…：かなり無理やりだったか  
もです…；

これくらいでないと正直、エクシリアメンバーを本編に参戦出来そ



うになかった自分の頭の無さの結果です；；

最後にリヒターさんの件は……不意に思いついてしまったもんです  
ww↑

使役方法について今回出したのはあくまで自分のイメージで作った  
ものなので、原作では色々違うのがあります。

さて、次回はようやく原作に入らせていけると思います＋  
次回も早く更新出来るよう、頑張ります＋

## 第一回キャラクター人気投票結果＋キャラクター設定2（前書き）

今回は第一回キャラクター人気投票の結果と、キャラクター設定その2です＋

まずは、キャラクター人気投票結果なんですが……投票数がアレでしたので、第一位から第三位までの発表です…。

第一位……メリア

第二位……カノンノ

第三位……リタ

… … …

最下位……乾 衛司

——衛司については……察してあげてください↑

きつと第二回もある筈だから、それに賭けよう、衛司君↑↑

ともあれ、皆様投票ありがとうございました+

それでは、キャラクター設定にどうぞ……+

## 第一回キャラクター人気投票結果＋キャラクター設定2

名前…乾 イヌイ エイジ 衛司

性別…男

年齢…17歳

一人称…僕

現在服装…頭以外『兵士コート』一式。

身長…166cm

職業…学生／剣士

武器…世界樹の木刀

称号…『イレギュラー』、『ヴォルト使役者』、『旗男↑』

詳細…

本作の主人公。

『ルミナシア』の世界に来た当初はオタオタにフルボッコされる程弱かったが、今では仲間達との鍛錬やヴォルトの使役のおかげもあってクレス達と一騎打ちでは良い勝負を出きるようになった（まだ勝てる訳ではない）。最近ではその事もあってクレス達とは師弟関係ではなく互いに競い合う関係に変わって来た為、名前の後に『師匠』はつける事は無くすようクレス達に進められ、師匠と呼ぶことは無くなった（ただクラトスには師匠付け呼びが定着）。

現在はクレス達から教わった剣術、アスベルから教わった抜刀術、ヴォルトとの契約によって使用出来るようになった雷系魔法を組み合わせて戦う。

恋愛方面に関してはギャルゲの主人公並みの鈍さ、天然さを発揮しており、あくまで自分的には、自分に恋愛的な意味で好意を持つ人は居ないと考えている。

ただ、最近とはある人物に不思議な気持ちを抱いていたり……？  
密かに自分の背が低い事を気にしているとか、していないとか。

名前…メリア

性別…女

年齢…不明（外見年齢は15、6歳）身長…157cm一人称…私  
現在服装…『朱雀の衣』装備一式。

職業…ディセンドー／忍者

称号…『ディセンドー』、『邪を払う者』、『ヤン☆デレ↑』

詳細…

衛司とカノンノの前に光に包まれて現れた記憶喪失の謎の少女。その正体は『ディセンドー』であり、『願いを叶える存在』である赤い煙、そしてラザリスに対する唯一の存在であった。

以前より比べて大分口数が増えてきたが、あまり自ら進んで喋る事はない。

今でも衛司、カノンノ両方に懐いているが、どちらかと言えば衛司の方にべったりである。

因みに本人は恋愛感情については全く無知であり、衛司に対する好意は恋愛寄りではあるが、本人にとっては『分からないけど好きだから好き』、という感じである。

——最近、色々あってヤンデレ属性が印象付きだした今日この頃。  
本人にその気は無い………筈……↑

名前…ヴォルト

性別…女

年齢…不明（外見年齢は9、10歳程）

容姿…少し長めの黒髪で青めの瞳、頬に雷を模したような模様がある。服装はゴスロリ服だったりワンピースだったりする

一人称…私

身長…132cm

職業…精霊／魔法使い

称号…『雷精霊』、『イレギュラーに仕えるモノ』、『幼女精霊↑』

詳細…

雷を司る、精霊の中でも上位に入る精霊。元々はコンフェイト大森林にあるリーゼ村奥の洞窟で一人静かに暮らしていたが、周りのコンフェイト大森林の星晶がウリズン帝国に収集されたのが原因で洞窟内に現れ出した赤い煙に蝕まれ暴走してしまった。その後、依頼でやってきた衛司達と対峙、敗北し、衛司の木刀の力によって赤い煙から解放される。その事から衛司の事を気に入り、衛司と契約を結び、衛司の使役精霊となった。

戦闘においては自分の周りに、雷を纏った球体状の膜をはり、それを利用した攻撃や雷系魔法を使用する。

基本はあまりそうそう表に出ることはなく、使役者である衛司の肉体内におり、衛司のサポートをしていたりする。

服装についてはロックスに薦められた服だとか…↑

―原作未参戦キャラクター―

名前…ジュード・マティス

性別…男

年齢…15歳

登場作品…テイルズオブエクシリア

詳細…

リーゼ村で暮らしていた少年。

年齢や外見とは裏腹に強力な格闘技を扱い戦っており、リーゼ村では対魔物討伐等によく参加させられていた。

本人は医者を目指しており、その方面や知識に関してははっきりいって良いと言える実力である。

彼の格闘技はあくまで本人曰わく『護身術』らしいが、はっきりいって周りから見れば『護身術』とかそんなレベルじゃないという↑

彼ともう一人、彼と同じ流派の者がいて、その二人の師匠である存在の人物はかなり強いらしく、なんでもたった一人で軍が手こずっていた盗賊を壊滅に追いやったとか…。

名前…ミラⅡマクスウェル

性別…女

年齢…不明（外見年齢は20歳）

登場作品…テイルズオブエクシリア

詳細…

リーゼ村にて、衛司達の依頼を共に手伝った一人。なんでも記憶喪失らしく、村の近くで倒れていた所をジュードが見つけ、助けたとか。リーゼ村にいた間は、助けてもらった事もあり、ジュードの家で居候をしていた。

武器は剣を使い、一部の魔法を詠唱無しで剣を利用しながら発動出来る《魔技》を扱う。

名前以外の記憶はないらしいが、セルシウスやヴォルトといった精霊達を見ていると、どこか懐かしい気持ちになるらしい。

一般常識もある程度はあるらしいが、やや天然(?)だったりする。

名前…アルヴィン

性別…男

年齢…26歳

登場作品…テイルズオブエクシリア

詳細…

リーゼ村にて、衛司達の依頼を共に手伝った一人。リーゼ村で雇われていた傭兵だが、その他に關しての事はほとんど不明。その割にジュードとは結構仲がいいらしい。

武器である大剣と銃を使い、敵のガードをいともたやすく砕く力を持つ。

傭兵としての腕前は上々だが、同業者の一部では悪い噂もあるとか、



ないとか……。

## 第二十七話（前書き）

なんとか完成したので投稿＋

ただ……今回もやや無理やりかなー……?;

※やや無理やり感あり? ↑

※原作未参戦キャラクター登場↑↑

※中途半端切りー↑↑↑↑

## 第二十七話

「……衛司っ!!」

「——ジュードっ!!? ……久しぶりだね」

——ホールにて、アンジュとリーゼ村の人達を『オルタ・ビレッジ』に無事全員送り終えた事の話をしていると、突然開いた扉の音と、僕を呼ぶ久しぶりな声にそちらを見ると、以前リーゼ村で共に戦ったジュードが立っていた。

その後ろにはその時に一緒に戦ったミラと、初めてみる少女が二人程いた。一人の少女は多分、ジュードと同じ年くらいの子で、もう一人は大体小学生くらいの子で、肩に何かわからないけど……ぬいぐるみ?、がのつてた。

ジュードが此方に歩み寄ってきたのをみると、僕とジュードは合わせたようにハイタッチをした。

「うん、久しぶり。それと…リーゼ村の人達を受け入れてくれてありがとう」

「うん、僕達は当然の事をしたまでだし…リーゼ村の人達についての事は受け入れてくれたのはアンジュのおかげでもあるから、お礼はアンジュに頼むよ。…それで、あの二人は…？」

ジュードの言葉に小さな笑ってそう答えると、僕は視線を先程から気になっていた後ろの二人に向けてそうジュードに問う。

ジュードは僕の問いに一旦視線を二人に向けた後、僕に向き直り小さく苦笑を浮かんで口を開いた。

「えっと…二人はアルヴィンが言ってたと思うけど…僕達と一緒にこのギルドに参加するのに来てくれて…名前は――」

「――ジュードっ！別に自己紹介なら自分で出来るよ…。あ、私はレイア。レイア・ロランドです！よろしくっ！！」

「――え…エリーゼ・ルタス…です…」

「――ティポだよーっ！！」

「うおわぁっ!？」

二人：レイアが元気良く、エリーゼがもじもじしながら自己紹介をし、自己紹介し返そうとした瞬間、エリーゼの肩に乗っていたぬいぐるみ？が大きく口を開いて自己紹介をしてき、思わずそんな声を出して飛び退いてしまった。

近くを見ると先程まで此方を笑顔で見守っていたアンジュすらも驚いたような表情をしていた。

そんな状況にジュードが苦笑いを浮かべながら口を開いた。

「はは……やっぱり初めてだとそういう反応しちゃうよね……」

「えっと……聞きにくいけど……コレって一体……?」

「——てい、ティポはティポ……です!!」

「そだよー。それで、ジュード君や、ミラ君のともだちー」

思わずジュードに苦笑いをし返しながら問うと、ジュードよりも先

にもじもじとしていたエリーゼがそう声を出し、ぬいぐるみ?…ティポが僕の前を飛び回ってきてそう言ってきた。

「えっと…いや、そういう意味じゃなくて…」

「うーん…エリーゼとティポが言ってる事は、ある意味間違いじゃないよ。…僕達も、ティポがなんなのかはよく分からないから……。でも、エリーゼの実力はミラのお墨付きだから大丈夫だよ」

二人して苦笑いを浮かべたままそう言っていると、エリーゼ、ティポ、レイア、ミラが微笑を浮かべていく。

「とりあえず……これからよろしく、みんな」

そんな皆に向け、僕はなるべく微笑んでいうと、皆はそれに対して頷いてくれた。

——こうして、改めてリーゼ村のメンバーは、アドリビトムへと加入した。

「――……カダイフ砂漠に……？」

「――ええ、アナタにも手伝ってもらいたいの」

僕の問いに、アンジュは頷いて答えてきた。

話はこうだ。

――ヘーゼル村の一定の人達がウリズン帝国に、遠くにある星晶採掘地へと連行され、強制労働を強いられているらしい。

そしてその村人達を解放する為にユージーンとヴェイグは連行された場所へ、アニーとティトレイはヘーゼル村に残っている人達をリ―ゼ村の人達同様、建設中のオルタ・ビレッジに移住させる為、船を出た。

そして…二手とも、オルタ・ビレッジに移動する為にはカダイフ砂漠を越えなければならない為、カダイフ砂漠の周辺の魔物の討伐依頼を頼まれてしまった。

「一応他の所にも人員を送らないといけないからメンバーはいつでもどおり四人になるんだけど……三人は決まってるから後は一人なのよ」

「うーん……分かった、僕もそっちを手伝うよ。こんな事、放って

はおけないしね…」

「そう…：…ありがとうね。ただ、気をつけてね。ウリズン帝国が…  
：『サレ』が妨害してこないとは限らないから」

『サレ』…：『リバース』に登場した、ヴェイグのライバル的存在の…ある意味、色々と歪んでる人物。以前、エステルを攫おうとしたウリズン帝国の人物もこのサレだったらしいけど…：確かに『リバース』上のあの性格からすると、サレが妨害してこないとは限らないだろう。

「――分かった。十分用心しておくよ」

「ええ、…気をつけてね」

アンジュの言葉に頷いて、僕は準備をする為、一旦部屋に戻った。



『グモオオオオオオーッ!!』

「——ッ、魔・神・剣・双牙アッ!!」

——カダイフ砂漠、以前来たときのオアシスルートとは別のルートにて、猪のような魔物『エレノッサス』と、僕は戦闘を行っていた。

『突進』。ただ単純ながら、当たれば強烈なダメージをいただくそれを避け、僕はエレノッサスに向け斬撃を二つ飛ばす。

『グモッ!? グモモオオッ!!』

「くそ……なら……っ!!」

放った二つの斬撃はエレノッサスに直撃するが、エレノッサスは怯む事無く再度こちらに向けて突進してくる。

僕は小さく舌打ちしてしまうが、直ぐに次にどうするかを判断し突進してくるエレノッサスに木刀を持つ右手とは別の左手を向ける。  
大丈夫だ……いけるっ!!

「雷よ…爆発しろ…! ——『ライティングボム』っ!!」

『グモオオオオオオーッ!?!』

僕の言葉と同時に向けた左手から数個の雷の玉が現れ、突進してきたエレノッサスがそれに触れた瞬間、雷の玉の一つが爆発を起こし、その一つから更に一つ一つと雷の玉が連鎖爆発を起こし、エレノッサスにダメージを与えて吹き飛ばす。

吹き飛んだエレノッサスは、それが効いたのか奇声を上げて動かなくなった。

「ふう……なんとかあったか……」

「――へえー……雷系魔法か……随分、様になってんじゃねーか」

エレノッサスが動かなくなったを確認して一息ついていると、先程まで別のモンスターと戦っていた今回の同行メンバー……ユーリ、すず、メリアが此方に向かって歩み寄りながらそう言ってきた。

「うん……ヴォルトのおかげでね。始めは上手くはいかなかったけど、なれてきたら意外に上手く出来てきてね」

「なるほどねえ……。精霊を使役したら、その精霊の魔法を使えるようになる、とは噂には聞いてたが……マジだったんだなあ」

「慣れてきた…それだけで先程の威力とは…。衛司さんは凄いんですね」

「はは…僕は凄くないよ。ただ、ヴォルトの魔力が凄いんだよ」

僕の言葉に、どこか楽しげな笑みを浮かべて言うユーリと、驚いたような様子を見せるすず。

確かにヴォルトの魔法は凄いけど…ただその威力故に、体力消費がハンパない。先程の『ライトニングボム』一発だけで今軽く体が怠くなっているのがそれである。

一応…今僕の体の中にいるヴォルトがサポートして幾分かの疲労を減してはくれているんだけど…もしヴォルトがいなかった時に発動する所を考えるとちよつとゾツとしてしまう。

因みに一応、この雷系統は剣技にも利用出来てそっちの方は魔法に比べると全然疲労感は来ない。うーん…剣術の方が慣れてるから、かな…？

「（ともあれ……ありがとう、ヴォルト）」

『（――主の為ならば――）』

心の中でヴォルトに感謝すると、頭の中に響くようにヴォルトの声

が聞こえた。うん、これも当初は驚いたけど、慣れれば意外と楽しかったりする。

「……衛司……はい……」

「ん……ありがとう、メリア」

「……………♪」

不意に、僕の様子に気付いたのかこのメンバーの中でアイテム袋を持っているメリアが僕にミックスグミを渡してきた。

グミを受け取り、食べると不思議なまでに体力や疲労感が回復してきた。

僕は小さく笑ってメリアの頭を撫でると、メリアは嬉しげに表情を緩めた。うん、普通に可愛い。

こうしてみるとメリアって、兄思いな妹…かな？　こういう妹がいればなんかシスコンになっちゃいそうだけど。

「——それにしても…改めて思えばこの砂漠…一般人にはかなりきついだろうね」

「まあな…この環境じゃあ、年齢とか男も女も関係なしに厳しい砂

漠越えになるだろうな。…それに加えてさっきみてえに魔物もわんさか出やがる。命懸けもいとこだ」

「ここまでの事態を引き起こしたのは、帝国です」

砂漠を見回して出した僕達の言葉に、さすが顔を俯かせてそう言葉を出した。それを見てユーリが小さく溜め息を吐いて口を開く。

「オレが、ガルバンゾのギルドにいた時は、オレの知る世界は、住んでた場所だけだったな。帝国の事は知ってたが、よその国や、世界の動きなんざまるで見えていなかった。…本当、何でも見渡せる自由のギルドだな。アドリビトムってのは」

「うん。何でも見渡せるからこそ気付くことが出来て、自由だからこそできることがある。だからこそ…今僕達は他の人達に出来ない事をして、人を助けなきゃいけないんだろうな」

「ああ、全くだ。ディセンダーのメリアだけじゃねえ。イレギュラーの衛司だけでもねえ。――俺達、アドリビトムの皆でな」

僕の言葉に、ユーリはニツと笑うと僕とメリアの頭を少し乱暴に撫でてきた。何だか変な感じだけど…嫌な感じではなくむしろ心地良

い感じだった。

僕達はそのまま少し笑うと、カダイフ砂漠の奥へと進んだ。

――――

――あの後、やけに大きめな蟻地獄に落ち掛けたり、サンドワームの群れと遭遇したりしたけど、なんとか砂漠の抜け道となる道の前まで来ることができたんだけど……

『キシヤキシヤキシヤシャシャーツ!!』

「――……マジ？」

「ああ…現実逃避してえのは分かるが、マジだな」

――目の前の現状に思わず出してしまった僕の言葉に、ユーリがそういう言葉を出した。

今、僕達の目の前には…抜け道への道を、一見岩のようにも見える甲殻と、大きなドラゴン系モンスターの頭の骨のような尻尾を持つ

た巨大なサソリ型の魔物……『ティランピオン』が塞ぐように立っていた。

「これがティランピオン……これを倒せば、村の人達が安心して砂漠を通れるんですね」

「ああ……んじゃま、油断せずに行きますかっ!!」

「あー、もうっ……行くよメリア、ヴォルトっ!!」

「……ん……っ!!」

『（——了解です、主——）』

僕達はそれぞれ武器を構え、ティランピオンとの戦闘を開始した。  
——ただ、何者かが僕達を傍観している事には気付かず——

## 第二十七話（後書き）

さあ、皆様と一緒に――

相変わらずぐっだぐだだZ E ☆ ↑ ↑

はい、サーセン O R Z ↑

てなわけで原作未参戦キャラクターのエクシリアメンバーまたしても登場です ↑

エリーゼたんハアハア ↑ ↑ ↑

失礼、むしろしゃしてやっちゃいました ↑ ↑

そしてようやく名前登場したサレ様 W W ↑

彼は前半空気でしたが、此处からちよくちよく登場しちゃう予定です ↑

そして……彼にはある意味原作のマイソロ3以上に悪役として磨きが掛かり、歪んでいて頂く予定なので悪役サレ様ファンはこれからのサレ様に乞うご期待 W W ↑ ↑ ↑



次回はティランピオン戦＋ちょっとサレ様伏線の予定です＋↑

そして次回……衛司君がエクシリアの敵である、あのキャラクター  
が使ったあの技を……っ！？↑↑↑↑

## 第二十八話（前書き）

今回は意外に早く出来たので、更新+

ただ、ねえ……？↑↑

※相変わらずのぐだぐだ感↑

※荒い戦闘描写↑↑

※ラストは第三者視点で宜しく願います↑↑↑↑

## 第二十八話

『——キシヤシヤシヤシヤシャーッ!!!』

「——うわおうっ!?!」

「——きかねえなっとなっ!」

——目前で巨大な尻尾を振り回して暴れるティランピオンの攻撃をなんとか避け続ける。

「っ……えいっ!!!」

「……苦無閃……っ!」

ティランピオンの攻撃を避けたメリアとすずは、距離を置くと二人同時にティランピオンに向けて苦無を投擲する。それを見て僕とユーリもアイコンタクトを取り、木刀と剣を振るう。

「これで…魔・神・剣ッ!!」

「おらよ、蒼破刃っ!!」

ティランピオンに向け、二人で斬撃を放つ。左右からの遠距離攻撃…これなら当たる筈…。だが…

『キシヤシャアアッ!!』

ティランピオンは尻尾を振って苦無を弾き、斬撃を振った尻尾を利用し、勢いよく地面に叩き付け衝撃波を起こして相殺した。

「うわぁ…アレって本当に魔物…? 知能高いなあ…」

「言ってる場合じゃねえ、来るぞっ!!」

『キシヤアアアッ!!』

ユーリの声と同時に、ティランピオンは此方に尻尾の先端にある巨大な竜の頭の骨のような物を向けると、その頭の骨の口が開き、中から炎弾を飛ばしてきた。

僕はそれを避けつつティランピオンへと間合いを詰めていく。しかし……

『キシヤキシヤキシヤシャーッ!!』

「ちいっ! コイツまた……っ!」

「っ……面倒……くさい……っ」

此方が間合いを詰めるとティランピオンは尻尾の動きを変え、尻尾を振り回し再び僕達を吹き飛ばす。

そう…先程からこれが問題なのだ。

ティランピオンの最大の武器である、あの巨大な尻尾。遠くにいれば炎弾を飛ばしてき、近付けば振り回され距離を置かれる。

先程からこの連続によって、ティランピオンに一切攻撃が出来ないのだ。遠距離から攻撃しても、先程の苦無や斬撃のように無効化されてしまう。

ティランピオンのあの尻尾をどうにかするか、動きを止めないと正直勝算は薄いだろう。

『(――主、『あの技』は……?――)』

「……っ……駄目だ。確かにあればアイツを効率的に倒す手段の一つだけど……倒せる時に使わないと意味がない……っ！」

「……衛司さん、何か策でも……？」

「策……じゃなくて技なんだけど……その技、威力と同時に反動も普通じゃないから絶対に倒せる時に使わないと……使いどころを間違えたら一発で僕はおしまいになっちゃうから……」

ティランピオンの攻撃を避けながら、頭の中に響いたヴォルトの提案に思わず声を出してそう答えていると、近くで同じくティランピオンの攻撃を避けていたすずの聞こえたのか、すずの問い掛けに言葉を返す。

『あの技』……ヴォルトと契約して、習得した技……。確かにあの技なら、ティランピオンの動きを止め、絶大なダメージを与えられるけど……その威力の反面、僕はヴォルトのサポートがあっても、かなりの体力消耗をしてしまう。

あの技を使うのなら、確実にその一撃で倒せる場面で使わないと、使い所を間違えた途端、僕は行動不能になって相手の的になってしまう。

……どうすれば……。

「――：分かりました。私が：私達があのだティランピオンの隙を作ってみせます。その瞬間に、衛司さんは『あの技』というのを願います」

「すずちゃん……分かった、任せる」

すずの提案に僕は思わず少し驚いてしまうも、すずの真剣な表情に、僕は肯定する。こんな表情で頼られてしまった以上……やりきってみせる。

僕の肯定の後、全員がアイコンタクトを取るとそれを合図に、メリアとすずがその場を跳んだ。

「――メリアさん……行きましようっ！」

「……ん……っ！！」

すずとメリアがそう言い合った瞬間、二人の姿が消える――いや、かなりのスピードでティランピオンの周りを跳び回っている。

『キシヤッ!?!』

流石に二人共、職業が忍者なだけあってそのスピードは素早く、僕

達ですら姿が確認出来ない。ティランピオンも二人の姿が確認出来ず、見事に攪乱されている。

ティランピオンの意識がずすとメリアに向いている隙に、ユーリがティランピオンの懐へと先行する。

『キシヤツ!?!』

「遅えっ! 幻狼斬…からの、蒼破っ牙王撃ッ!!」

ティランピオンは懐へと入ったユーリに遅れて気付くも、ユーリは素早くティランピオンへと切り込み、ティランピオンの背後へと回り込むとそのまま続けて、斬撃と拳を思い切り叩き込む!

『ギシヤアアッ!?!』

「よっし! 今だ、衛司っ!!」

「うん! 行こう、ヴォルトっ!!」

『(――はい、決めましょう主!!――)』

ユーリの攻撃を受け、ティランピオンは吹き飛び体制が崩れる。ユ



ーリの合図を受け、僕とヴォルトは呼吸を合わせると、その瞬間、僕の周りに様々の色の輪……オーバーリミッツ限界突破が発動される。よし……行けるっ!!

「――雷の精霊よ……今此処に……っ！行って、ヴォルトっ!!」

「――参ります、主っ!!」

体制を崩したままのティランピオンに木刀の切っ先を向け僕が言う  
と、僕の体から雷の球体状の膜を張ったヴォルトが現れ、ティラン  
ピオンに向け一撃、また一撃とライトニング・シエルを利用した突  
撃を連続して与えていく。  
そして、ヴォルトの突撃が直撃した位置から雷で形成された巨大な  
鎖が、体制を崩したままのティランピオンの体を拘束していく。

『（――拘束完了。主、行けます!――）』

「これが…僕の全・力・全・開っ!! ハアアアアアッ!!」

ティランピオンの体を完全に雷の鎖で拘束し、ヴォルトが僕の体の  
中へと戻ってくると、ヴォルトの魔力を木刀へと集中させ、オーバ  
ーリミッツの力で上昇した脚力で一気にティランピオンへと接近す

る。

木刀はヴォルトの魔力を受け、刀身に雷を纏っていく。  
これで……どうだあっ!!

「『――雷・神・一・閃っ!!』『ライティングノヴァ』アアアアア  
ッ!!」

『ギシャアアアアアアッ!!?』

僕とヴォルトの声が重なり、拘束されたティランピオンの横を通り  
抜け様に一閃する。

木刀を納刀するように納めたと同時に、ティランピオンの体を斬ら  
れた位置から電撃が蹂躪し、ティランピオンは甲高い奇声を上げて、  
絶命した。

「――何とか、仕留められたみてえだな」

「これで、ヘーゼル村の皆さんも無事に砂漠を越えられますね」

「……ふう…良かった――あう…?」

絶命したティランピオンを見てユーリがニッと笑い、さすがに安心し  
た表情でそう言うと、僕も一安心した瞬間、体の力が抜けるのを感じ

じてその場にへたり込んでしまった。

「!？衛司さん…どうしたんですか…？」

「…あはは…オーバーリミッツに、ヴォルトの魔力フル活用……さ  
っきの技の反動もあって…完全にガス欠状態みたいでーす……」

「オイオイ。……まあ、さっきの技見りゃ納得出きるわな…。立て  
そうか…？」

心配そうに僕を見るすずに苦笑しながらそう答えると、呆れながら  
も僕に手を伸ばしてユーリがそう言う。

試しに力を入れてみるけど……うん、駄目っぽい。

「（ヴォルト……どうかな…？）」

『（――今、主の身体の状態を見てある程度治せる所は処置に掛か  
りましたが……暫くは自分から立つのは無理そうですね――）』

一応体の中にいるヴォルトに状態を聞くと、帰ってきた答えに思わ  
ず更に苦笑いを浮かべてしまった。僕のその表情から僕の状態が分  
かったのか、ユーリが僕に肩を貸して立たせてくれた。

「やれやれ……んじゃあ、戻るか」

「はい。そうですね……メリアさん……？」

ユーリに立たせてもらいながらユーリの言葉に頷いて帰ろうと歩き出した際、不意にすずの声に視線の先を見ると……メリアが遠くにある高い岩場をメリアには珍しく、まるで睨むようにジッと見ていた。

「……どうしたの、メリア……？」

「……何でもない……。……多分……。……気のせい……。……」

「……………?」

僕の問いに、メリアは岩場から視線を戻して小さく首を横に振って答えると、そのまま来た道を歩き出した。

僕達は思わず小さく首を傾げてしまったが……とりあえず船へと戻ることにした。

それにしても……体……すぐに戻るかなあ……?」

「――やれやれ……ちょっと気付かれかけたかな？」

衛司達がその場に背を向けて歩いていく中――先程メリアが見ていた岩場には、紫の髪に青白い顔をした男――サレが居た。

「……アドリビトム、ねえ……大事な働き手を奪ってくれた報い、必ず受けてもらうよ。……でも、今日はヴェイグがいないみたいだし、僕と遊ぶのはまた今度にしようか……。楽しみにしているよ……フッフ……」

去っていく衛司達の姿を見ながら、つまらなそうにサレはそう呟いた後、小さく不気味に笑みを浮かべながらその場を後にするように、背を向け歩き出す。

「――それにしても……彼は『使えそう』だね。まあ……彼を『使う』ならもうしばらくは離しておいてもいいか……フッフ……」

サレは思い出したようにそう呟いて笑うと、歩いていた足を止めて振り返り、去っていく衛司達を見ながら不気味に、笑みを浮かべた。

——その視線の先に……去っていくアドリビトムのメンバーの中……  
…乾衛司の姿のみを映して……——

## 第二十八話（後書き）

相変わらずぐっだぐだですとも↑↑

はぁ……不安です……orz↑↑

さて、とりあえず今回出した、秘奥義『ライトニングノヴァ』ですが……分かる人には分かってますが、元技はエクシリアの革命の翼様ですww↑↑

ただ攻撃モーションが原作の翼様とは違い、翼様の場合

剣で連斬↓鎖出現↓ラストに踏み込み一閃

でしたが、衛司君の場合は最初の剣で連斬部分と、鎖出現部分はヴオルトたんによってもらってます↑↑

そして使用後にぶっ倒れるのは相変わらずですww  
衛司君にチートは似合いませんからww↑↑

そしてサレ様は……まあ気にしないでください↑↑

さてさて次回は……どうなるかな？↑↑

とりあえず、次回も更新、頑張ります！



## 第二十九話（前書き）

早く完成したので更新＋

ですが……今回は色々と適当になってしまっているかもです；；  
ある意味原作介入がこの次のイベントに続けて難しい場面ですから  
……；

不安だわー……orz↑

後、後書きでちょっとした意見求めがあるので、よろしければ目を  
通してみてください；

※文が荒い↑

※やや無理やり……かも……；；

## 第二十九話

「――ふうー…やっと出られるようになったあ…」

――医務室の扉から出ながら、僕はゆっくりと伸びをしながらそう言葉を出した。

ティランピオンを倒したあの後、僕達がアドリビトムに戻ると、ヘーゼル村の人達をオルタ・ビレッジへの案内を無事に開始し始めた。ウェイグ達も無事に連行されたヘーゼル村の人達を救出、オルタ・ビレッジへと案内できたらしい。

ただ――あの後…僕は案の定、体の状態云々のおかげで、医務室に五日間監禁されてしまった。

僕、最近こんなばっかだな……。アニーが戻って来た時、笑顔で『衛司さんは本当に、医務室のベッドが気に入っているんですね♪』と言われた時は本気で泣きそうになった。

『（――…主、目から涙が……―）』

「……違うよヴォルト、これは汗なんだよ…」

『（――…お察し致しました……―）』

あの時のアニーの清々しい位の笑顔を思い出してしまい、不意に瞳がうるっと来る。頭に響いてきたヴォルトの声にそう返して置くと、ヴォルトは短くそう返してきて、静かになった。

うん、ありがとうヴォルト。

後、ヴェラトローパを呼び寄せる為の次元チューニング装置の方だけど…どうにも後一步の所で止まっているらしい。

なんでもその後一步に必要なのはヴェラトローパのドキュメントらしく、そう簡単に見つかる筈もなく、研究室の皆頭を抱えていて先が進んでいない。

——とりあえず、久しぶりに依頼でも受けようと、ホールへの扉を開いた時であった。

「——あ……衛司……！」

ホールへと入ると、ちょうど目の前にスケッチブックを持ったカノンノが居た。彼女も此方に気付いたのか、少し驚いた表情で此方に駆け寄ってきた。

「もう体、大丈夫なの……？」

「うん、なんとかね……。カノンノは……また絵、描くの？」

「それもあるけど……実は描いた絵をセルシウスに見てもらおうと思ってる」

「セルシウスに……？」

カノンノの言葉に小さく首を傾げてしまう。どうしてまた…。

「うん。絵の風景に、精霊の世界とかあったりするのかなあって。…ヴォルトの時にみたいに知らないって言われちゃうかもしれないけどね…」

「なる程……って、ヴォルトにも一回聞いてたんだ」

『（――はい。主が医務室で寝込んで居るときに……。…お役には立てませんでしたが一――）』

カノンノの理由を聞き納得していると、頭に響くヴォルトの声に小さく苦笑を浮かべてしまった。

そういえば僕、医務室に寝たきりで暇だろうからヴォルトを体から出してた時あったけど…その時か。

「中々依頼に行ったりしてセルシウスに会えないから今日は居るといいんだけど…。でも、不思議だな。これらの風景がどこにあるって思ってるのが…」

「そうだね…。でも、ちゃんと僕は僕以外の皆が何と言おうが、本当にあるって信じてるからね」

「……………あ……………うん…、そうだね」

言いながら一瞬、どこかまた不安気な表情を浮かべたカノンノに僕がそう笑って答えると、カノンノは少し頬を赤らめて嬉しそうに頷いた。

「さて、それじゃ…………セルシウスが居るか甲板に行こっか？」

「え…衛司も一緒に来てくれるの？」

「僕も気になるからね…………あれ、駄目かな？」

「ううん、駄目なんかじゃないよ。…ありがとう、衛司っ！」

僕の言葉に、カノンノは少し驚くも嬉しげに微笑み頷いた。  
うん…自分に出来る範囲の事でここまで笑顔になってももらえるって  
…やっぱり嬉しいな。

――甲板に出てみると案の定セルシウスは居て、カノンノは絵をセルシウスに渡すと、セルシウスは一枚一枚じっくりと絵を見始めた。カノンノと僕はそれを期待半分、不安半分で見守っていると、暫くしてセルシウスの手が止まった。

「――申し訳ないけど…知らないわ。精霊は、この世界の事をヒトよりはわかるけども。知らないものばかりね…」

「……そう……。精霊にもわからないなら、やっぱりただの妄想だったのかな…」

「カノンノ……」

「ん……大丈夫。ごめんね、衛司…セルシウスも…」

返ってきたセルシウスの言葉に、カノンノは俯いてしまう。僕は落ち込んだカノンノの頭をゆっくりと撫でると、カノンノはそう言っ  
てセルシウスからスケッチブックを受けとろうとした。

「――あら、一枚落ちたわよ？」

「あ…、いけない……」

「よいしょ…つと……」

受け取ろうとした際、一枚の絵が落ちたのに気付き、風にとばされる前に僕はそれを拾った。

これもまた変わった風景だなあ……。

「!?!?…これは……」

「セルシウス…?!?…まさかっ!!」

「この風景、知ってるの…?」

僕が見ていた絵を覗き込んできたセルシウスは驚いたような表情と

声を上げた。その様子に僕とカノンノは思わず、驚いた表情のままのセルシウスに問いかける。

「知ってるも何も…。あなた、これがヴェラトローパーよ！ヒトの祖が地上に降りるまで過ごした…」

「えっ！？…これが…ヴェラトローパーの…」

「本…当に？」

セルシウスの返答に思わず驚く僕とカノンノ。これがヴェラトローパーの…でも…なんでカノンノが…。

「その絵を持って、研究室の皆に見せなさい。私はディセンダーを呼んでくるから…衛司…あなたはカノンノと一緒に研究室へ…いいわね？」

セルシウスはそう言うと、ホールの方へと入っていった。

カノンノの方を見ると、ヴェラトローパーの絵をジッと見ながら…真剣な、そして不安気な表情を浮かべていた。

「……カノンノ……」



「……うん、大丈夫。大丈夫……だけど……っ」

僕の呼びかけにいまだに真剣な、不安気な表情を浮かべたままそう言葉を繋ぐカノンノ。僕はそんな彼女に……そっと手を伸ばして、彼女の手を握った。

「衛……司……?」

「……今はこうするしか出来ないけど……行ってみよう、カノンノ……」

「……うん」

僕の言葉に、カノンノは少し間を開けながらも僕の手を握り返し、ゆっくりと頷いた。

「——この風景が、ヴェラトロローパ……?」

——研究室にて、カノンノが描いたヴェラトローパーの絵とセルシウス  
スの説明を聞いて、全員が驚いた表情をしていた。  
因みに今研究室にいるのは僕、カノンノ、メリア、セルシウス、リ  
タ、ハロルド、ウィルである。

「……しかし、カノンノがなぜそれを？」

「わかりません……ただ、いつもの様に紙の上に風景が見えて……」

依然、驚いた様子のままのウィルが問うと、カノンノは不安気な表情で、そう答えた。

「……これは、どういう事なの……？……カノンノ、あんたのドキュメントを見てもいい？」

「っ……リタ……それは……」

「衛司……大丈夫だよ……」

リタの出した言葉に、思わず反応してしまう。ドキュメントの展開……あれは一度体験しているからわかるけど……ただ少し展開しただけでも疲労感が凄い。それに今の不安状態のカノンノに、ドキュメントを

展開させたら…彼女に更に負担を掛けてしまうかもしれない。

そう思ってカノンノの前に立とうとすると…そう、カノンノに呼び止められてしまった。

顔を向けると…カノンノは真剣な表情で真っ直ぐとリタを見ていた。

…こんな表情されたら…止められやしないや…。

僕が道を開けると、カノンノは深呼吸をしてリタの前まで歩み寄る。リタはそれに頷くと、カノンノのドキュメントの展開を始めた。

「……衛司……」

「…大丈夫だよ、きっと……」

ドキュメントが展開されていくカノンノを、心配そうに見ながら僕を呼ぶメリアの頭をそっと撫で安心させる。

徐々に展開されていくカノンノのドキュメント。それは以前見た白い輪だが…最後に展開された頭上のドキュメントだけ、色が違っていた。

「——この頭上のドキュメント…ハロルド、あんたのドキュメントと比べたいの。いい？」

「オッケー」

リタの問いにハロルドが軽く答えると、リタはハロルドのドクメントを展開する。展開されたハロルドのドクメントの色は…カノンノの頭上のドクメントとは違い、全てが白であった。

「…やっぱり…カノンノの頭上に見えるドクメントは普通のヒトとは違う…」

リタの言葉に、一瞬カノンノの表情が変わったのが見えた。

「…感じるわ。この中にヴェラトローパを…どうして、カノンノの中に…？」

「ちょっと、本当なのっ！？…だとしたら、…さらに展開すればヴェラトローパのドクメントが手には入る…」

「それって…そんな事したら、カノンノの身体に負担がっ！！」

「ううん、続けて。ヴェラトローパを出現させる為に必要でしょう…？」

セルシウスとリタの言葉に思わず声を荒げてしまうも、カノンノがそう言葉を出した。

確かに今…ヴェラトロローパを出現させるのに必要なドキュメント…その唯一の手段が今、カノンノしか無いのだ。  
くそっ…自分にも出来ない歯がゆさに思わず舌打ちをしてしま  
う。

「……わかった。じゃあ、少し我慢して」

リタは頷いてそう言うと、カノンノの頭上のドキュメントを更に展開しようとする。  
少しして出ていた色の違うドキュメントの上に更に大きなドキュメントが展開された。

「これよ。ヴェラトロローパのドキュメント!!」

「ちょっと待ってよ。――よっし、コピー出来たっ! 可視化を解除するわ!!」

セルシウスの言葉に、リタは現れたドキュメントに手を伸ばす。すると、リタの別の手に小さめなヴェラトロローパのドキュメントが現れた。リタはそう言葉を出すと、カノンノとハロルドに現れていたドキュメントが消えた。

そしてその瞬間……カノンノの身体が傾いたのが見えた。

「っ！！カノンっ！！」

カノンノの身体が動き出した瞬間その場を走り出し、彼女の身体が床に落ちる前に何とか抱き止める。皆はそれがわかったと同時に、カノンノに駆け寄ってきた。

「……やっぱり、かなりの負担だったのね。肉体とドキュメントにズレが生じたのかも」

「っ……とにかく早く医務室に運ばないと……」

「そうね、よく休ませてあげないと……衛司、医務室まで運んで上げて……こっちはヴェラトローパへ行けるようにしとくわ」

ハロルドの言葉に僕は頷くと、カノンノを抱き上げて、医務室へと走り出した。

改めて……自分に何も出来ない事に歯がゆさを感じながら……。――。

## 第二十九話（後書き）

相変わらずぐだぐだですとも↑↑

ああ…もう色々不安orz↑↑

さて、前書きにも書いてありましたが、ちよつと皆様に意見求めです。

…と、いうのも…次話についてですが…ちよつと悩んでいます。

次話にて書く内容を、原作通りヴェラトローパ探索にするか、カノンの看病にするか、を…↑↑

原作通りのヴェラトローパ探索ルートの方は主に原作通りの流れでメリア、ニアタ、ラザリスとの話が主となります。

カノンノ看病ルートの方は、ヴェラトローパ探索はメリア達に任せ、衛司君がただただカノンノと話ながらカノンノの看病してます↑↑

とりあえず…皆様宜しければご意見宜しくお願いします＋  
先に行つときますけど両方は絶対無理です、はい↑↑

期間は十一月三日まで。良ければ感想等もあれば宜しく願います十

皆様改めてご意見宜しく願います十



## IF閑話―トリックオアトリート?―(前書き)

今回はIF閑話で、ちょっと遅めのハロウィンネタです+

自分なりに甘くを目指したけど……かなり無理したかな…↑

話は訪問者ごとに分けてますので、それぞれニヤニヤしながらお楽しみください+↑

※本編の流れの空気ぶっ壊し↑

※キャラ崩壊↑↑

※作者の妄想垂れ流し↑↑↑↑

※細かい事は、気にするな↑↑↑↑

## IF 閑話―トリックオアトリート?―

「――……ふう…やっぱりロックスさんの作ったお菓子はおいしいなあ―」

――アドリビトムの自分の部屋にて、僕はベッドに腰掛けながらロックスさんからもらったお菓子を食べていると、自然にそんな言葉を出した。

今日はハロウィンという事もあり（というかこの世界にもハロウィンがあった事にびっくりである）アドリビトムの仕事も休みで、僕はロックスさんからある程度のお菓子をもらって自分の部屋でゆっくりと休んでいた。

「――ん……?」

ふと不意に扉を叩く音が聞こえ、そちらに顔を向ける。声は聞こえないが、誰かが居るのは確かな事は分かる。

とりあえずお菓子を置いて立ち上がると僕は扉に近付き、ゆっくりと扉を開いた。

――すると、そこに居たのは……。

——ツンデレ僧侶の場合——

「——トリックオアトリートっ!!」

「——……は……?」

——扉が開いて目の前の現状に、理解出来ない僕は思わずそんな声が漏れた。

ハロウィン特有の挨拶をしながら扉の前に居たのはロッタだったのだが……その服装はいつもの僧侶特有の白を主とした物ではなく……黒のローブに黒い大きな帽子といった……属にいう魔女っぽい格好であった。

「……えっと……ロッタ……さん? 一体……何を……?」

「……っ……だから、トリックオアトリートっつってんでしょっ!! 私だって恥ずかしいんだから一回で理解しなさいっ!!」

予想外すぎる格好の訪問者に思わず混乱しながらロッタに聞くと、ロッタは顔を真っ赤にしながらそう怒鳴ってきた。……恥ずかしいって……ならしなきゃいいのに……。

「……仕方ないでしょ…食堂に居た皆がやる気満々でそれに巻き込まれたんだから…。…いいからさっさとお菓子を寄越しなさい、早く」

「うう…わかったよ…」

ブツブツといった後、ロツタは顔を真っ赤にしたままキツと僕を見るとそう言ってきた。

とりあえず見られて恥ずかしいのなら早く帰らせてあげようと思い、ロックスさんにもらったお菓子を取りにいかうとした時だった。

「……あ、因みにケーキ以外はお菓子と認めないからそこんところしく」

「いや、流石にないからっ!？」

お菓子を取りにいかうと後ろを向いた瞬間、背後から聞こえたロツタの言葉に思わずそうツツコンでしまった。というか…ケーキ以外認めないってどんだけお姫様…。

自然に漏れてしまう溜め息と共にロツタの方に向き返ると…何故かいつの間にか持っていたロッドを思いっきり振り上げていた。

「……あの、ロツタさん…何を……?」

「ん…? お菓子くれないから、悪戯」

「ケーキくれないから撲殺って一種の脅迫じゃないっ!?!」

「大丈夫大丈夫、痛くないから」

「いや、きつと痛いよ!?!」

ロツドを下ろす気を全く見せないロツタの姿に、思わず来るであろう衝撃に耐えるため目を強く閉める。いや…殴られる事になれてるのもあれだけど…。

そんな、いつ来るであろう衝撃に耐えようと強く目を閉じたままで居たときだった。

「——ん……」

「ん………っ!?!」

不意に、唇に柔らかな感触を感じて思わず目を開くと…感触が離れ

たと同時に直ぐ目の前にロッタの顔があった。  
—え……これって……？

「——ふふん、……ごちそうさま♪」

ロッタは僕から直ぐに離れて扉の前でそう、頬を染めながら笑って  
いうと、部屋の外へと走り去っていった。  
残された僕はと言うと……。

「……あうあうあう……」

あまりにも唐突かつ不意打ちなそれに、顔を真っ赤にして悶えてい  
た。

彼女に取っては『お菓子』なそれは……ある意味、僕に取っては大き  
な『悪戯』となっていた。

——ヤン☆デレディセンドーの場合——

「……トリックオアトリート……」

「……おおー……」

――扉を開けた目の前にはメリアが居た。ただ、その格好はいつもの服ではなく、黒を主とした服に彼女の背に合わせたようなマントと、吸血鬼を思わせる雰囲気醸し出していた。何気に八重歯が見えているのがリアルである。そしてその意外に似合っている姿に僕は思わずそんな声を漏らしてしまっていた。

「あ……どうしたの、その格好……？」

「ん……この格好してたらロックスが、衛司からお菓子もらえるって言ってたから……似合っていない……？」

「ううん、全然似合ってるよ」

「……………♪」

メリアの返答に思わず苦笑いを浮かべてしまうも、僕に聞きながら

小さく首を傾げるメリアに、僕はそつと頭を撫でてそう答えた。  
僕の返答か、はたまた頭を撫でられたのが嬉しかったのか、メリアは心地良さげに目を細めた。

うん……こういう所を見てると『怖い』っていうよりは『可愛い』だね。

「じゃあ、ちょっと待ってね。まだお菓子残ってたはずだから…」

「ん……」

そつとメリアの頭を撫でていた手を離し、そう言つてメリアから離れるとベッドの近くに置いていたお菓子を確認した。  
：どうやらお菓子は僕が食べそうになっていたのが最後のだったらしい。

「……トリックオアトリート……」

「うおうっ!?!…びっくりした……はい、お菓子」

「ん………♪」

最後のお菓子を見ていると突然背後から聞こえた声に驚き見ると、いつの間にやらメリアが僕の後ろまでついてきていた。



僕は小さく苦笑いを浮かべながらも最後のお菓子をあげると、メリアは嬉しそうにそれを頬張り出した。  
それにしても…メリアって『トリックオアトリート』の意味ってわかってるのかな？

「まあいっか……それにしても…本当、こういう所…可愛いなー…」

「……………♪」

嬉しそうにお菓子を食べているメリアが自然に可愛く見え、ついつい頭を撫でてしまう。

そのまましばらくすると、不意にメリアの動きが止まり、僕はどうしたのか小さく首を傾げてしまう。すると……

「衛司……トリックオアトリート……」

「……………へ……………？」

突然、メリアがそう言ったと思うと僕に抱きついてきた。トリックオアトリート……って……………？

「メリア……トリックオアトリートって…さっきお菓子あげたよね……？」

「…まだ足りないから……トリックオアトリート…」

「まだ足りないって…もうさっきのが最後……っ!？」

メリアの言葉に思わず苦笑を浮かべてしまいそう答えたと同時に…  
メリアの抱きついている力が強くなったのを感じた。  
まさかと思って離そうとするけど……全然外れない…!？

「メ、メリア……一体……?」

「……トリックオアトリート……お菓子くれないから……『悪戯』  
…しちゃう…」

「え……っ!？」

僕の問い掛けにメリアはそう淡々と答え、上手く理解ままの僕を抱きついたまま結構力付くで近くにあるベッドへと押し倒してきた。  
押し倒した僕の上に、メリアは馬乗りになり、じっと僕の顔を見ってくる。それに理解出来ないままの僕は思わず…恐怖を感じてしまう。

「メ、メリア……さん……?」

「えいじ……いただきます……♪」

「え……ちょ、まっ……んんー……っ!?!」

——その後、僕はメリアにたつぷりと『悪戯』をされました。  
……え、どんな悪戯か……?  
……聞かないで……あの時のメリアは……あんまり思い出したくないから……

——デレデレ夢描き少女の場合——

「——ト、トリックオアトリート…っ!!」

「——ぶっ…!?!」

——扉を開いて目の前に広がった光景に思わず吹き出さずにはいられなかった。

扉の前に居たのはカノンノ…なんだけど…何故か…猫耳に猫の手、猫の尻尾といったある意味究極の装備をしていた。

「ううー……」

「……とりあえず……入る……?」

カノンノ自身かなり恥ずかしいのか顔を真っ赤にしながら俯いて唸っており、とりあえずこの状態で部屋の外に出しっぱなしもアレなので部屋に入れる事にした。

カノンノは小さく頷くと、依然顔を真っ赤にして俯いたまま部屋の中に入ってきた。

そのままカノンノをベッドに腰掛けさせると、僕はその隣に腰掛けた。

「それで単刀直入に聞くけど……その格好どうしたの…?」

「う……それは……その……ロックスがこういう格好していったら衛司は嬉しいだろうって……」

僕の問いに、カノンノはもじもじとしながら恥ずかしそうにそう言っていた。

ロックスさん……アンタって人は……。カノンノもそんなに恥ずかしいのならわざわざしなくてもいいのに――

「……やっぱりその……似合わない、かな……?」

「いえ、かなりどストライクです。じゃなくて……全然可愛いよ、カノンノ」

うん、ごめん。いま嘘ついた。ちょっと涙目な猫耳装備のカノンノって……ロックスさん、グッジョブ。

僕の言葉が嬉しかったのかカノンノは恥ずかしそうに俯いた。……何だろう、この可愛い生き物。

「え、えっと……お菓子食べる?」

「う、うん……」

二人して思わず顔を真っ赤にしながらかきまぜい空気にそんな

会話しか生まれず、二人でお菓子を食べ出す。

そのまま何分…もしかしたら何時間かも分からない空気の中、不意にカノンノが顔を上げ、どこか決心したような表情を見ると、じつと僕を見てきた。

「…?…どう…したの…カノンノ…?」

「え、えっと…私って…可愛い…?」

「え、う、うん…凄く可愛いけど…」

カノンノは僕の答えに、嬉しそうな表情を浮かべた後、もじもじとしながら少しして…猫を連想させるようなポーズをすると恥ずかしそうに……

「——う、嬉しいにゃん♪」

—そう、言った。

「……………」

「え、えっと……え……衛司……？」

「……カノンノ……トリックオアトリート……？」

「……え……？」

「うん、お菓子くれないから悪戯するね。因みに答えは聞いてない」

「え、衛司？ちょっと、待っ——にゃんっ!？」

———その後、僕はカノンノにたっぷりと『悪戯』をした。  
え、どんな悪戯かって…？  
聞かないでよ、…恥ずかしい。



**IF 閑話―トリックオアトリート?―（後書き）**

ついやっちゃったんだ☆↑↑↑

すいません、本当にすいませんorz↑↑↑

色々思いついて書かずにはいられなかったんだっ!↑↑↑↑

今回はアレですね、キャラ崩壊ハンパないですよね…↑↑↑

色々本当にサーセンっした↑↑↑

良ければ感想も宜しくお願いします十↑

最後に…猫耳、猫の手、猫の尻尾装備カノンノは、最早兵器っ!  
！（キリッ↑↑↑

### 第三十話（前書き）

久しぶりの投稿です＋

ただ久しぶり過ぎて…自分でもわけわからない文が完成した；  
らく今回は批判来てもおかしくない↑  
恐

やっぱり感覚開くと大変です；；

今話は次話に向けての繋ぎ感覚でお願いします…マジで↑

いずれ修正かけないとなー；

## 第三十話

——あの後、再完成した異次元チューニング装置はカノンノのドクメントと共鳴し、無事に天空の宮殿『ヴェラトローパー』を呼び寄せる事に成功した。

今はそのヴェラトローパー探索に向けて皆が忙しくしている中……僕はただ、医務室でカノンノが眠っているベッドの横に腰掛けていた。

あの時、カノンノが倒れてから……彼女はまだ目を覚ましてないのだ。

「——衛司様。まだ、此処に……？」

不意に背後から声が聞こえ見ると、そこには心配そうな表情をしたロックスさんが居た。

「……うん。心配だから…ね」

「そうですか……お嬢様はまだ……？」

ロックスさんの問いに、僕は眠るカノンノの方を見てゆっくりと頷いて答える。

「……僕は……やっぱり弱いね…」

「…衛司様…？」

「彼女が…カノンノが苦しみながら頑張ってる時に…ただ見守る事しか出来ないなんて…」

そう、僕は言葉を漏らしながら思わず拳を作り、それを強く握り締める。

「…それは私も同じです。お嬢様が苦しんでいるのに、何も出来なかった。…それに決して衛司様が弱い訳ではありません。ただ…今回に関してはお嬢様にしか出来ない事であった。そしてそれは、お嬢様の意志からでもあった。だから…衛司様が悔やむ事ではありません」

「——っでも…っそれでも…っ！」

ロックスさんの言葉に、それでも荒げて言葉を出そうとする僕。それにロックスさんは此方に飛んでくると小さく首を振った。

「いいえ、何度でも言いますが、衛司様は決して弱くなどはありません。それに……今回お嬢様から進んでドクメントの提供に出たのは、きっと衛司様のおかげだと私は思います」

「……え……？」

ロックスさんの出した言葉に、思わずそんな声が出た。  
それって一体……。

「お嬢様が書いた風景……それを書いているお嬢様は楽しそうで……それでいてどこか不安に私は見えていた時がありました。ですが……衛司様と絵の事で話すようになってからは、お嬢様は絵を書いている時に、とても楽しそうに見えました」

そう、ロックスさんは言葉を続けていく。

「……もし、お嬢様がアナタと会えずに……絵の事を誰にも深く話すことがなければ……あくまで私の推測ですが……お嬢様は『自分は何なのか』という不安に押しつぶされていたでしょう。……ですが、アナタが……衛司様が今此処にいたからこそ、お嬢様は前を向いて、自らの意志で前に踏み出せたんだと、私は信じてます」

「――これを聞いてまだ、自分は何の役にもたてていないと思っているのであれば……」

ロックスさんはそう言い掛け僕の目の前まで飛んでくると僕の顔を見て微笑を浮かべて言葉を続けた。

「――お嬢様の目が覚めるまで、できる限り傍に居てあげてください」

「え……？」

「きっとその方が、お嬢様もすぐに目を覚ましてくれると私は思っていますから」

上手く理解できないままの僕にロックスさんはそう言うのと再び飛び、医務室の扉の前まで行くと此方に振り返った。

「――アンジュ様やメリア様には私から話をして、今回の探索には衛司様と一緒にいけない事はもう伝えてありますから。…お嬢様を宜しく願いますね」

「あ……うん」

ロックスさんの微笑ながらも何処か真剣な表情に、僕は頷くとロックスさんは一礼して医務室を出て行った。

「……僕が傍にいた方が目が覚める、か」

ロックスさんが居なくなり、再び顔を眠るカノンノへと向けると、先程のロックスさんの言葉を思い出し自然に口から出してしまう。

「……カノンノ……遠い目標かもしれないけど……僕は皆を……カノンノを守るくらい——強くなりたい」

目の前で眠り続ける少女の手を握り、僕は言葉を漏らしていく。彼女に今届いているかは分からない。ただ、自分の目標を口に出した。

「――……ん…寝ちゃった…かな…？」

ふとゆっくりと目を開き、ぼやけた視界を目で擦る。どうやらカノンの看病をしている間にいつの間にやら寝てしまったみたいだ。カノンノに悪い事しちゃったな…。

そう思い、いまだに眠っているだろうカノンノへと視界を向けると…。

「――おはよう、衛司」

にっこりと笑顔を浮かべたカノンノが此方を見ていた。

「カノンノ……目が覚めたんだ…良かったあ」

「うん。まだちょっとクラっとするけどなんとかね。衛司のおかげだよ」

カノンノの様子に僕は一安心していると、カノンノは少し苦笑を浮かべながらそう応えた。  
僕のおかげ…か……。

「――衛司……？」



「ごめん…僕はキミが言うほど役に立ててないよ。だって……」

「…自分は強くない、から…?」

「っ!？」

僕の言い掛けた言葉を繋げたカノンノに驚いた表情を浮かべる。な  
んで……

「…眠ってる時にね、うつすらだけど…衛司の声が聞こえてね…。  
ねえ、衛司……『強さ』って、何？」

「え……それは……」

カノンノからのその問いかけに思わず口ごもってしまう。

「…誰かが倒れた時に落ち込む事? 誰かの背中を追い越すこと? …  
違うよね。少なくとも…私が知ってる『強さ』は…衛司が教えてく  
れたから、今の私が居るんだから」

「…僕が……？」

「うん。それで…その『強さ』は、私が知ってる中だと多分…ううん、きっと衛司が一番だと思うよ。お人好しな衛司なら」

カノンノの言葉を聞きながら僕は考える。  
彼女の言う『強さ』……それって一体…。

「分からないなら宿題。分かったら私に一番に教えてね」

「え…宿題って…」

「教えな…い。衛司が本当に困ってた時に、もしかしたら教えてあげるかも？」

考えこんでいる僕にカノンノはクスクスと笑うとそう言った。  
本当によく分からないけど…少し落ち着いた気がした。

彼女のいう『強さ』って…本当、なんなんだろう。

そんな事を考えながら、いまだにクスクスと笑い続けるカノンノにつられ、自然に笑みがこぼれようとした時だった。

——ゴゴゴゴッ!!

「「!!?」」

突然、ヴェラトロローパ探索で空に浮いている筈のバンエルティア号の船内が、まるで地震を感じたかのように大きく揺れ出した。

「え、じ、地震…っ!?!」

「いや、違うはずだけど…一体何が…」

「——衛司っ!!」

今バンエルティア号が飛んでいる事を知らないカノンノが出した言葉に首を振って答えていると、医務室の扉が開き、慌てた様子のアンジュが飛び込んできた。

「アンジュ!どうしたの…?」

「カノンノ！？目が覚めたみたいね……ちょうど良かったわ。二人共、大変よっ！！」

「大変って…一体何が…」

「説明するより見た方が早いわ。とにかく、甲板に来て！！」

慌てながら言うアンジュに僕とカノンノは頷くと、僕は上手く動けないカノンノを背中に背負い、甲板へと走り出した。

「――これは……一体……」

カノンノ、アンジュと共に甲板に出ると甲板から見えた光景に思わずそんな声が出た。

地面からまるで木々が生えるかのように現れた…『白』よりも『灰』に近い色をした巨大な『ナニカ』。先程の揺れはこれの出現が原因で地面が……いや、大袈裟かもしれないけど…『世界』が震えたん

だろう。

「――…まるで『キバ』ね」

「牙……？」

「ええ、あれを『キバ』以外になんと言うのかしら？」

「…なんかアレ……嫌な感じがする」

アンジュの言う『キバ』を見ると、そうカノンノが言葉を出した。

確かにカノンノの言うとおり…あの『キバ』から何か嫌な感じがした。

「――…おーい、皆あつー！」

『キバ』を眺めていると、不意にヴェラトローパーの方から声が聞こえ見ると…慌てた様子のキール、それについてメリア、ジュデイス、アルヴィンがこちらに走ってきていた。

——この『キバ』の出現に、事態は刻一刻と最悪な状況へと進み出していた。

### 第三十話（後書き）

ぐっだぐだだぜ☆↑↑

やっぱりオリジナル入れて、感覚開くと自分でも書きながら何書いてるか訳わかんなくなってますね、はい↑

はぁ…泣ける↑

次回はちょこっとオリジナルが入ります。

少なくとも次回は今話よりも早く更新できると思います＋一応どんな感じになるか頭には整理できてますので。

今年中にVS若本さんまでいきたいな↑↑

## 第三十一話（前書き）

なんとか早く完成したので投稿＋

ただ前回同様自信がない…；

やっぱりオリジナル話って難しいなあ…；

※ぐだぐだ感あり

※無理やり感あり

※原作未登場キャラクター登場↑↑



## 第三十一話

——ヴェラトローパ探索から帰ってきたメリア達の口から説明された事：それは驚きの連発であった。

『マイソロ』設定の特有である、この世界『ルミナシア』は唯一無二のものではなく、別の世界から分かれた枝葉であった事。

そしてラザリスの正体は、その世界になりきれなかった存在であった事。

星晶<sup>ホスチア</sup>は、そのラザリスを封じておくための世界樹から生み出された力であった事。

そして僕が一番驚かされた事は……この世界にも『ニアタ・モナド』が居た事であった。

正確には彼の本体は別の世界にあり、この世界に居るニアタはその一部らしいけど……別の世界……恐らく『マイソロ2』のグラニデだろう。

僕も直接あってみたかったけど……ニアタは突如襲来したラザリスに攻撃され、破壊されたらしい。

後、『キバ』の事について。

あれは薄々考えていたけど……やっぱり、ラザリスの世界の一部であった。

ラザリスの目的…それは、自分の世界『ジルディア』の誕生を拒絶しながら、自ら自滅の道を歩む世界『ルミナシア』に失望し、世界樹の根幹『生命の場』のドクメントを書き換え、自分の世界へと塗り替える…というものであり、キバはその『生命の場』を守る世界樹を徐々に弱らせる物らしい。

これから何をどうするか……それは今現在、ニアタから手掛かりになる、と言って渡されたプレートを解析してから決めていくらしい。

果たしてこれから…どうなるのだろうか。

「——それで、アナタ達は一体どういったご用件でここまでいらっしやったのかしら？」

バンエルティア号のホール。いつもなら皆が楽しげな雰囲気を出していた場所が今、かなりピリピリとした空気を出していた。

まあ、当たり前だろう。今、ここに来て、アンジュが対応している客人達は…周りで見ている僕達にとっては警戒するべき存在なのだ

から。

そう、その客人とは……――

「――我々ウリズン帝国は、今これより、アドリビトムに協力を願いにきました」

――ウリズン帝国現王女であり、『テイルズオブリバーズ』で知られる『アガーテ・リンドブロム』と、ウリズン帝国騎士団第一師団隊長であり、同じく『リバーズ』で知られる『ミルハウスト・セルカーク』、そしてウリズン帝国騎士団総騎士隊長であり、『ヴェスペリア』で知られる『アレクセイ・デイノイア』なのだから…。

「――『協力』ねえ。今までの行動から、よくもまあ此処に来て平然とそんな事言えるな」

「――っ!!」

「落ち着け、ミルハウスト」

アガーテの言葉にピリピリとした空気の中、皆の心中を代弁するかのようにスパードが出した言葉に、ミルハウストはキツと周りを睨みつけてくるが、それをアレクセイが止める。

ミルハウストや周りの様子に、アガーテは顔を俯かせて口を開いた。

「…アナタ方の言うとおりです。我々の行動…無理やりな星晶の採取や、村人達の強制労働やその他諸々…謝って許されるとは思っていませんが今、深く謝罪します。ですが我々には…アナタ方アドリビトムの力を貸して頂きたいのです」

「…『暁の従者』の反乱に続き、あの謎のキバの出現…我々の領内の不安は大きくきている。我々も出来る限りの尽力を尽くし、協力がしたいのだ。だから…っ！」

そう言って頭を下げるアガーテ、ミルハウスト、アレクセイ。

ホール内がざわめく中、アンジュは一度溜め息を吐くと口を開いた。

「——正直な話、あなた方ウリズン帝国の今までの事を、謝っただけで『はい、そうですか』と許して簡単に協力しようとは少なくとも私は思わないわ」

アンジュの出した言葉に、頭を下げたままのアガーテが一瞬震える。そしてアンジュはそのまま『——だから』と付け足し口を再び動か

せる。

「あなた方には言葉よりも行動で見せてもらいます。本当に心から謝罪しているのか、私達が協力してメリットがある事なのか。更に条件として：あなた方が捕らえて労働させている無罪な村人達の解放、それと意味があるかは分からないけど：収集した星晶を元の場所に戻すこと。そして最後に：あなた方ウリズン帝国がこれからどうやって別の形で国を変えていくのか：それを確認出来たら、私達アドリビトムは協力します」

「——はい、分かりました。…ありがとうございます」

アンジュの繋げた言葉にアガーテはゆっくりと顔を上げそう言うのと、再度深く頭を下げた。

ミルハウストとアレクセイも、アガーテの様子にゆっくりと深く頭を下げた。

周りのピリピリとした空気が若干穏やかになってきた…そう思った時だった。

「——ちょっと待ってくれ」

そう言って前に出たのはユーリであった。アガーテ達がユーリの方

を向くと、ユーリは口を開く。

「協力願いの為に謝りにきたってんなら…なんでサレが居ねえんだ？このアドリビトムや村に一番の被害をもたらした原因のアイツをよ」

「……それは――」

「――陛下、それは私から説明させてもらいます」

ユーリのもつともの言葉に、アガーテは顔を俯かせ口を開こうとすると、それをミルハウストが止め真っ直ぐと僕達を見た。

そして……ある意味最悪な理由が出された。

「――……ウリズン帝国騎士団第三師団隊長サレは……『暁の従者』の反乱が起きた時、その争いに紛れ、数名の兵士と研究員…そして我々が収集した星晶の一部を奪い、失踪した」

その一言は、事態を更に最悪な方向へと向ける報告であった。

「――そっか。そんな事があつたんだ…」

「――うん。皆、かなりピリピリしてて大変だったよ」

――医務室にて、いまだ全快ではなく休んでいてホールでの出来事を知らなかったカノンノに説明すると、カノンノは不安げにそう言った。

サレの行方：結局ウリズン帝国はそれを知る事が出来ず、サレが一体何の目的で数名の兵士と研究員、そして星晶を奪って失踪したのか謎のままらしい。

一応兵をまわして搜索はしているらしいが、姿どころか情報一つ回ってきていないらしい。

サレ……多分、いやきつと『リバース』でのあの性格上、此方を妨害してくる事は確実だろう。警戒はしておかないとな。

「あ、そうだ。ヴェラトローパーの話、メリアから詳しく聞いてみたんだ。凄いよね…『ヒトの祖』って」

「うん、そうだね。…世界と共に、創造する為に地上に降りたんだ

っけ」

不意にカノンノが出した話題に僕は頷くと、メリア達から聞いた話を思い出しながら応える。

「私達、その『ヒトの祖』の子孫なんだなって思ったら、すごく不思議な気分。

不思議で、素敵な事だと思うけど……でも、今の世界はどのようなかな……」

「……カノンノ……？」

「戦争したり、奪い合ったり、欲しがったり。皆が皆、別々の方向を見てる。……世界樹は……、寂しがってないかな」

言葉が続けながら不安げな表情を浮かべ徐々に俯いていくカノンノ。その様子に、僕はそっとカノンノの頭を撫でると言葉を出す。

「……大丈夫だよ、きっと。ウリズン帝国だって、変わってくれたんだから……皆、遅くなってもきっと同じ方向を見てくれるよ」

「ん……そうだね、今悲観的になったらだめだね。世界を良くするために、アドリビトムはあるんだもん」



僕の言葉にカノンノは一度頷くと、顔を上げてそう言う。  
僕はそれを見ると、ゆっくりと頭を撫でていた手を離した。

「ん。ならカノンノも早く体調よくして依頼を手伝ってもらわないと。今もいっぱいいっぱいなんだから」

「うん！……ねえ、衛司」

「……ん…？」

カノンノの返事を聞き医務室から出ようと後ろを向くと、カノンノが僕を呼んだ。

「……世界が良くなったら…もしかしたらメリアは、予言の通りに世界樹へ帰らないといけないかもしれないんだよね…？」

「……もしかしたら…かもね」

ディセンダーの予言。それはディセンダーは世界を救うと、再び世界樹へと眠ってしまうという結末。  
定かではないけど…僕が『元の世界』で今までやっていた『マイソ

ロ』の通りならば…きつとメリアは眠ってしまうだろう。  
僕は言葉を濁しながらそう応える。

「……なら、衛司はどうなっちゃうの…?」

「……っ!!」

カノンノから出た言葉に、僕は思わず顔を歪めてしまう。  
僕には、メリアが世界を救った後……『僕自身』がどうなるかは分からない。

このままこの世界に居続けるかもしれないし…『元の世界』に戻るかもしれない。

…ただ、元の世界に戻っても

『僕自身が生きているかどうか』は……

「……衛司…?」

「……なんでもない。…どうなるのかな…僕自身にも分からないよ。イレギュラーな訳なんだし」

思考が巡り回っていると、不意に届いた不安げなカノンノの声に、

僕はカノンの方へと振り返ると苦笑を浮かべてそう冗談混じりに答えた。彼女の不安げな表情を見たくないから。

カノンはそんな僕に対し、ゆっくりと立ち上がると……僕の胸元に顔を埋めるように抱きついてきた。

「え……カノン……？」

「衛司……私は…君が居なくなったら……寂しいよ」

突然の事に呆然としてしまうが、抱きついたままそう声を出すカノンに僕はそっと頭を撫でて応える。

僕自身がどうなってしまいかは分からない。だから言葉で答える事は出来ない。

ただ、今この時だけでも、長く彼女と居たい。彼女を寂しがらせたくない。…そんな思いを込めながら……ただただ、彼女の頭を撫で続けた。

「――どうだい、全ては順調な方かな？」

「――はっ！今三割程、出来上がっております」

――様々な機器類が置かれた研究所のような場所。

そこで、一つの画面を見ながら青白い顔の男――サレと、研究員であろう白衣を着た男が話していた。

研究員の返答に、サレは不適な笑みを浮かべた。

「うんうん、順調でなによりだよ」

「はっ！ありがとうございます。：しかし、上手く完成するかの確率はいまだ50%ですが：」

「なに、失敗すればまた作り直せばいいさ。奪った星晶はまだまだ残ってるんだしね」

研究員の言葉に、サレは不適な笑みを浮かべたままそう応える。  
そんなサレの言葉に、研究員は首を傾げた。

「：サレ様らしくありませんね。『失敗しても構わない』、など」

「ん？ああ…答えは簡単さ。…『コレ』の持ち主になる人間には、もうちよつと『強く』なって欲しいからね」

「はあ……成る程」

研究員の言葉にサレはニヤリと笑いそう言々と再び画面へと視線を移す。研究員もそれに納得したのか、同じく一つの画面へと視線を移した。

「――そう。彼には『コレ』が完成するまでもっともつと…強くなつてもらわないとね……フッフ」

『コレ』と呼ばれる物が映し出された画面を見ながらそう言つて、サレは不適に、不気味に笑みを浮かべ続けていた――

### 第三十一話（後書き）

ぐっだぐだだぜ☆↑↑

やっぱり間が開いてたせいもあり、自分が思ってたよりも上手く書けてない…かも…;

早く感覚取り戻したいなー;;;

後、今回まさかのご登場の獣耳姫様にミキハウスにまさかのまいたけ様↑↑

ただ書きたかったただけだったりする↑↑

因みに、彼、彼女らは正確にはアドリビトムに参加する訳では無く、あくまで国として協力関係を結んだだけです。  
仮にも一国の王女に第一師団隊長に総騎士隊長ですから、国を空けっぱにできませんし。

故に次回登場するかも未定です↑↑

そしてサレ様は安定の伏線です↑  
やったね、サレ様!↑↑

次話は…出来れば某英雄キラー様まで書きたいですね↑

早くあの若本ヴォイスが書きたいです↑↑

感想等良ければ宜しくお願いしますす+

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3162s/>

---

テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー3 ―そして、僕の伝説―

2011年12月21日19時52分発行